

平成25年度版

平成24年度採択 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」

成果報告書

学校法人藤ノ花学園

豊橋創造大学短期大学部

目次

巻頭言	1
はじめに	2
1. 『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』概要説明	3
2. 文部科学省申請概略	7
3. 事業グループ活動報告	13
3. 1 4つの教育事業	15
(1) 長期にわたる就職活動に耐え抜くための「メンタルタフネス講座」の実施	17
(2) アクティブラーニングを活用した「自己理解促進講座」の実施	20
(3) 地域組織と連携した「プロジェクト活動」	23
(4) 「アクティブラーニング」の手法を使った教育経験の共有	28
3. 2 教育体制・産業界ニーズ把握体制の整備・連携推進	33
(1) 教育体制・産業界ニーズ把握体制整備	35
(2) 連携事業を反映した体制整備	36
3. 3 教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援	39
(1) ユビキタスキャンパスグループ	41
(2) 大学コミュニティグループ	47
4. 補助資料	55
① プロジェクト活動成果報告書（教員）	57
② 2013年度中部圏大学人材育成チャレンジ報告	89
③ 大学教育改革フォーラム in 東海2014出展資料	95
④ プロジェクト活動 協力企業・団体一覧	99
⑤ 各種発行パンフレット	103
⑥ 行事实績一覧	107



巻頭言

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」
事業推進代表者

学長 伊藤 晴康

豊橋創造大学・豊橋創造大学短期大学部は、地域密着型の高等教育機関として、藤ノ花学園の伝統である実践的教育を受け継ぎ、地域に貢献できる職業人を育成している。

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」に参画している情報ビジネス学部キャリアデザイン学科及び短期大学部キャリアプランニング科は、共に幅広い専門的職業人を育成することを目的として設置された学科である。各学科の教育目標は下記の通り学則に定められている。

情報ビジネス学部キャリアデザイン学科

生涯にわたっての高い就業能力をつけさせるため、健全な職業観と就業意識を育成し、経営学と情報学を基盤として時代の要請に沿った専門的職業教育を施すことを目標とする。

短期大学部キャリアプランニング科

短期大学部の教育理念に則り、社会人として求められる教養やマナーを身につけさせると同時に、健全な職業観、就業意識を育成し、情報学を基盤として時代の要請に沿った職業的教育を施すことを目標とする。

上記の教育目標に沿い、学生の就業能力を高めるために、地域の産業界と連携した実践的な教育プログラムとして実施された教育活動をまとめたものが本誌である。就業力育成のための実践的な教育の取り組み事例として、多くの方々に情報を提供できれば幸いである。このような地道な教育の積み重ねにより、地域に人材育成の面で貢献する大学として、今後も努力を継続したい。

2014年3月



はじめに

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」
事業推進責任者

豊橋創造大学情報ビジネス学部長 佐藤 勝尚

本報告書は、平成 24 年文部科学省にて採択された『産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業』の活動とその成果を取りまとめたものである。この事業は、三重大学を代表校とした中部圏 23 大学による「アクティブラーニングを通じた教育力」および「地域・産業界との連携力」を通して、教育改革力を強化する取組である。本学情報ビジネス学部ならびに短期大学部キャリアプランニング科は、東海 A チームに属して幹事校と副幹事校からなる中部地域大学教育改革推進委員会の調整のもと、連携 FD を通して教育改革の実践過程で生まれる成功と失敗を共有しつつ教育力を高め、中部圏産学連携会議を通して大学が育成しようとする資質と地域・産業界のニーズに関する対話を行うために『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』を展開するものである。このプロジェクトでは地域・産業界のニーズに対応した能力を育成するため、学生参加型授業、共同学習、課題解決学習や PBL などを教育現場に取り入れ、就業力に関わる学生の能動性を高める改革を進めるとともに社会現場での実践教育としてのインターンシップを高度化するものである。

本学では『大学生の就業力育成支援事業』として、これまで情報ビジネス学部・経営学部と同短期大学部キャリアプランニング科が共同で取り組んできた「持続型職業人 SOZO プロジェクト事業」を発展させ、『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』として次の 4 事業を柱とした事業展開を進め、学生の総合的な「就業力」の育成を図るものである。

本報告書をご覧いただき、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

豊橋創造大学短期大学部

地域産業界連携教育力改革プロジェクト

- ① 長期にわたる就職活動を耐え抜く「メンタルタフネス育成講座」の実施
- ② アクティブラーニングを活用した「自己理解促進講座」の実施
- ③ 地域組織と連携した「プロジェクト活動」
- ④ 「アクティブラーニング」の手法を使った教育経験の共有

2014 年 3 月

『地域産業界連携教育力改革 プロジェクト』概要説明

1. 『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』の概要

1. 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

本事業は、産業界のニーズに対応した人材育成を大学や短期大学などの高等教育機関で実施する体制整備を進めるための補助事業として、平成 24 年度に文部科学省に創設された事業である（以下「産業界ニーズ補助事業」と呼ぶ）。中部圏では、「アクティブラーニングを通じた教育力強化」と「地域・産業界との連携力強化」を目的とした 23 大学の共同事業として申請し、採択されている。

中部圏 23 大学では、主に教育改革力を探求する「東海 A（教育力）チーム」、産業界ニーズ把握方法を探求する「東海 B（産業界ニーズ把握）チーム」、「北陸地域チーム」、「静岡地域チーム」の 4 グループに分けて、教育方法や産業界ニーズ把握方法について考え方や方法論を取りまとめるとともに、それらを共有することによって、教育力向上を目指す事業になっている。

2. 地域産業界連携教育力改革プロジェクト

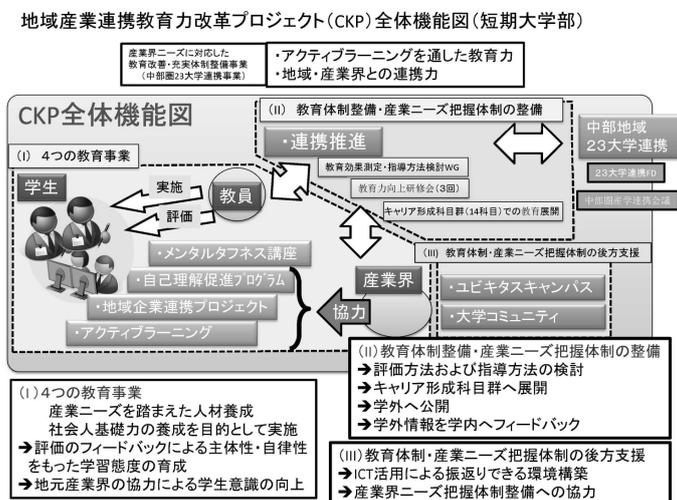
豊橋創造大学短期大学部では、「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備」（産業界ニーズ補助事業）への参画にあたって、育成すべき資質と、その教育体制および産業界ニーズ把握方法について検討し、「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」（Chiiki sangyokai renkei Kyoikuryoku kaikaku Project 略称して CKP と呼ぶ）を立ち上げ、教育体制・産業界ニーズ把握体制の整備を推進することになった。

本学では、社会人基礎力・就業力育成を目指し、そのための教育システムの構築を行う。また、人材育成に関する産業界のニーズを把握し、それを教育システムに反映させる体制整備を行う。

具体的には、3つの分野に分けて整備することにした。

- (I) 4つの教育事業
- (II) 教育体制・産業界ニーズ把握体制の整備
- (III) 教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト（CKP）」では、教員と事務職員とで 7つのグループを形成し、円滑な運営のために CKP 委員会を設置して、意思疎通を図っている。これらの機能全体は以下の図にまとめてある。



3. 地域産業界連携教育力改革プロジェクトの実施体制

本学では「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備補助事業」を「地域産業界連携教育力改革プロジェクト（CKP）」として実施する。「アクティブラーニングを通じた教育力強化」と「地域・産業界との連携力強化」を連携校の共通目的とし、本学は、社会人基礎力・就業力を育成する教育体制整備および産業界ニーズの把握のために、3分野、7つのグループに役割を分担して事業展開する。

（Ⅰ）4つの教育事業

- ①長期にわたる就職活動を耐え抜くための「メンタルタフネス育成講座」の実施
- ②アクティブラーニングを活用した「自己理解促進講座」の実施
- ③地域組織と連携した「プロジェクト活動」の実施
- ④「アクティブラーニング」の手法を使った教育経験の共有

（Ⅱ）教育体制・産業界ニーズ把握体制の整備

- ⑤連携事業推進

（Ⅲ）教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援

- ⑥ユビキタスキャンパス
- ⑦大学コミュニティ

7つの事業グループの詳細は、次章以降で説明する。

7つのグループ活動を統括するCKP委員会は、毎月1回の頻度で定例会議を開催している。その会議では、学習成果が議論され、予算の執行状況が報告されている。学習成果を向上・充実するためにPDCAサイクルを日常的に稼働させ、学習成果を評価するようにしている。毎年11月には、当該年度の振り返りをし、それを基に次年度の事業計画を策定し、年間スケジュールと予算を組み、年度末には成果報告書を作成している。

4. 情報公開について

CKP事業の実施状況については、適宜、本学のホームページで公開している。

毎年度末には、「成果報告書」を作成し、取組内容の概要、活動成果を紹介し、今後の活動への課題点を明らかにすることでPDCAサイクルを効果的に機能させている状況を公開している。

「成果報告書」については「簡易版」を作成したり、「プロジェクト活動」の概要を報告するリーフレットを広く配布し、本事業活動を広報している。

文部科学省申請概略



中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育改革力の強化 本学取組について

<p>本学取組名称</p>	<p>地域産業界連携教育力改革プロジェクト</p>
<p>選定年度</p>	<p>平成 24 年度</p>
<p>○学生の社会的・職業的自立のための取組のこれまでの実績について</p> <p>・これまでどのような方針・視点を持って取組を実施してきたか</p> <p>豊橋創造大学短期大学部キャリアプランニング科の教育目標は、「社会人として求められる基礎学力、教養やマナーを身につけさせると同時に、健全な勤労観、職業人意識を育成し、時代の要請に沿った専門的教育を施し、社会に貢献できる人材を養成すること」である。その教育目標を達成するためのカリキュラム構成であるが、受け入れる入学生が希望する将来の進路の多様化に対応するためにいくつかの専門ユニット群を用意する一方で、どの分野に進むにしろ社会人として要求される基礎力を培うためにコアユニットを設けている。全員必修のコアユニットでは、いわゆる社会人基礎力を養成するため、ビジネス文書を中心とした文書作成能力、計算・論理的思考力、情報リテラシー、経営の基礎、実務英語、マナーなどを修得する授業を、演習を取り入れながら実施している。教員は一方的な授業にならないように工夫し、ことあるごとに学生が苦手とする発表を課し、学生の側も授業に積極的に参加し、社会から要請されているコミュニケーション力を伸ばせるような機会を提供している。本科の名称を冠する「キャリアプランニングⅠ／Ⅱ」および「ビジネス実務総論」の授業では、働く意味を考えさせ、健全な勤労観、プロ意識、責任感といった職業人意識を身につけさせ、将来の職業的自立を支援する取組の基盤としている。これまでのすべての取組は、学生を人間的に成長させ、成熟させ、自立した人生を送ってほしいという意図から実施しており、従来から、上記の正課の授業と連携して、就職率を向上させ早期離職者を減少させるための課外活動を実施してきている。現在、ほとんどの大学が実施しているインターンシップについては、「インターンシップ」という言葉が流行る以前から「企業実務実習・病院事務実習」として実施してきている。また、時には学外の社会人講師を招き、学生に実社会を紹介する講演会を実施してきた。例としては、前早稲田大学ラグビー部監督・中竹竜二氏による「挫折と挑戦」というテーマでの講演会、東愛知日産社長・青木公貞氏による具体的雇用環境についての講義などがあげられる。</p> <p>平成 21～22 年度・大学教育・学生支援推進事業【テーマ B】では、「正課の授業と連携した総合的なキャリア教育支援」をテーマとして取組み、これまでの活動を学生が順序立てて学んでいけるような体系に整備した。具体的には6つの柱、「コミュニケーション力育成」「職業人意識の醸成」「自己理解」「ビジネスマナーの修得」「就職情報提供」「教員のFD研修」をキーワードとして諸活動を充実させ、学生の社会的・職業的自立を後押しする仕組みをつくりあげた。現在でも、それらを継続し、より発展・充実させて実施している。</p> <p>平成 18～20 年度・現代的教育ニーズ取組支援プログラムでは、「食をテーマとした地域活性化」という取組で、地域貢献を伴う実践的教育を行った。「食農教育」「食文化の伝達」「福祉サービス」「災害時炊き出しボランティア」という4つの分野で3年間にわたりいろいろな活動をした。「食文化の伝達」活動の中で、「地産地消」ということで地元の野菜を使った郷土料理を小学生に教える取組を行ったが、その取組は平成 24 年の現在でも、豊橋の公共施設「こども未来館ココニコ」での「大学生コックさんのクッキング教室」として継続実施しており、知識に基づいて実践するよい機会であり、本科で調理を専攻する学生の職業的自立にも貢献している。</p> <p>平成 22～23 年度・大学生の就業力育成支援事業では、「持続型職業人 SOZO プロジェクト」という取組で、「早期離職防止を目指したメンタルタフネスとスキルの育成」をテーマとして活動した。年2回「メンタルタフネス育成講座」を実施し、学生はメンタルタフネスの基礎</p>	

知識とモチベーション・コントロールの手法を学んだ。大学で学んだ知識を実践の場で活用する試みとして、ゼミの時間を活用して「プロジェクト活動」を実施した。2年間の試行錯誤期間を経て、これらの取組は、平成24年度も、より充実したものにするべく継続実施している。

上記3つの取組の具体的成果は、活動報告書として冊子にまとめてある。

・これまでの取組の成果を、どのようにカリキュラム・ポリシーに反映させてきたか

上記のような取組を踏まえ、平成22年度に3つのポリシー（アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシー）を整備した。本科の教育目標に基づいてディプロマポリシーをまず書き、これまで受け入れている学生の現状を加味してアドミッションポリシーを作成した。その後、その2つの差分を埋めるにはどうしたらよいかという視点からカリキュラムポリシーを書き、3つのポリシーの整合性をとった。これらのポリシーは「教育方針」として大学のホームページで公開し、オープンキャンパスでも高校生に説明している。カリキュラムポリシー冒頭に掲げている本科の教育目標は、具体的に6つの項目（社会人基礎力、職業人意識、マナー、教養、知的能力、専門知識）に項目化し、それぞれの能力分野をどの科目群で対応するのか明示している。「キャリアプランニングⅠ・Ⅱ」の授業内容には柔軟性を持たせ、高校から短大への円滑な接続を目的とする初年次教育としても機能させている。知的基盤としての「教養」は、生涯教育の出発点としても重要だと考え、学生が自由に選択できる「基礎教養ユニット」として配置している。これまでの先入観で科目を選ばないように指導しており、未知の分野と出会える機会になることを期待している。専門的な知識と実務能力を体系的に学べるようにいくつかの「専門ユニット」を設置し、学生に選択させている。学生の履修状況に応じて、各「専門ユニット」内の科目を増減したり、受講生の集まらない「専門ユニット」は廃止したり他のユニットに統合したりしている。正課外で実施していた就職支援活動の一部は、より一層の成果をあげるため、必修の正課授業に取り込むようにしている。「特別研究セミナー」は、これまで学んできた知識を、具体的な課題にあてはめて考える力を身につけるために設置している。

個々の科目については、毎年、科目名称は同じでも内容や教え方を見直したり、学生の要望・時代の要請に応じて入れ替えを行っている。1つの具体例を挙げれば、平成24年度から「ライフ・コーディネート」という科目を増設している。この科目では「お金」の面からライフプランニングを学び、幸せな人生を送るための知識を提供している。現在の学生には、税金、健康保険、年金、貯蓄、ローン、相続といった実際的な知識が欠如しており、そのことが将来の自立に大きく影響すると考えるからである。

このように、カリキュラムは固定したものを単調に繰り返しているわけではなく、教員のFD活動の成果を反映させたり、いろいろな取組の反省にもとづいて見直しを続けている。

○本事業において実施を計画している内容について

・短大における人材育成の現状と産業界のニーズとのギャップについて

短大における人材育成の現状と産業界のニーズとのギャップについて議論する際、よく指摘される点のひとつに「学生の主体性の欠如」がある。これは、短大生が入社してから、与えられた仕事をするだけで満足してしまい、どうしても周囲からの指示を待つ状態になりがちであり、これまでの仕事のやり方の改善に取り組むとか、現状のやり方の問題点を自ら発見し、抜本的な解決方法を工夫するといった積極的な姿勢が欠けているという指摘である。厳しい経営環境の中、企業は社員の少数精鋭化を進め、社内で人材育成をする余裕を失い即戦力となる人材を求めているが、新入社員の中には上司から与えられた仕事しかやらない人材も見受けられるようである。心配りができ、よく気がついて物事を先取りして対応しておいたり、全体の仕事の流れを俯瞰して自分のやるべきことを率先してやる、といった姿勢が実社会から求められているのである。一方、学生の立場から見れば、決して学生の能力が欠如しているわけではなく、たまたまこれまでの人生経験において、自ら課題を見出し、

それを解決するような機会を与えられてこなかったせいだと言うこともできる。大学全入時代においては、高校教育と大学教育の円滑な接続のために、各大学の学生支援がますます手厚くなる反面、学生が自ら行動を起こし主体的に活動する機会や、先入観にとらわれず物事を解決していく経験が減少してしまっているのではないかと懸念される。そのため、本科においては、学生の主体性を引き出し、産業界のニーズに応えるために、産業界ニーズ事業：東海Aチームにおける取組みにおいて「アクティブラーニングを活用した教育力強化と検証」の具体的展開を他大学と連携を取りながら以下の4つの事業を計画し実行する。

※「持続型職業人SOZOプロジェクト」事業について

「就業力育成支援事業」である「持続型職業人SOZOプロジェクト」は、継続事業として平成24年度も実施していくが、今回、過去2年間の取組を発展・充実させ、「就業力」育成のより一層の充実を図るため、アクティブラーニングの手法を活用し、新たに事業展開する。

① 長期に亘る就職活動に耐え抜く「メンタルタフネス育成講座」の実施

今回は、年2回の「メンタルタフネス育成講座」を実施する。1回目は、「ストレス」の基礎理論、2回目は「セルフモチベーション」講座である。知識を伝達する座学に加え、課題演習の機会を多く設け、学生が主体的に学習する場とする。アクティブラーニングの手法のうち、5～6人のグループに分けて実施する「グループワーク」や、グループ内での「ディスカッション」を積極的に取り入れ、学生にやる気を出させる工夫をする。各グループでまとめられた意見は、全員の前で「プレゼンテーション」させる。ステップごとに、「振り返り」シートを書かせ、学んだ内容の確認をさせる。メンタルストレスをコントロールし、リラックスするためのノウハウは、これから一生活用できるものであることを理解させる。

② 度胸をつけ、臨機応変に対応できるための採用面接担当者の擬似体験（ロールプレイ）

就職試験では、最終的には面接試験での言動・振る舞いが採用かどうかを決めることになる。このプログラムは、学生に面接を受ける学生の立場と、企業側の面接担当者の立場の両者を体験させるものである。特に、通常は経験することのない「面接担当者」の立場を体験させることによって、企業側の人事担当者がどのような視点から学生を評価しているのか、わからせることが主眼である。学生に企業側のニーズを理解させ、自己理解を深め、自らの職業観を形成させるのに役立つのである。具体的には、まず学生に志望企業に対する志望動機や入社後のそうありたい姿を事前に考えさせた上で、自分を積極的に売り込む模擬面接を実施する。面接担当者はキャリアセンターの職員や、社会人経験のある教員によって行い、実際の面接試験に近い形で実施する。学生は教職員からのフィードバックにより、志望業界、志望企業や志望職種に対する理解を深めることができる。次に、模擬面接が終了した学生は、今度は面接する側として面接担当者側に着席し、他の学生の面接の様子を観察したり、面接担当者の1人として質問したりする。学生は、この経験により、他学生の良い点や改善点を自分の場合に照らし合わせて学んでいくことになる。最後にグループごとに学んだ内容を「ディスカッション」させて、「グループワーク」の成果として、各グループに「プレゼンテーション」させた後、教員が総括し、学生に「振り返り」を促す。

③ 地域組織と連携したプロジェクト活動

地域組織・企業と関わりを持ちながら、企画・計画・実行するプロジェクトを立ち上げ、そのプロジェクトの運営を通して、学生自らが主体的に学ぶ「SOZOプロジェクト」を推進する。これまで学んできた知識が、実社会でどのように活用されているのか知る機会となる。学内だけの閉じた活動ではなく、学外へ出かけて行く何らかの「フィールドワーク」を含んだ活動である。実際のプロジェクトでは、いわゆるPDCAサイクルを回しながら物事を進め改善していく「プロジェクトマネジメント」の手法を経験する。プロジェクト全体を「タスク」に切り分け、段取りよく物事を進める手法を学ぶ。前もってリスク要因をリストアップしておくといったプロジェクト成功のノウハウを身につけていく。プロジェクトによっては、企業人のものの考え方、企業での仕事の進め方を垣間見ることになる。このプロジェクトマネジメントの知識は、パーソナル・プロジェクトマネジメントとして物事を進める視点を学生が持つことになり、将来ずっと使えるスキルであることを教える。

パソコンを活用した正課授業のリテラシー教育に加え、各学生に1台ずつ貸与した携帯情報端末（iPad）を活用し、就業後にも活かせるスキルを育成する。

プロジェクト活動では、教員の側は学生の主体性を引き出す「ファシリテーション能力」を問われることになり、教員の教育力育成にも役立つ。

④ アクティブラーニングの手法を使った教育経験の共有

「社会人基礎力」といったジェネリックスキルの育成は、初年次教育をどう進めるかといった問題とともに、どこの大学でも試行錯誤している課題である。各大学でのFD活動を活性化し、連携大学間で共有する仕組みをつくりたい。あらゆる局面で、アクティブラーニングの手法として5つ要素（グループワーク、ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り）を含むような活動を展開し、上記の活動の高度化を図っていく。連携大学間のFD活動合同報告会といった研究会において、各大学の教員・学生代表がプレゼンテーションを行い、お互いの評価・フィードバックを行いながら、各大学の教育力のレベルアップを図りたい。これらの成果は、ホームページで公開し、連携していない大学にも広めるようにしたい。

上記のように、アクティブラーニングの手法を最大限活用して、メンタルタフネス育成講座やプロジェクト活動を中心とした4つの事業を展開し、学生の主体性を育み、産業界のニーズと大学における人材育成のギャップを埋めるような活動としたい。

・支援期間終了後の運用について

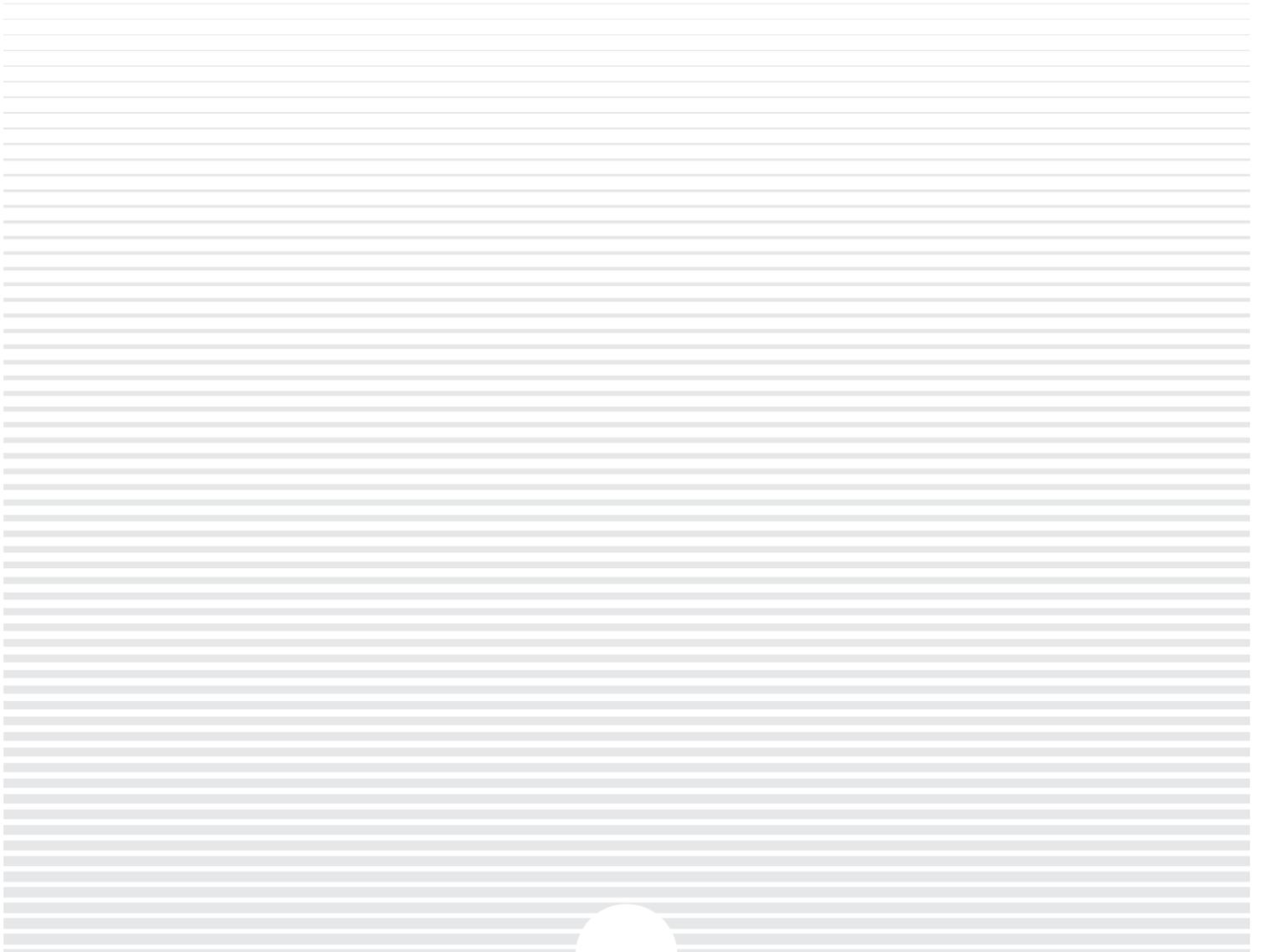
支援期間終了後も、連携大学間や協力企業との関係を維持発展させ、アクティブラーニングの手法を使いこなす経験を蓄積し、お互いに水平展開するようにし、他地域へもホームページや活動報告書による情報公開を積極的にすすめる。本事業を通して教職員のFD活動・SD活動を活発にし、学生の大学生活をより充実したものにする努力を続けることは当然のことである。

事業グループ活動報告

3

3.1

4つの教育事業



3. 事業グループ活動報告

3. 1 4つの教育事業

これまでの経緯

平成 22 年度に文部科学省の「大学生の就業力育成支援事業」の採択を得て、本学では「持続型職業人 SOZO プロジェクト」という取組を始めた。その取組は、「メンタルタフネスの育成」、「プロジェクトの実践」、「ユビキタスキャンパスの実現」、「大学コミュニティを活用した社会人基礎教育の展開」といった活動から構成されており、平成 23 年度には精力的に活動した。残念ながら事業仕分けの影響を受け、文部科学省の補助事業は中断されたが、平成 24 年度に入ってから本学は独自の「持続型職業人 SOZO プロジェクト」活動を継続実施していた。

平成 24 年度秋に、文部科学省の新たな「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」（以下、産業界ニーズ補助事業と略称する）の採択を受けたので、他大学との連携活動を中心軸に据えて、既に継続実施していた事業を見直し、すべての事業内容を深化・発展させている。

平成 23 年度から開始した事業で今回の補助金対象とならないものも、その意義は変わったわけではないので本学独自予算で継続実施している。

補助金対象の「産業界ニーズ補助事業」部分の取組は、核となる 4 つのグループで構成してあるが、それらが相互の関連を深めながら相乗効果を上げるように努力した。平成 24 年度は 3 カ年計画の初年度であり、期待通りの成果を上げることができた部分がある一方、いろいろな課題も明らかになった。

平成 25 年度は、前年度の取組をより充実させる形で進めた。

以下、4 つのグループのそれぞれについて互いの関連性を念頭におきながら、取組内容、今年度の活動成果、今後の活動への課題点について記述していく。

(1) 長期にわたる就職活動に耐え抜くための「メンタルタフネス講座」の実施

1. 取組内容

短大での就職活動は、就職ガイダンスが始まる 1 年生の 10 月から 2 年生になって内定が得られるまでの長丁場となっている。その間に、学生は就職試験や面接で挫折を経験することで意欲が低下したり、内定先に就職した場合でも比較的早期に離職してしまうという残念な場合を見てきた。そのような現状に対応するために、この講座を実施することにした。

新 1 年生に対してメンタルタフネス育成のために、入学直後の 4 月中に「メンタルタフネス・ベーシック講座」、夏期休暇開始の 7 月下旬に「メンタルタフネス・セルフモチベーション講座」を実施した。ベーシック講座では、ストレスの基礎理論、気分転換をうまくはかるリラックス法、などを教えている。モチベーション講座では、モチベーションの基礎理論・コントロール法を教えている。学生時代にいろいろなものに食欲にチャレンジして人生のいろいろな面を見ておく生き方が、将来ストレス解消の気分転換にも役立つ機会を与えてくれることをアドバイスしている。

「ストレスコントロール力」は、経済産業省が提唱する、いわゆる「社会人基礎力」の要素としても採り上げられており、いろいろな活動を継続して行う際の基盤となる力である。

2. 活動成果

この講座は外部講師によるものだが、教員も参加して、正課外の授業で学生の興味をどう引っ張っていくのか大いに参考になっている。この取組はアクティブラーニング強化の一環として、グループワーク主体で進めており、学生がお互いを知るよい機会ともなり、参加学生の高い満足度を得ることができた。アンケート調査によると講座の満足度は 5（非常に満足）～1（非常に不満足）の 5 段階評価で平均値は 4 程度である。

グループごとに討議したり、グループの意見を皆の前で発表したり、振り返りの場を何度も設定しており、大学におけるスタディスキルを身につけるための、いわゆる「初年次教育」としても機能している。この講座の実施により、以前よりも通常授業や正課外行事に欠席する学生が減少するという嬉しい効果も得られた。

《主な行事》

(1) メンタルタフネス・ベーシック講座

開催日：平成 25 年 4 月 27 日（土）

会場：豊橋創造大学短期大学部 A32 教室

参加人数：キャリアプランニング科 1 年生 41 名

講師：キャラメルソース（株）代表取締役 初見 康行 様

内容：

1. ストレスコントロールを学ぶ重要性とメリット
2. ストレスの基本的な知識の習得
3. 自分自身のストレスの原因を知る
4. ストレスへの対処法

成果：

- ・新 1 年生で、まだお互いに十分打ち解けてはいない段階で、お互いをよりよく知る機会となった。
- ・グループ内で、自ら積極的に話す機会を設け、活発にディスカッションさせたこと。
- ・「振り返り」タイムを適宜設け、よりよく理解できるように配慮したこと。
- ・ランチを大学側で提供し、楽しく会食できていること。
- ・簡単なリラクセス法を教えたこと。

反省：

- ・4 月 28 日から始まる連休前日だったので、参加が 3 分 2 程度にとどまったのは残念だった。
- ・平成 26 年度は、本年度の反省を踏まえ、慎重に日程を考えたい。



図 1 メンタルタフネス・ベーシック講座の様子

(2) メンタルタフネス・セルフモチベーション講座

開催日：平成25年7月31日（水）

会場：豊橋創造大学短期大学部 A32 教室

参加人数：キャリアプランニング科1年生 22名

講師：キャラメルソース（株）代表取締役 初見 康行 様

内容：

1. モチベーションとは何か
2. モチベーションに関する基本的な知識の習得
3. モチベーションの代表的な理論
4. 自分自身のモチベーション「持論」の探究

成果：夏期休暇中の開催となり、参加が3分の1程度だったが、参加学生の満足度は高かった。

反省：外部講師の都合で、学生が参加しやすい日程を組めなかった。



図2 メンタルタフネス・セルフモチベーション講座の様子

3. 今後の課題点

これからについてであるが、現行の正課外講座（のべ2日間）の形はうまくいっていると考えている。ストレスコントロールは処世上のスキルであり、大学における就業前からの取組は先進的なものだと考えるが、あまりに力を入れ過ぎてもこの講座の存在自体が学生のストレスになる面もあることがわかり、いろいろ不十分な面はあるにしろ現状が妥協点ではある。

開講時期については、2年次になって就職試験で挫折を経験するようなことがあればストレスコントロールのノウハウは余計に効果的かもしれないが、就職活動中には、まとまった時間が取れない状況である。

(2) アクティブラーニングを活用した「自己理解促進講座」の実施

1. 取組内容

今回の事業は、全学総力をあげて、学生の「社会人基礎力・就業力」育成支援に臨むことが基本姿勢であり、この2番目の取組はキャリアセンター、科の教員、教務課の職員が協働して実施している。

学生をキャリアデザインに取り組ませる際、自己理解をどう深めさせていくかは大きな課題である。「自己理解」は、学生が志望会社を選び、志望動機を語り、入社後どんなことがしたいのか考え、自分の長所・短所を見つめることができるようになるためにはどうしても取り組まなければならない分野である。

一連の「就職ガイダンス」を実施する中で最終段階として面接訓練を行う機会があるが、アクティブラーニングの手法を用いて学生に自己理解を深める経験をさせた。チーム分けを行い、グループワークの形式で、テーマを与えてディスカッションさせ、チームごとにプレゼンテーションをさせた。振り返りシートを用意して、ステップごとに自分の現状を認識させた。自分が採用担当者の役を演じるロールプレイでは、また違った視点から同級生の姿に自分を重ねて見ることにもなり、新鮮な経験だったようで、今後の実際の面接に臨むための準備としては有意義なものであった。

2. 活動成果

例年、面接訓練のイメージとして人前で話す場面を思い浮かべ参加をいやがる学生が欠席することがあったが「メンタルタフネス育成講座」と段階を踏んだ懇切丁寧な就職ガイダンスの成果のためか、学生の多数が参加してくれた。思い切って参加したら参加したで、それなりに楽しむすべを身につけてきたようで、同じグループになった学生と新たな出会いを経験したり不安を共有したり、偶然与えられたチャンスを活用する力も学生本人が自覚しない内に着実に付いてきている。

「自己理解促進講座」の効果の把握については、ループリック評価指標を設定したアンケートを実施した。その評価結果をもとに、講座の内容自体とともに評価指標の改善を進めている。

この講座のあとで、学内企業展、豊橋商工会議所主催の合同企業説明会、「女子学生のための就職フェア」などへの参加を促した。これらの企業セミナーでは、各ブースで入社数年の若手社員が自分の会社を熱く語っている場合がある。自分の会社はどんなことをしているのか、その会社で自分はどんな仕事をしているのか、どんな後輩を欲しいと考えているのか、会社の魅力や働くことの意義を先輩として語っている。面談に臨んでいる学生達は、傍で見ていると社会人の迫りに圧倒される一方で、自分の将来の姿を彼らに重ね、自分もそんな社会人になってみせるんだという思いでいるようにも見えてくる。生真面目にメモを一生懸命とっている学生達を見ていると、もっと型破りな学生がいてもいいような、ある意味欲張りな矛盾した気持ちも頭をよぎる。

この学生達には、その後、教職員が個別に就職試験前の面接訓練に対応している。

学生の自己理解を促進する手段として、客観的に学生自身の「社会人基礎力」を測定する検査の利用を考え、試しに、リアセックの「PROG」の活用を始めた。

《主な行事》

(1) 自己理解促進講座

開催日：平成26年2月3日(月) 2~4限 自己理解促進講座 導入・基礎編
：平成26年2月4日(火) 2~4限 自己理解促進講座 実践編

会 場：豊橋創造大学短期大学部 A32 教室

参加人数：キャリアプランニング科 1 年生 52 名

講 師：(株) 学研メディコン 宗村 義隆 様

内 容：

1. 就職活動の全体像の理解
2. コミュニケーション能力の意義の理解
3. 面接の基礎知識の理解
4. 知識として学ぶ「面接担当者の視点」
5. コミュニケーション能力の向上
6. 自己診断テスト
7. 振り返り
8. 身だしなみ
9. メイク講座
10. マナー
11. 体験して学ぶ「面接担当者の視点」

成 果：

- ・実際の就職試験の面接に臨むにあたって、自分なりの課題を見つけられている。
- ・他者を自分の写し鏡と見なし、自分を多少は客観視できるようになっている。



図 3 自己理解促進講座の様子

(2) 学内企業展

開 催 日：平成 26 年 2 月 8 日 (土) 3~4 限

会 場：豊橋創造大学短期大学部 カフェテリア

参加人数：キャリアプランニング科 1 年生 47 名

参加企業：30 社

内 容：企業人と対応する際のアドバイス、各企業ブースでの面談訓練



図 4 学内企業展の様子

(3) 基礎力測定アセスメント「PROG」の受検 ー入学時点での受検ー

開催日：平成25年3月27日(水)

会場：豊橋創造大学短期大学部 A22 教室

参加人数：キャリアプランニング科への入学予定者 62名

内容：(株)リアセックの「PROG」のコンピテンシーテスト実施

※入学前ガイダンスの中で実施している。

(4) PROG 受検結果解説会

開催日：平成25年4月27日(土)

会場：豊橋創造大学短期大学部 A32 教室

参加人数：キャリアプランニング科1年生 43名

講師：(株)リアセック 芝野 隆 様

内容：「PROGの強化書」を用いて、3月27日の受検結果の見方・活用方法を解説した。

(5) 基礎力測定アセスメント「PROG」の受検 ー卒業前時点での受検ー

開催日：平成26年1月8日(水)

会場：豊橋創造大学短期大学部 A23 教室

参加人数：キャリアプランニング科2年生 62名

内容：(株)リアセックの「PROG」のコンピテンシーテスト実施



図5 「PROG」受検(左)および解説会(右)の様子

3. 今後の課題点

自己理解促進講座の第1日目は、基礎的な知識をつけさせるためにどうしても座学が多くなりがちで退屈に感じている学生がいる。第2日目に実施している模擬面接は、いざ実際に自分達がやってみると予想以上に楽しいようで積極的に参加してくれた。第1日目だけ出席して、こんなものかと判断して第2日目を欠席してしまう学生に、うまく2日間全体の仕組みを教え参加を促すようにしたいものである。このごろの傾向として、何事につけ、やってみる前からどういうメリットがあるのか損得勘定をする学生がおり、うまく対応する必要がある。

いろいろな教育活動に対して成果評価を行っているが、学内の成果評価は、一般的には、どれだけ成長したのか教育活動前後の相対的な育成度合を調べるものである。それに対して、PROGによる外部評価は、社会人として有しているべき態度・志向・スキルの絶対評価である。それぞれに特長があるので、両者を併用してうまく活用していくようにしたい。

(3) 地域組織と連携した「プロジェクト活動」

1. 取組内容

「特別研究セミナー」という科目を使い正課外の活動を含め、PBL と称されるプロジェクト活動を実施した。プロジェクト活動は、学内教育を就業へつなぐ重要な教育手法だと捉えており、実践活動を通して、社会を知り、自分を知り、課題解決力を養い、自らの不足する能力に気付き、キャリアについて考え、学びを今後も継続する大切さを実感させる場にしたという構想のもとに始めた取組である。

大学内の活動にとどまることなく地域社会と連携した活動を展開するというこで、まず4月中旬に「豊橋を知る」というキックオフ講演会を開催した。

この取組は学生たちに地域社会・企業との関わりを持つ場を用意し、プロジェクト運営を通じて、学生自らが主体的に学ぶ機会とするものである。テーマは教員の指導の下、学生達が決めるわけだが、平成25年度は8つの多様なプロジェクトを実施することができた。

今回の取組では、伸ばすべき資質については、経済産業省の「社会人基礎力」の12の要素の中から「主体性」「計画力」「傾聴力」「ストレスコントロール力」の4つを評価の中心に据えて、達成度評価を実施することにした。プロジェクト活動は学生にとって自由度の大きい活動であり、どの分野の力が伸びるのか一概に予測できないが、これら4つの分野の力の成長度合いは比較的測定しやすいと考えたからである。「社会人基礎力」の12の要素を4つに絞り込んだ形になってはいるが、それぞれの力を広がりのあるものと捉えているので、積極的に評価対象としなかった残りの8つの分野の力も、ある程度は同時に伸びてくるものだと仮定している。経験値として、個々の要素を独立して育成できるというわけでもなく、プロジェクト活動がうまく回りだすと、複数の分野の力が連鎖して相乗効果で伸びていくことがわかっているからである。

「主体性」は、当事者意識、やる気といった言葉でも表わされるもので物事に取り組む姿勢である。

「計画力」を採り上げることにより、物事を進める上でプロセスを大切にすることを強調した。学生はとにかく結果ばかりを見てしまい、それまでの途中の段階を考え実行するプロセスにより自分を鍛えるということをしたがらない。プロセスを楽しむ余裕があれば必ず次の段階が見えてくるということも教えるように努めた。

「傾聴力」については、ただ単に相手の話に耳を傾けるということではなく、相手の話を冷静に捉え、自分の考え方を自分の言葉で返して、アイデアのキャッチボールをすることが当然考慮されている。

「傾聴力」は、「発信力」につながる能力である。

「ストレスコントロール力」については、1番目の「メンタルタフネス育成講座」で採り上げており、プロジェクト活動を通して、その講座を実施した意義について身に染みて感じてもらえたはずである。

2. 活動成果

「プロジェクト活動」の効果の把握についても、ルーブリック評価指標を設定しアンケートを実施したが、定量的な測定が困難なことを実感させられている。この取組を統括している教員の側から見て、プロジェクト活動の実態としては、それほど違いがない場合でも、自己評価が高いチームと低いチームに分かれてしまう。現在、アンケート結果をもとに評価指標の改善を進めている。

数値的な評価とは別に、「プロジェクト活動の経験がこれまでの学校生活の中で一番楽しかった」といった学生の感想のひとつで、現場の教員はいろいろな努力が報われた感じがし、次のプロジェクトへのやりがいとなっているのもまた事実である。

教員が、プロジェクト活動の成果として観察していることは以下のようにまとめられる。

- ・連携先の社会人の熱い思いを聞いたり、協力を求められることは、学生の動機付けに役立っている。他者の思いに共感し、何かをしたいという気持ちが起きているわけである。
- ・地域・会社との連携といった対外活動には、責任が伴うことを学生が学んでいること。
- ・取り組んだテーマに対して、問題意識が高まったこと。
- ・親しくない学生同士でも、目的・意義が明確な活動なら、対話が始まり協働できること。
- ・プロジェクト活動では、それぞれの学生の「居場所」が存在すること。寡黙な学生は何も考えていないわけではなく、不測の事態が生じた時などには、はっきり自分の意見を主張し、打開策を提案してくれることがある。
- ・熱心に活動した学生は、達成感を味わっていること。
- ・プロジェクト活動は、学生の成長とともに、教員の指導力向上にも役立っていること。

● 4つの力への対応・評価

(1) 主体性

プロジェクト活動を始める計画段階では、教員の関与が必要である。プロジェクトが動き出せば、学生は主体的・積極的に参加するようになる。教員が一方的に学生を意識付けることは困難で、学生が興味を持ち目的意識が高くなるまでは、主体性は発動しない。

(2) 計画力

節目となる大きなイベントを用意すると、しっかりとした計画を立てるようになる。

学生が計画力をどう考えるべきか指導する必要がある。外部と連携して行うプロジェクトでは、どうしてもスケジュールより遅れがちで、進捗状況や不測の事態に対して臨機応変に計画変更する必要があるが、そういったことを計画力がなかったと過小評価してしまう学生がいる。

計画を立てる場合、経験値が低い状態では精度が低いものとなるのは当然で、経験を積ませることで計画力を付けていくことは可能である。

(3) 傾聴力

学外の人達と対応することで、傾聴する力はある。相手の言うことを理解しようという姿勢が大切である。相手の話でもポイントを捉えて、聞くことができるようになっている。

人間は、納得しないことに対しては自ら活動しようとはしない。学生同士、しっかりと意見交換した上で活動している様子が伺えた。

(4) メンタルコントロール力

グループワークで、メンバーに辛抱強さはつくいく。

プロジェクト活動には不測の事態はつきもので、そのような状況でも自分達の決めたことをやり抜こうということで、メンタルな力はある。

不本意ながら参加した学生が、結局は良い経験ができたという満足感を得ている状況を見ると、先入観を持たないで実行してみる必要性を意識付けることができた面はある。

《主な行事》

(1) キックオフ講演会「豊橋を知る」

開催日：平成25年4月16日（火） 第1限

会場：豊橋創造大学短期大学部 A23 教室

参加人数：キャリアプランニング科2年生 37名 情報ビジネス学部3年生 47名

講師：豊橋市企画部政策企画課 鈴木 裕二 様

内容：豊橋市の概要、第5次豊橋市総合計画、まちなかにぎわい、シティプロモーション
グループディスカッション「まちなかに新たなにぎわいを創るには？」



図6 キックオフ講演会の様子

「キックオフ講演会」後のプロジェクト活動の進行は以下の通りである。取りかかるのが早いチームでは、4月から活動を始めている。プロジェクト活動のテーマ選定に時間がかかる場合があることを考慮し、「プロジェクト実行計画書」の提出期限を遅めの6月下旬に設定してある。そのまま12月の成果発表会まで途中の経過報告をしないというのも円滑に実行されていかないことにもなりかねないので、春学期が終わった時点で「プロジェクト中間報告書」を提出して、これまでの活動を振り返り、今後の活動予定を見直す機会としている。

4月17日（水）	プロジェクト管理アプリの説明
6月21日（金）	プロジェクト実行計画書提出期限
8月09日（金）	プロジェクト中間報告書提出期限
12月11日（水）	プロジェクト成果報告書（学生）提出期限
12月16日（月）	発表用パワーポイント資料提出期限

(2) プロジェクト活動 成果発表会

開催日：平成25年12月18日（水） 第1限

会場：豊橋創造大学短期大学部 A21 教室

参加人数：キャリアプランニング科2年生 67名 来賓、教職員

内容：各プロジェクトチームによる活動成果発表、質疑応答
学生アンケートの実施



図 7 成果発表会の様子

(3) プロジェクト活動 学生座談会

開催日：平成 25 年 12 月 18 日（水） 第 2 限

会場：豊橋創造大学短期大学部 D 棟 4 階ラウンジ

参加人数：キャリアプランニング科 2 年生 各ゼミから代表者 1～2 名が参加 合計 10 名

内容：「プロジェクト活動」を学生はどうとらえたか



図 8 学生座談会の様子

プロジェクト成果発表会実施後、各教員は、成果発表会での発表の様子、学生アンケート結果、アクティブラーニングとしての取組への反省を踏まえて「プロジェクト成果報告書（教員）」を書いた。

1 月 24 日（金） プロジェクト成果報告書（教員）提出期限

1 月 24 日（金） プロジェクト活動・広報用原稿提出期限

2 月 07 日（金） 平成 25 年度「成果報告書」原稿提出期限

3. 今後の課題点

プロジェクト活動を支援する教員は、アクティブラーニングの手法を活用するように努めたが、今年度は部分的な取組に終わった。プロジェクト活動は、毎年、取組テーマが変わったり、構成メンバーの個性が変わったり、連携先の事情があったりで教員の側にも臨機応変な対応が求められ、期待通りの成果が上がらないことがある。平成 26 年度は、より積極的に教員間でアクティブラーニングの手法を共有する機会を持つ予定である。

プロジェクト活動は学生の動機づけに工夫を要する取組で、毎年、多かれ少なかれ以下のような課題

に直面している。

- ・テーマ選定について、学生関与の度合いが低い。

プロジェクトテーマについては、教員が複数年度に渡り計画済みの場合がある。その一方、学生にプロジェクトテーマを決めさせる場合もあるが、すんなりとは決まらない。教員は、その間待つことができなくて、教員がテーマを提案することにもなる。プロジェクトテーマと、個々の学生のモチベーションの接点が希薄な場合、学生のやる気を持続させることは困難である。

プロジェクト活動から学ぶ点が少なくなると、単なる作業になってしまう。

- ・教員は、着地点が見えているテーマを繰り返すようになりがちである。

教員でさえ先が見えないテーマの場合、教員にも臨機応変な対応が求められ、かなりの時間を割いて学生と一っしょに考える必要が出てくる。

未知の活動の場合、想定した成果が得られないというリスクを伴う。プロジェクト活動は、学生メンバーの意気込み・団結度合、取り上げたテーマの「筋」の良し悪し、連携先の協力度合などによって教員のスキルに関係なく、成果が左右されることがある。ただし、「産業界ニーズ補助事業」では連携学習会を通して「失敗学」を学んで、その考え方を活かすことにしており、外形的に成功したように取り繕うことよりも、学生がプロジェクト活動から何を学んだかに重点を置いている。

- ・特定の学生だけが活躍するようになる。発言する学生が限られる。

学生のチームワーク力形成にどれだけ教員が関与できるものなのか、限界がある。物静かな学生に目を向けて、他人に対して自分の意見をはっきり言えるようにできるものなのか。

発表会におけるプレゼンテーションでは、スライドに用意してある内容については雄弁に発表できるが、質疑応答の際、活動の意義や掘り下げた内容の質問をされると手も足も出ない状況である。

- ・活動時間を確保するのが大変である。

正課の授業時間は問題ないが、正課外で外部組織と連携活動しようとする、連携先の都合もあり、学生の活動時間と捻出することが大変である。対外活動をさせる場合、参加させるための動機づけに工夫を要する。

- ・プロジェクトの完成度をより高めようというこだわりが欠ける。

概して、最低限のことで済ませる傾向がある。経験不足のため、先を見通す力が弱い。

まわりのことに配慮するまでの余裕を持ってない。

割り当てられたタスクをこなしたあと、さらにできることを探してまでやろうとしない。

- ・プロジェクト活動を単年度で終了するのか、次年度へつなげるのか。

意義あるプロジェクト活動ほど、連携先からは次年度も続けて欲しいという要請がある。継続プロジェクト活動は、企画・計画の部分が出来上がっている、次年度取り組む学生は、ゼロから立ち上げる場合に比べ、アイデアを出す局面は減ることになりがちである。

(4)「アクティブラーニング」の手法を使った教育経験の共有

1. 取組内容

「社会人基礎力」に代表される広範囲な汎用能力を培う手段として、アクティブラーニング（能動参加型授業）が話題になっている。平成 24 年 8 月に中央教育審議会が、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」を取りまとめ、学生の受動的な教育から、学生の能動的学修へ切り替えることを提言しているからである。教員と学生とが意見交換しながら、学生同士は互いに切磋琢磨し刺激を与えながら人間的に成長していく課題解決型の授業で、知性を鍛える双方向の教育へ転換することが強く求められている。

アクティブラーニングの場を考えると、学外の組織と連携するやり方と学内でまずできることをやるやり方とが考えられる。

産業界との連携という「インターンシップの活用」がすぐにも頭に浮かび、本学でもかなり前から実施してきているが、相手の都合もあることであり、事務系の分野では、その内容を深化させることに困難さを感じてきた。

今回の学内活動を中心とした取組では、アクティブラーニングの具体的手法として5つの要素（グループワーク、ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り）を取り上げ、教育現場のあらゆる機会にそれらの手法を活用して、学生の社会人基礎力を伸ばすようにした。

「ファシリテータ」という言葉があるが、学生を具体的活動に巻き込んでいくだけの動機づけができる教員の育成が課題である。学生がどう成長するか、どれだけ成長するかは、もちろん学生次第の面が大きいことは事実であるが、教員の側としても、自身の成長を含め、アクティブラーニングの取組を重要視すべきことは明らかである。挑戦すべき目標、その目標を達成するための具体的プロセス、その目標を実現させようとする情熱があれば学生は成長していく。この基本姿勢を念頭に平成 25 年度は教育手法の改善に取り組んだ。

2. 活動成果と評価方法

4つ目の教育事業として「アクティブラーニング」を項目立てし強調してあるわけだが、他の教育事業でもアクティブラーニングを積極的に取り入れている。上述してあるように、1番目の「メンタルタフネス講座」や2番目の「自己理解促進講座」ではグループワークを中心に進めている。3番目の「地域組織と連携したプロジェクト活動」は、PBLと呼ばれるアクティブラーニングそのものである。

平成 25 年度は、秋学期に一般授業にもアクティブラーニングの手法を取り入れる試みを始めた。

アクティブラーニングを積極的に取り入れる取組を始めたわけだが、当初から、その活動成果をどう評価したらよいか検討課題に挙げられていた。補助事業の2年目に入り、学部・短大部共同で、「評価」についての勉強会を持ち始めた。具体的には、以下のように、一部の教員でワーキンググループをつくり会合を持ち、そこで議論をもとに専任教員を対象に教育力向上研修会を開催した。

《主な行事》

キャリアプランニング科独自の勉強会は以下の通り実施した。

5月15日（水）科会での勉強会（1） アクティブラーニングの形態

6月19日（水）科会での勉強会（2） 社会人基礎力育成の見える化ーカリキュラムマップ

- 7月17日（水）科会での勉強会（3） 一般授業へのアクティブラーニング導入計画検討
 12月18日（水）科会での勉強会（4） アクティブラーニングについての反省会

この取組を加速するため研修会を実施することにし、外部組織の力を利用した。

- 5月21日（火）（株）ベネッセコーポレーションとの研修会実施に関する打ち合わせ

課題となっている評価方法を検討し、研修会を計画するためワーキンググループを立ち上げた。

●教育効果測定・指導方法検討ワーキンググループ（WG）

- 6月17日（月）第3限 第1回ミーティング
 7月01日（月）第3限 第2回ミーティング
 7月08日（月）第3限 第3回ミーティング
 9月09日（月）「第2回教育力向上研修会」の実施計画
 10月11日（金）「第2回教育力向上研修会」資料としての事前アンケート提出期限
 学生の主体的学習を促す工夫や困難さに関するもの
 10月15日（火）（株）ベネッセコーポレーションとの研修会最終打ち合わせ
 これら一連の会合で、以下の教育力向上研修会で行う内容を検討した。

（1）第2回 教育力向上研修会

開催日：平成25年10月28日（月） 第3・4限

会場：豊橋創造大学短期大学部 E21 教室

参加人数：キャリアプランニング科専任教員5名、その他教職員15名

内容：基調講演「学生の主体的学習を引き出す指導方法とその評価方法について」

平山 恭子 様 （株）ベネッセコーポレーション 大学事業部 事業開発課

ワークショップ① 学生の主体的学習の実現について

ワークショップ② 学生の主体的学習に対する評価方法について

※「第1回教育力向上研修会」は6月7日に実施しているが、フォーラムとして外部へ公開したので、連携事業の方で報告してある。



図9 第2回教育力向上研修会の様子

ワーキンググループでは、第2回教育力向上研修会後も議論を深めている。

- 11月27日（水）第3限 第4回ミーティング
- ・PROGを用いた評価についての考察
 - ・社会人基礎力という評価観点の活用方法

3. 今後の課題点

大学評価で、産業界のニーズに対応した教育内容・教育力が常に問われるようになってきている。「教員が何を教えているのか」から、実際に「学生が何をできるようになったか」という視点が重要視されている。

産業界ニーズとして企業が「コミュニケーション能力」という言葉で象徴的に表しているものは、ビジネス文書作成、討論、発表などのスキルに加え、論理的思考力、説得力、発信力、傾聴力、柔軟性、臨機応変な対応、状況判断力も含めた総合的な力を指しているのであり、実社会が求めているのは、そのような能力を備えた人材なのである。このような多様な能力を育成してほしいという要求に対応するため、カリキュラムマップを作成し、授業科目と育成資質との対応を明らかにしつつあるがなかなか実効性あるものにはなっていない。科目同士が連携し合い、学生の新たな学びが既存の知識と結び付けられ、深い学びを引き起こし、理解を深め、知識が構造化され新たな全体像を結ぶといったレベルまでには前途多難という現状である。

アクティブラーニングも、その言葉自体の広がりとともに、内容自体の深化も求められている。「課題発見・解決能力」を身につけさせる必要性は痛いほどわかっているつもりである。

能動的学修は、学生がやる気になるだけでうまく機能するものではない。双方向の授業を実現するためには、参加するための事前学習、授業への参加、参加後の学習といった「学修時間の大幅な増加・継続的な確保」が不可欠であることに対する認識が教員、学生、いずれの側にも十分でない。

忘れないためにも、評価方法についての課題を列挙しておく。

- ・「社会人基礎力」の12の力をどう評価するのか。
- ・PROGの結果をどう活用するのか。
- ・教員間の評価軸のずれをどう改善し、評価精度をあげるのか。
- ・短期的な学習効果の測定と、長期的な人間的成長の評価をどう使い分けるのか。

● 4つの教育事業をアクティブラーニングという視点でまとめる

以上、本学の4つの取組について書いてきたが、繰り返し強調しているように共通軸は学生の主体性を引き出すアクティブラーニングである。

学修成果を上げるための課題自体は、明確である。

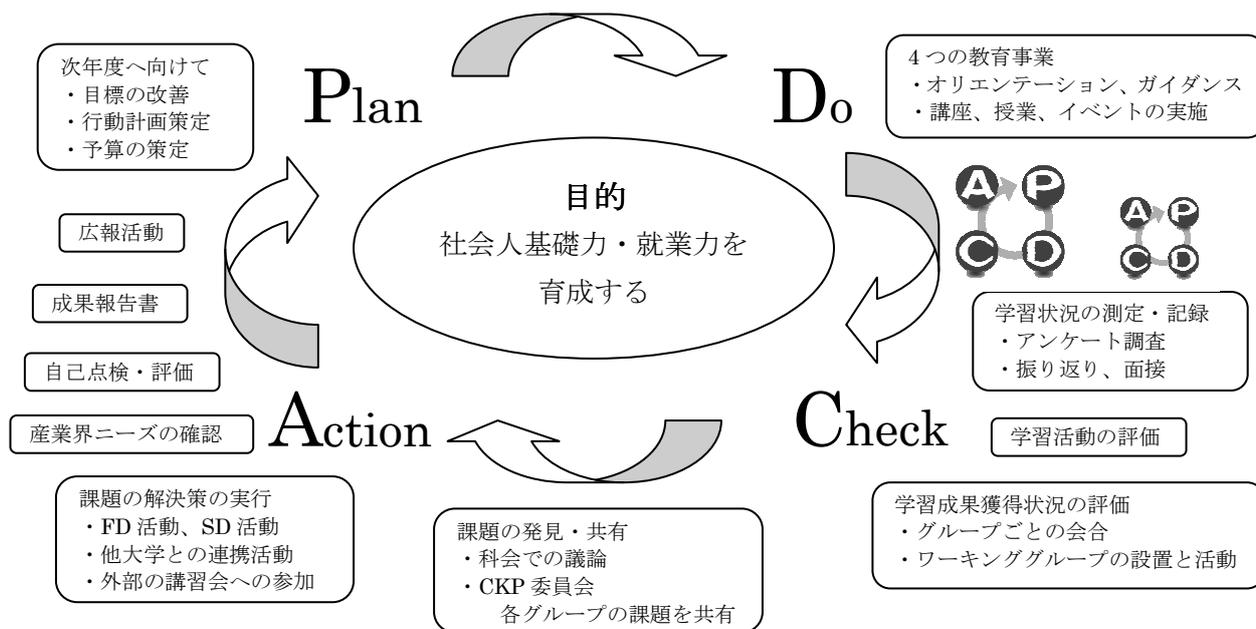
- (1) 地域社会・産業界との連携・協働の推進、問題意識を共有する大学同士の連携強化
- (2) 教育課程の科目同士の連携
- (3) 教職員の連携強化
- (4) アクティブラーニングを連携して担う教職員を育成するためのFD活動・SD活動の促進
- (5) 教育方法の効果、学修成果の達成度の把握

こうして並べてみると、「連携」や「協働」、「評価」がキーワードであり、大学全体が教育システムとして対応すべきことがよくわかる。

短期大学部では、機関全体としての自己点検・評価活動が機能しているのは当然のことだが、このCKP活動にもPDCAサイクルを回す形で自己点検・評価活動は行われている。

7つのグループの課題は、毎月開催のCKP委員会で報告事項・協議事項として提出され、メンバーで議論し共有されている。4つの教育事業は、キャリアプランニング科内で深く議論されている。

キャリアプランニング科のCKP活動



上記の図は、1年間を通して見たときのPDCAサイクルだが、各グループ活動ごとに、あるいはもっと小さなタスクごとにPDCAサイクルは、いくつも日常的に回転している。

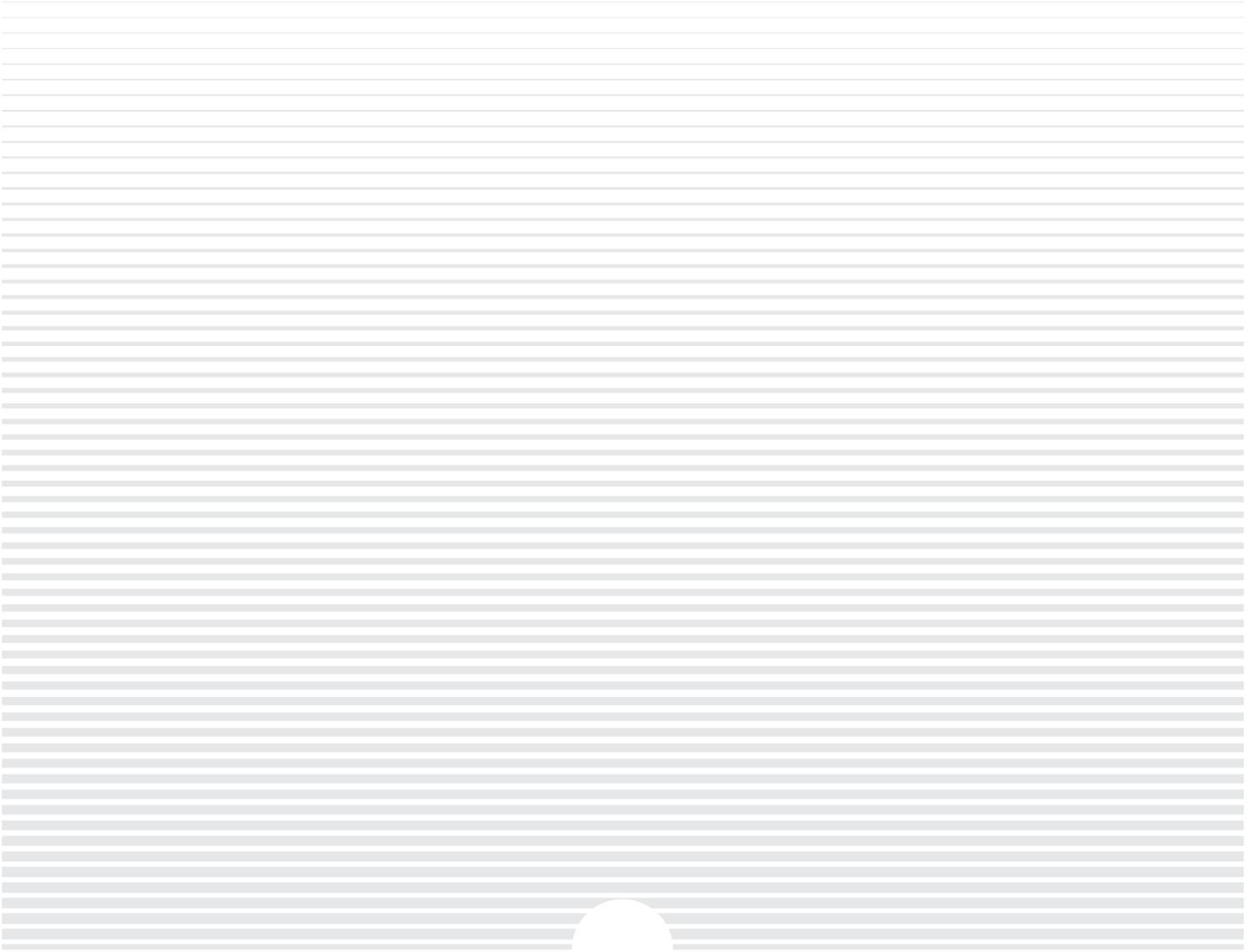
他大学との連携会議・シンポジウムで得られた知見は課題解決に活用され、その結果を連携大学へ報告している。

PDCAサイクルを回しながら、常に念頭に置いていることは次の3点である。

- (1) 学生に成功体験、達成感を味わわせたい。
- (2) 学生に個性を磨く経験をさせたい。
- (3) 学生に、ちょっぴり背伸びをさせるような経験をさせたい。

3.2

教育体制・産業界ニーズ 把握体制の整備・連携推進



3. 2 教育体制・産業界ニーズ把握体制整備と連携推進

(1) 教育体制・産業界ニーズ把握体制整備

●教育体制整備

教育体制整備については、全学組織をあげての「科のあり方検討委員会」を立ち上げ、カリキュラムの大枠から詳細な開講科目に至るまで詳細に検討した。

3つのポリシーを明確に示すために、建学の精神・教育理念、教育の目的・目標、学修成果、教育課程・教育プログラムの相互の関係を見直した。その際、カリキュラムマップを整備した。

その結果に基づき、平成26年度からカリキュラム改訂を実施する。

カリキュラム検討の際には、地元の有力企業・組織を訪問し、本学の卒業生に対するニーズについてヒアリングを実施し、その結果をカリキュラム改訂に反映させている。

産業ニーズを把握するやり方は次項に詳述するが、例年5月以降に、本学卒業生を採用してくれた企業をキャリアセンター教職員が訪問し、卒業生の状況を聞くようにしている。この訪問結果を、本学の社会人基礎力養成に活かす仕組みを強化しつつある。

●産業界ニーズ把握体制整備

本科の教育改革の参考とするため、平成24年度に引き続き平成25年度も地元の企業・金融機関・病院等を訪問し、卒業生に対するニーズ調査を実施した。教育改革に向けての示唆は、一言に集約すれば、学生の「人間としての魅力」をどう磨くかということであった。産業界が求めるものは、コミュニケーション能力や、物事に取り組む姿勢、やる気、我慢強さなど、まさに「社会人基礎力」に代表される資質であることを確認できた。

世間に公表されているどのアンケート結果でも、産業界が求める能力は、「コミュニケーション能力」が圧倒的にトップである。連携幹事校の三重大の「育成すべき資質」に関するアンケート結果でも、企業の要求が強い割には教員の意識にのぼっていない資質として、「行動力」と「コミュニケーション能力」が挙げられていた。

コミュニケーション能力というと、討論や発表、文章作成などのスキルを問題にしているように思われがちだが、そのような狭い分野だけの力を問題にしているわけではないと思われる。論理的な思考無しには、討論や発表で相手を説得できるものではないからである。何よりコミュニケーションは双方向である。相手に自分の考えをわかりやすく伝える発信力や説得力も重要だが、いま話題になっている、相手の意見を丁寧に聴く傾聴力や、意見や立場の違いを受け入れる柔軟性や臨機応変な対応ができなければ他者との円滑なコミュニケーションは成立しない。会社組織のような集団で行動していくには、自分と周囲との状況を把握する状況把握力も必要となる。

大学へのニーズとしては、一般論として、高校生・保護者は「大学に学歴と資格取得支援、その結果としての就職」を求め、大学教員は「やせ細っていく教養教育と専門教育」で対応し、産業界は「社会人基礎力で象徴的に表されるような人間的成長」を求めている。

産業界ニーズについては、ある程度把握できているわけだが、卒業生の就業状況を知るために今後も継続して企業訪問を実施することになっている。

(2) 連携事業を反映した体制整備

1. 取組内容

連携 23 大学、とりわけ東海 A (教育力) チームでの連携を密に推進し、連携活動で得られた知見を上記の体制整備に活かしている。具体的には、東海 A (教育力) チーム会議での情報交換が基本であり、それに加え、チームに属する各大学がシンポジウムを開催したり、年に 1 回の割りで中部圏産学連携会議を持ち議論を深めている。問題意識が共通しているので、連携事業から学ぶことは多い。

2. 活動成果

平成 25 年度に実施した他大学との連携活動は、以下の通りである。「社会人基礎力」育成が共通課題であり、教育力改革を進めるために、指導方法、その評価方法、評価を活かす改善方法について意見交換できていることは大いに意義あることである。

《主な行事》

教員が連携事業に参加したり、本学が主催した行事を時系列で列挙する。

- | | |
|--------------|--|
| 4 月 26 日 (金) | 第 1 回 東海 A (教育力) チーム会議
会場：名古屋商科大学大学院 伏見キャンパス E22 教室
内容：平成 25 年度の連携事業計画、検討課題を議論 |
| 5 月 18 日 (土) | 失敗分析ワークショップ 「教育改革の壁を破るチャレンジ」
ー失敗分析をステップに創造的克服を形成するー
会場：椋山女学園大学 星ヶ丘キャンパス椋山人間交流会館 1F 会議室
内容：中部圏の 23 大学が参加し、失敗事例を分析して対応法を知識化 |
| 5 月 23 日 (木) | 第 2 回 東海 A (教育力) チーム会議
会場：名古屋商科大学大学院 伏見キャンパス E22 教室
内容：連携 FD 合宿研修の計画、チームのホームページについて議論 |
| 6 月 07 日 (金) | 本学主催 第 1 回 教育力向上研修会 「教育力改革フォーラム」
会場：豊橋創造大学短期大学部 E 棟
内容：名古屋商科大学の事例紹介
「PROG を用いた教育効果測定と授業改善への活用」
参加者：来賓 7 名、本学 32 名 |
| 8 月 21 日 (水) | 中部&中四国 6 短大 「短期大学連携」第 1 回会議
会場：東海大学短期大学部 (静岡市)
内容：
1. 短期大学における「アクティブラーニング」の現状と課題
2. 短期大学における「インターンシップ」の現状と課題
3. 短期大学における「社会人基礎力」の成果目標・測定・評価 |

参加：金城大学短期大学部 愛知大学短期大学部 鈴峯短期大学
静岡英和学院大学短期大学部 東海大学短期大学部 本学

- 8月26／（月） 東海 A（教育力）チーム 連携 FD 合宿研修
～ 8月27日（火） 会場：公立学校共済組合 蒲郡荘（愛知県蒲郡市）
内容：教育力チーム各校のアクティブラーニングの位置付け
※6月～8月の東海 A（教育力）チーム会議の代わりに実施した。
- 9月03日（火） 平成 25 年度 教育改革 ICT 戦略大会
～ 9月05日（木） 会場：アルカディア市ヶ谷（東京、私学会館）
内容：大学教育の質的転換への行動
- 9月10日（火） 三重大学 シンポジウム「社会のニーズに対応した教育改革に向けて」
会場：三重大学講堂小ホール
内容：基調講演「社会のニーズに対応した大学教育改革の全国的展開」
パネルディスカッション「社会のニーズに対応した教育改革の課題」
※シンポジウムの報告を兼ね、東海 A チーム [教育力強化] News Letter
No1 Nov. 2013 を発行した。
- 10月02日（水） 中部大学 産業界ニーズ事業 特別セミナー
会場：中部大学 55 号館
内容：企業経営者からみたリスク管理
- 10月24日（木） 第 3 回 東海 A（教育力）チーム会議
会場：名古屋商科大学大学院 伏見キャンパス E22 教室
内容：11月14日開催予定の中部圏産学連携会議への対応
- 10月28日（月） 本学主催 第 2 回 教育力向上研修会
会場：豊橋創造大学短期大学部 E 棟
内容：プロジェクト活動に伴う課題の共有と解決策に関する意見交換
※4つの教育事業のアクティブラーニングの箇所では報告してある。
- 11月14日（木） 平成 25 年度 第 1 回 中部圏産学連携会議
会場：名古屋会議室（プライムセントラルタワー13階）
内容：基調講演「産学連携による人材育成に向けて」
分科会（アクティブラーニング、インターンシップ、組織、評価）
全体会（産業界からのコメント、全体ディスカッション）
- 11月28日（木） 「産学協同就業力育成シンポジウム 2013」
主体性が学生を変える、学生が社会を変える

～広がる 学生の本気を引き出す Future Skills Project の挑戦～

会場：明治大学アカデミーコモン内アカデミーホール

内容：研究報告、会場と FSP メンバーとのインタラクティブセッション

1月31日（金）

名古屋商科大学 シンポジウム

会場：名古屋商科大学大学院 伏見キャンパス E31 ホール

内容：産業界ニーズに対応した初年次教育のチャレンジ

～名古屋商科大学を事例とした検討～

2月06日（木）

第4回 東海 A（教育力）チーム会議

会場：名古屋商科大学大学院 伏見キャンパス E22 教室

内容：アクティブラーニングの評価法について

3月08日（土）

「大学教育改革フォーラム in 東海 2014」

会場：名古屋大学東山キャンパス IB 電子情報館、ES 総合館

内容：基調講演「勉強ができる人間は立派か？大学教育が目指すべき人間像」

ポスターセッションとオーラルセッション

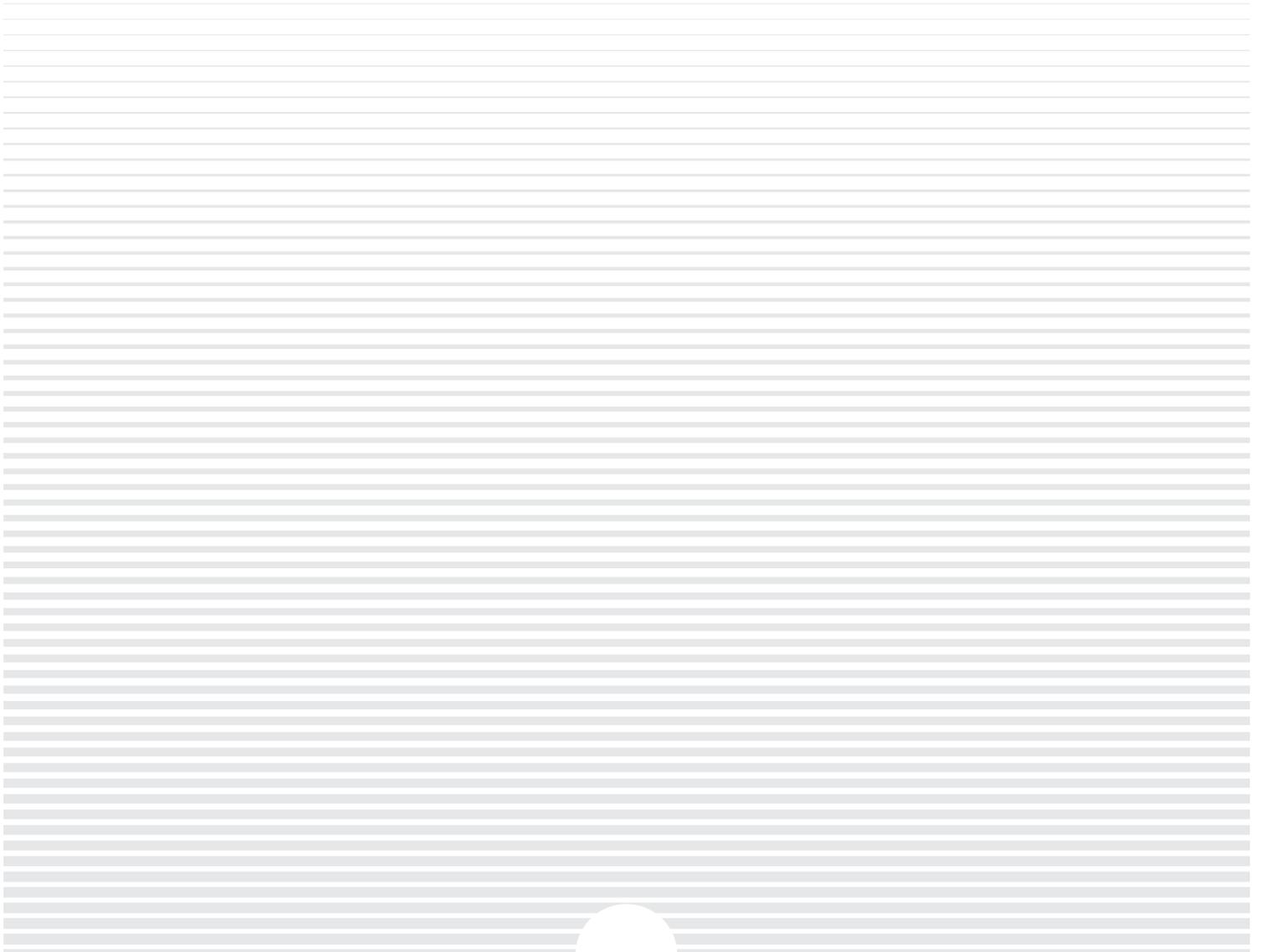
3. 今後の課題点

平成 26 年度は、本事業の完成年度である。東海 A（教育力）チームとしてアクティブラーニングを評価するための共通指標・効果測定をどうするのか議論を進める。

平成 24 年度は、連携のための手法として「失敗学」を活かすことが前面に出ていたが、「失敗」という言葉自体の印象の悪さのためか、平成 25 年度以降、本来の意図が広く理解されないまま「チャレンジすべき課題」という無難な言葉に後退することになった。本学は、「失敗」する意義を大いに認め、それをどう活かすかに拘り、プロセス全体を紹介する失敗事例についても広く学外へ公開する覚悟である。

3.3

教育体制・産業界ニーズ把握 体制の後方支援



(1) ユビキタスキャンパスグループ活動報告

1. グループ事業の取組

本グループ事業では、教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援を目的として、ICT環境の整備およびICT利活用推進を中心とした以下の活動を行っている。

- (1) 学内 ICT 環境の整備・充実(設備等の維持や利便性向上の検討)
- (2) 携帯情報端末の配布・諸説明等の ICT リテラシ指導、および、eラーニング推進
- (3) 「4つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援
- (4) 事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

平成 25 年度は、平成 24 年度の実施状況と評価結果を踏まえ、改善活動を中心に実施した。特に、スチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport)・プロジェクトマネジメントシステムの追加開発・改修の支援、eラーニングシステム(Handbook、Sozo Platz)の改修・利用促進、本事業 Web サイトの改修と充実化、等に取り組んだ。

また、前年度に引き続き、6 月頃を目途に平成 25 年度入学生(学部・経営学科 1 年、短大部:キャリアプランニング科 1 年)に iPad を貸与し、導入支援をはじめとするサポートを行った。

<<主なスケジュール>>

分類	時期	内容
(1)	4 月	プロジェクト管理システムの情報更新や各種システムのアカウント作成など
	4 月～3 月	学内 ICT 環境の維持・管理・監視、充実化. 状況に応じて改善活動
(2)	4 月	プロジェクト管理アプリ導入支援(情ビ 3 年、キャリ 2 年)
	4 月～3 月	Sozo Platz 追加開発・改修と運用
	5 月	携帯情報端末の配布準備
	6 月	携帯情報端末の配布、利用方法に関する説明会(経営 1 年、キャリ 1 年)
	12 月～2 月	携帯情報端末の物品確認および回収 【確認】 12 月:情ビ 3 年・キャリ 1 年、1 月:経営 1 年、経営 2 年 【返却】 1 月:キャリ 2 年、2 月:情ビ 4 年
(3)	4 月～8 月	スチューデントプロフィールシステム開発支援
	9 月	スチューデントプロフィールシステムの導入支援(説明会やマニュアル作成など)
	4 月～3 月	プロジェクト管理システム開発支援
(4)	4 月～3 月	Web サイトの運営および改善

情ビ:情報ビジネス学部キャリアデザイン学科, 経営:経営学部経営学科

キャリ:短期大学部キャリアプランニング科

<<主な行事>>

分類	日付	内容	対象
(3)	4月9日(火) 4月11日(木)	プロジェクト管理アプリ導入説明会	情ビ3年
(3)	4月17日(水)	プロジェクト管理アプリ導入説明会	キャリア2年
(4)	4月30日(火)	Webサイト改修・公開	
(2)	5月30日(木)	Sozo Platz 機能改善 (v1.2.0 → v1.3.1)	
(3)	5月31日(金)	プロジェクト管理アプリ機能改善 (v2.1 → v2.2)	
(1)	6月11日(火)	iPad 充電ロッカー整備 (新 iPad 対応)	
(2)	6月12日(水)	iPad 配布・説明会 (+ Handbook, Sozo Platz 導入説明)	経営1年
(2)	6月12日(水) 6月13日(木)	iPad 配布・説明会 (+ Handbook, Sozo Platz 導入説明)	キャリア1年
(1)	8月9日(金)	インターネット接続回線切り替え工事 (最低保証帯域の改善) ※ 本学ネットワーク管理委員会・システム管理室を中心に実施	
(3)	9月11日(水)	スチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) 利用説明会	教職員
(3)	9月13日(金) 9月17日(火) 9月19日(木)	スチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) 利用説明会	経営1年 経営2年 情ビ3年
(3)	9月16日(月)	スチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) 本稼働開始	
(3)	11月19日(火)	プロジェクト管理アプリ機能改善 (v2.2 → v2.3)	
(3)	2月	Sozo Platz 機能改善	
(2)	2月	プロジェクト管理システム機能改善	

① iPad 配布・説明会 (6月12日、13日)

平成25年度入学生 (経営学部1年生、短期大学部キャリアプランニング科1年生) に対して携帯情報端末 (iPad) を貸与するとともに、iPad の基本操作や e ラーニングシステム (Handbook、Sozo Platz) の導入に関する説明会を実施した (図1)。



図1 iPad 配布・説明会の様子 (左:経営1年、右:キャリア1年)

- ② スチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport)利用説明会(9月11日～9月19日)
教職員および学生を対象に、平成24年度末～平成25年度春学期にかけて開発を行った「スチューデントプロフィールシステム(名称:Sozo Passport)」に関する利用方法等の説明会を開催した(図2)。



図2 スチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport)説明会の様子(左:教職員、右:学生)

2. 活動成果

(1) 学内 ICT 環境の整備・充実(設備等の維持や利便性向上の検討)

- 平成23年度末に無線LAN環境の充実化をはじめとする学内ICT環境の更新を行い、大学の一般教室・PC教室のすべてにおいて携帯情報端末から無線LAN接続ができる環境を整えている。平成24年度は、更新後の学内設備に対してシステムログ等の観察を通じて不具合発生状況を監視した。平成25年度も同様の活動を行い、結果として、特に不具合の発生は確認されなかった。現状では安定した無線接続環境を提供できているといえる。
- ネットワーク端末の増加に伴い、学内からのインターネットトラフィックも増加傾向にある。これに適切に対応するため、本学情報システム部門(ネットワーク管理委員会、システム管理室)を中心に、インターネット回線の増速(最低保証帯域の改善)を行った。
- 本学では、学内におけるiPad活用の促進を目的として、学生のためのiPad充電用ロッカーを設置している。平成25年度から貸与するiPad(第4世代以降)は、本体で採用されているコネクタの形状が従来のものと異なるため、それらの端末に対応するよう充電ロッカーの再整備を行った。

(2) 携帯情報端末の配布・諸説明等のICTリテラシ指導、および、eラーニング推進

- 平成25年度入学生(1年生)に対してiPadを貸与するとともに、基本的な操作や管理方法に関する説明を行った。同時に、eラーニングアプリ(Handbook、Sozo Platz)の導入および利用に関する説明も併せて行った。
- 平成24年度後半にeラーニングシステム(Handbook)用サーバの増強を実施し、また、教職員に対してはより一層の利活用を検討するよう働きかけた。その結果として、平成25年度は前年度と比較してさらに授業や演習でのシステム活用が進んだ。図3はHandbookログイン数およびコンテンツ数を示したものである。図3より、年間を通してeラーニングシステムが活用されており、また、教職員が作成した教育用コンテンツも飛躍的に増加したことがわかる。

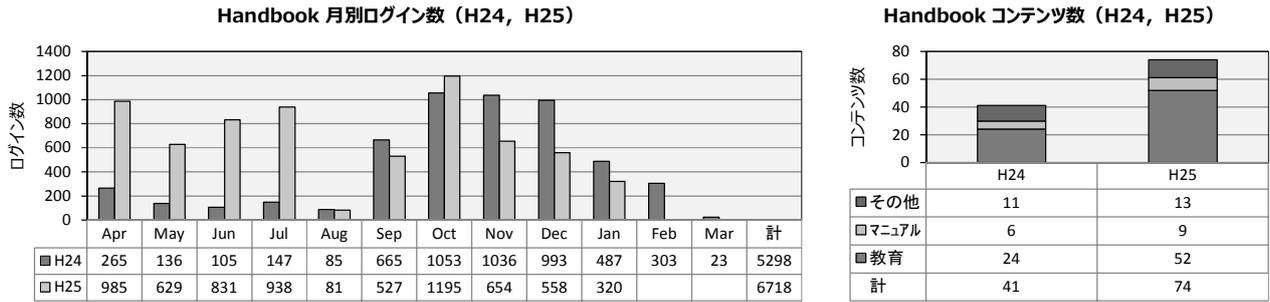


図 3 e ラーニングシステム(Handbook)活用状況

- 就業力育成支援を目的として開発した一問一答 iPad アプリ(Sozo Platz)について、不具合の修正を行った。また、問題再配信機能(配信予約機能を含む)を開発することで、過去のリソース(作成課題)を有効に利用できるように改修を行った。

(3)「4 つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援

- 平成 24 年度は、自己理解促進プログラムグループ・地域産業連携プロジェクトグループと連携し、それぞれのグループで使用する『学生プロフィールシステム』(学修ポートフォリオシステム、Sozo Passport)の仕様策定を行い、結果としてプロトタイプを完成させた。平成 25 年度前半はさらに詳細な作り込みを行い、後半(秋学期、9 月)から正式にシステムの運用を開始した。運用開始に当たっては、事前に教職員向け説明会を実施し、操作方法等についての理解を促した。同様に、学生向け説明会も実施し、システムの目的や利用方法について説明を行った。図 4 に運用を開始した Sozo Passport の画面例を示す。Sozo Passport の機能の一つである「課題作成(教員)」「課題提出(学生)」の秋学期利用状況を整理した結果、学部・短大あわせて 26 科目(課題数 69)で同機能を利用しており、運用開始からまだ日が浅いものの、積極的に活用されたことがわかる。
- 地域産業連携プロジェクトグループで利用する『プロジェクト管理アプリ・システム』について改修(新 OS 対応)作業を行った。また、これまでの同システムの活用状況を振り返りながらシステムのあり方について検討を行い、次年度以降(平成 26 年度以降)に取り組むべき課題や方針についてまとめた。



図 4 スチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport)画面例

(4) 事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

- 本事業の Web サイト(対外的な広報、および、内部関係者向けのマニュアル揭示等の目的で設置)について、取り組む事業ごとの活動履歴や情報を参照しやすくするため、年度当初に大幅な改修を行った。図 5 に改修後の Web サイトを示す。
- 大学関係者(プロジェクト指導担当教員等)が情報を発信しやすくなるよう、学内における Web 記事掲載フローを整理した。結果として、平成 25 年度の掲載記事数は、前年度の 60 件から 119 件へと倍増した。図 6 および表 1 に Web アクセス解析結果を示す。この結果からもアクセス数が増加していることがわかり、大学関係者のみならず本学の取り組み(活動内容や教育手法等)を産業界・教育界に周知するひとつのツールとして効果的であったといえる。実際に、教育(就業力)関連の情報を整理しているポータルサイトから本事業の記事がリンクされ、そのサイトを経由した一定数のアクセスがあったことも確認された。



図 5 地域産業界連携教育力改革プロジェクト Web サイト <http://project.sozo.ac.jp/>

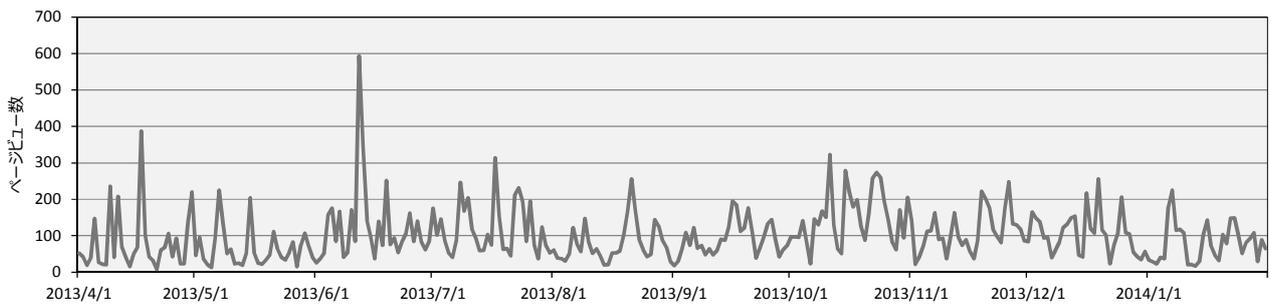


図 6 事業 Web サイトのページビュー数の推移 約 101 ページビュー/日 (2013/4/1~2014/1/31)

表 1 事業 Web サイトアクセス状況

年度	ユーザー数	訪問数	ページビュー数	訪問別 ページビュー
H24 (2012/4/1 - 2013/3/31)	2,706	9,059	19,894	2.20
H25 (2013/4/1 - 2014/1/31)	3,235	11,073	30,946	2.79

3. 今後の課題点

- (1) 継続して学内 ICT 環境の管理・監視を行い、適切な環境を維持できるよう努める。
- (2) 新たに本学に入学する学生に対して従来同様に iPad を貸与し、全員が iPad を所持し学習に利用できるよう準備する。また、そのための説明会の開催やマニュアル作成等を随時行う。引き続き e ラーニングシステムの利用促進策について検討する。
- (3) 関係事業グループと連携してスチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) に関する未作業分について開発・実装を行い、教職員および学生向けにサービスを提供する。随時利用者から意見を収集して機能改善を行い、より学生指導に有益なシステムに進化させる。
- (4) 前年度に引き続き本事業の活動内容を Web サイトに整理して掲載し、連携大学向け情報共有および一般の学外向け情報発信を行う。

(2) 大学コミュニティーグループ

1. グループ事業の取り組み

本学では、『産業界ニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業』の補助金対象外のコミュニティーグループ活動を、本学の費用負担で行っているものである。目的は『教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援』である。平成 25 年度は卒業後 3 年間における卒業生の離職状況調査を中心に以下の活動を行った。また、この活動は大学と短大が連携した形で行っている。

平成 25 年度活動内容は

月 日	活 動 内 容	学部
4 月～5 月	平成 22、23、24 年 3 月卒業生 就業状況調査の集計、分析	○
5 月	就業状況調査未回答者追跡調査実施	○
6 月～3 月	卒業生就職先に企業訪問 求人開拓 在学生への教育指導依頼	○
10/26-10/27	創造祭同窓会ブース開設 創造祭へ来た卒業生にアンケート調査を実施	○
10/28 (月)	学内企業説明会 OB 人事担当者参加による説明に実施	○
12/5 (木)	短大 OG 交流実施 (先輩の就職体験報告会に OG 参加)	
2 月	平成 23、24、25 年 3 月卒業生 就業状況調査の実施	○
2/9 (土)	学内企業説明会 企業アンケート調査	○
3 月	就業状況調査未回答者追跡調査実施	○

2. 活動成果

■ 卒業生就業状況調査

過去 3 年間の卒業生に対して、就業状況を把握するアンケートを毎年実施している。アンケートは離職率を集計するだけでなく、離職に至った理由等を分析し、在学生の就職指導や各種対策講座へも反映し、安易な離職を防ぐためのノウハウの蓄積となり役立てている。

また、このアンケートでは卒業生との大学コミュニティーを活用した社会人基礎教育を展開させ、在学生が交流できる仕組み作りに役立てることを視野に入れた項目も設けており、卒業後の早期離職を防ぐことに繋げている。

課題としては、アンケートの回収率の問題がある。平成 26 年 3 月 31 日については、未回答の卒業生宅へ休日などに電話を掛けて、個別に調査を行う予定をしている。

2012 年度調査より

【2012 年 3 月卒業生の離職率】 大学 19.2% 短大 22.5%

【離職理由上位】

(大学) ・長時間労働・適性に疑問を持った・給与水準が低かった

(短大) ・人間関係が悪かった・長時間労働・適性に疑問を持った

という結果であった。

■ 創造同窓会総会におけるアンケート調査

8 月 3 日 (土) 2 年に一度の同窓会総会が開かれアンケートを実施した。

実施対象者：本学学部卒業生 50 名 有効回答者数： 29 名

1) 現在の勤務先の満足度

・大変満足 2 ・満足 15 ・普通 6 ・多少不満 2 ・不満 2 他

2) 勤務先のよいところを記入して下さい

<業務・企業について> ・安定している ・顧客訪問が多く、様々な個性に触れることが多い
・人の役に立つ仕事である ・モノ作り ・ゼロからの商品企画、展開が魅力
・最先端の技術にふれられる

<労働環境・待遇等> ・県外転勤がない ・とても仲が良く働きやすいです ・給与
・休暇 ・休日を拘束されない ・自分の予定に合わせて勤務できる
・長期転勤がない所 ・福利厚生がいい ・人の事を大切にできること
・1人1人の役割に対する責任が大きく、やりがいがある
・自分のものさしを拡大でき、視野が広がり勉強になる

3) 勤務先の問題があると思うところを記入して下さい(自由記述)

<業務・企業について> ・自由すぎる ・先が見えない ・業界がいつまで続くのか不安
・無意味な業務が多い ・現場の仕事、苦労をトップが知らない
・利用者の思いにこたえることができず、自立や生活機能動作の向上に目的を置きがち
・月末、大型連休前後の量が多い ・発送の量が安定しない
・若い人がすぐ辞め、年のいった人ばかりの逆ピラミッド

<労働環境・待遇等> ・多忙 ・報告が多い ・雰囲気为学校に近く、社会的な雰囲気が薄い
・出世しないとモチベーションが低下する
・サービス残業が多い所 ・利益が少なく賞与が少ない、または全くない

4) 平均の残業時間について 1日平均の残業時間数 回答者 23名

・なし 4 ・0.5~1.5時間 11 ・2~3時間 6 ・3~4時間 2

5) 残業代は支給されますか? 回答 17名

・支給される 12 ・支給されない 5

6) 今の勤務先を後輩に勧めますか?

・はい 12 ・いいえ 8 ・分からない 6 ・未記入 3

7) 今後、大学から授業や就職ガイダンスへの協力依頼があった場合、可能ですか?

・はい 9 ・いいえ 9 ・条件が合えば 6 ・未記入 6

8) あなたは働き続けるために必要な条件は何だと思いますか?

・給与面 8 ・人間関係 18 ・精神力 12 ・その他 3 ・未記入 4

(意見) ・給与面、人間関係、精神力のうち2つは必要、2つ欠けたら難しい

9) その他意見 ・人と人との関わりが人間の世の全てと知りました。教養ももちろん必要ですが、まず人として豊かな人材育成が必要かと考えます。豊橋創造大学からも人材を出していけるよう人間味ある教育を今後ともよろしくお願い申し上げます。

10) 転職された方理由

・会社に将来性がないと思った 6 ・労働時間が長すぎた(不規則であった) 3
・給与水準が低かった 3 ・人間関係が悪かった 2 ・キャリアアップのため 2 他

11) 在学生から就職相談のある場合は電話をしてもよいでしょうか

・はい 4 ・いいえ 9 ・未回答 16

【所見】 今回で同窓会総会開催時に実施する卒業生アンケートは2回目になるが、出席する卒業生は正規職員で働いている人が多く、勤務先の満足度も「大変満足」・「満足」が17名と約57%の卒業生が満足と答えている。また、回答者29名のうち9名が転職経験者と約3割が転職を経験しているが、1

期生が卒業してから 13 年が経ったことを考えると同窓会に出席する卒業生は多少なりとも現状に不満があっても最初に就職したところで頑張っており、7 割が定着している結果となった。最近の離職率調査の結果が 1 年で離職率 3 割を超えることを考えると働き続けるために必要な条件 1 位に人間関係、2 位に精神力、そして 3 位が給与面と答えていることから本学のキャリア教育で養成しようとしているメンタルタフネスは重要な教育である。また、給与面も 3 位に入っていることから求人票をしっかりと確認して、就職先を選ぶことが大切なことを在籍学生へ指導していきたい。さらに、OB・OG として母校への協力も前向きに考えてくれている卒業生が多いことも今回のアンケートの収穫となった。今後も引き続きアンケートを実施し、卒業生の動向を捉えていきたい。



同窓会総会アンケート実施



創造祭卒業生同窓会ブースアンケート実施

■ 創造祭学部卒業生同窓会ブースにおけるアンケート調査

『創造祭』（学園祭）の交流の場として学部卒業生を対象とした同窓会ブースを開設した。

開催日：平成 25 年 10 月 26 日（土）・27 日（日）

会場：豊橋創造大学 B22 教室 卒業生参加：50 名

勤務先に関する就職のアンケート調査を実施した。有効回答者は 18 名

- 1) 今の仕事で『満足・普通』で 15 名。『不満・多少不満』で 2 名であった。
- 2) 勤務先の『良いところ』は、安定している、人の役に立つが多く、
- 3) 『悪いところ』では、多忙・サービス残業、先が見えないとなっており、今回の調査では人間関係で良し悪しが決定されるウエイトが多いように思われた。
- 4) 平均の残業時間について 1 日平均の残業時間数 回答者 11 名
 - ・なし 4 ・0.5～1.5 時間 3 ・2～3 時間 4 ・3～4 時間 4
- 5) 残業代は支給されますか？ 回答 16 名
 - ・支給される 9 ・支給されない 5 ・役職になったので出ない 2
- 6) 今の勤務先を後輩に勧めますか？ 回答 17 名
 - ・はい 2 ・いいえ 5 ・分からない 10
- 7) 今後、大学から授業や就職ガイダンスへの協力依頼があった場合、可能ですか？
 - ・はい 4 ・日程が合えば 6
- 8) あなたは働き続けるために必要な条件は何だと思えますか？
 - ・精神力 8 ・人間関係 7 ・給与面 7 ・他 1
- 9) 転職者理由 ・家族や私的な事情（結婚を含む）・長時間労働 ・給与水準 ・人間関係

10) 在学生から就職相談のある場合は電話をしてもよいでしょうか

・はい5名

そのほか、卒業生からの求人情報もあり、さらに卒業生を招聘する授業や就職ガイダンスへの協力賛同者が10名ほど発掘できたことは、今回の成果であった。

■ 学内企業説明会 企業アンケート実施



学内企業説明会 10月



学内企業説明会 2月

秋の『学内合同就職説明会 (10月28日 32社)』、春の『三河地区企業学内研究セミナー (2月8日 32社参加)』一部の企業の中には本学出身人事担当者の参加があった。本学学生の目線に立った、現実的で身近な説明は大変親近感もあり学生自身に大変意義のあるものであった。

また、各説明会において、本学学生の印象について、参加企業の皆様に簡単なアンケートを実施したのでご紹介させていただく。

【秋の『学内合同就職説明会 (10月28日)』】

- ・積極的でよい8社
- ・真面目な学生が多い2社
- ・明るく疑問にもった事をそのままにせず質問するという社会人として必要な要素を兼ね備えている子が多いと感じました。4社
- ・熱心に聴いている姿に好感が持てました。2社
- ・おとなしい印象だった3社 (営業職)。
- ・何がしたいのか、そのためにどのように就活を行っていけばよいか手探り状態。
- ・人柄がよく、素直でおっとりしている印象でした。2社
- ・会社の予備知識がもう少しあるとよい。
- ・礼儀正しい
- ・地元学生が多い・他校にも言えますが、会場入り口でなかなか入ろうとしない学生が気になりました。
- ・あまり積極的ではない (介護)
- ・学園祭実行委員を経験された積極的な生徒が参加してもらえてよかった。
- ・元気のある学生とない学生がいたように感じられました。
- ・どんな仕事をしたいのか、的を絞れていない学生が多く、この時期に的が絞れていないと難しいと思います。

【春の『三河地区企業学内研究セミナー (2月7日)』】

- ・真面目な方が多い13社。
- ・おとなしい学生7
- ・反応がない1
- ・内向的1
- ・礼儀正しい1
- ・友達と固まって企業ブースを回っている学生がいる。
- ・質問が少ない

- ・就職するのはあくまで自分です、もっと個を積極的にアピールして欲しい。
- ・笑顔が良い2社 ・明るく積極的な学生さんが多い3社
- ・話を聞く姿勢や質問に思っている以上に鍛えられている感じがした。・熱心な学生2社
- ・コミュニケーションがしっかりとれる学生が多い
- ・まだこれから職種を決めると感じる学生が多い

という回答であった。特に気になるのが、本学学生は、『真面目でおとなしい』という企業からの指摘で積極性、社会人基礎力で言う『前に踏み出す力（主体性）』がまだまだ不足しているように考えられる。

《昨年度2月7日参加企業に実施したGPアンケートより》

- ・『産業界ニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業』の取り組みについては大変よい取り組みである、特にメンタル面での取り組みは先進的だと思う。
- ・学生さんが自ら立ち上げ運営までされることは、とてもよい学習になると思います。
- ・大学の講義を聞くだけでは学べないことを肌で感じられるよい機会である。
- ・最近の学生に不足している点は、個性、コミュニケーション能力、積極性、忍耐強さ。専門知識にこだわらず、幅広い知識、応用力が必要。
- ・10年程前と比較すると、「どんどん出世したい」というガッツのある方が少なくなった。サラリーマン、社会人に対して夢を持てるようにすることが必要と考えます。
- ・本学学生に不足しているものとして、明るさ、元気さ（特に男性）、目的意識。
- ・面倒見がよい学校が多いですが、ある程度「不自由さ」を経験することで、自ら動き発見する力が養われるのではないかと考えます。わざわざ大人が手助けしなくても社会を堂々と渡り歩いて行ける強さを身に付けられるような教育をお願いしたいです。

この結果から、企業が望む人材として『ガッツのある人材』『めげない精神力』『周りに配慮できる人材』などを求めており、おおむね本事業を評価したものとする。

■ 短大 OG 交流実施（先輩の就職体験報告会にOG参加）



『短大 OG との交流の場』として短大キャリアプランニング科1年生を対象とした「先輩の就職体験報告会」を実施した。

実施日：平成25年12月5日（木）4時限

会場：豊橋創造大学 B14 教室 在学生参加：55名

OG講師：医療法人 光生会 天野磨美子さん（2006年度キャリアプランニング科卒業生）

1年生を対象とした「先輩の就職体験報告会」を今年度も実施し、卒業予定者6名による内定報

告に続き OG による講演を実施した。OG からは実際の医療事務の仕事についての話や社会人になって大変だったこと、学生時代に学んでいた方が良いことなど現役の後輩たちへアドバイスをいただいた。講演後、在学生との交流の場を設け、話を聞いた在学生からは「これを機に今の自分の生活を改め直さなければならぬと痛感することができました」「在学中にしっかりとビジネスマナーを身に着けておきたい」など現役の学生たちにとって貴重な場となりました。

■ 企業訪問

企業訪問は、55社（学部15社・短大40社）行った。特に短大では、昨年度卒業生が就職した企業を中心に訪問を実施し、採用した側の思惑や意見・配慮等を詳細な部分まで聴取することができた。また、訪問することにより卒業生が喜ぶ様子から状況を読み取り、また苦悩する表情に励ましの助言を行うこともできた。このことは、早期離職に至る防波堤となったことと言える。さらに卒業生に対するフォローアップ効果も大であった。

今後は、直前卒業生の就職先訪問に留まらず、過去・新規の就職先企業訪問に広げていきたい。

どんな人材が望まれているのか

- ・新しいことにチャレンジする勇氣・バイタリティが欲しい。
- ・思いやりのある、やさしい人材がほしい。（病院）
- ・積極的に声を出してほしい。
- ・元気で、明るいこと。人柄がよいこと。性格がよく、素直なこと。
- ・挨拶ができ、他人と会話ができて、まわりに興味が湧くこと。
- ・5年間かけて1人前にするつもりだ。厳しいがしがみついてきてほしい。（会計事務所）

直面している現状

- ・充実している商業高校の長期インターンシップとの差。
- ・メンタル面が弱い。「働くということ」に対して甘い考えがあること。
- ・「頭」と「体」のバランスが要求されている。考えていることをすぐ行動に移せる。口先で言うだけでなく、実際に行動できる。相手の言うことを理解し（場合によっては先取りし）、行動できる。
- ・採用試験の際、資格はあってもよいが、なくても支障がない。
- ・就職してから社内研修など、活動に積極性が見られない場合がある。
- ・自己肯定感の弱い卒業生がいる。高校生より自分の能力不足を自覚し、気弱になる。
- ・医療事務職は、基本的に欠員補充なので、計画的な採用が少ない。
- ・一度、本学の卒業生の採用で懲りると、戻るまでに時間がかかる。
- ・企業は、「大人の対応」をするので、我々に対して直接文句を言うことは少なく、無言で本学から離れ、求人票を送ってこなくなる。
- ・女子学生においては事務志望が多いが、実際には事務職採用企業は少なく、営業や販売、介護などの専門職で働ける人材を望んでいる。

上記が、卒業生の就職先訪問から得られた状況の一例である。今後は情報を掘り下げ、マッチングの質を高めること、これからの学生に必要なグローバルな考え方や自分の考えを人に伝える力（コミュニケーション力）を伸ばすことなどは、一人一人の学生を見つめ指導する側の重要事項と考え、更に今後の課題として取り組んでいくことである

3. 次年度に向けた改善

本活動は『教育体制・産業界ニーズ把握体制』の後方支援を行っているが、結果を分析して教育改善を行うため学部、短大に積極的にフィードバックしていきたい。今後の課題としては、現状の大学コミュニティ活動だけでは限界があり、範囲も限定されていることから、三遠南信地域産学官人財育成ワーキングへの参加等へも広げてゆきたいと考えている。



名古屋 企業セミナー



名古屋「女子学生のための就職フェア」

補助資料

4

1

プロジェクト活動成果報告書 (教員)

こどもクッキングプロジェクト	59
担当教員:朝倉 由美子	
女子力を活かした路面電車の企画提案	62
担当教員:伊藤 圭一	
うずラッキー・プロジェクト	65
担当教員:今泉 仁志	
お茶入門・プロジェクト	69
担当教員:木下 賀律子	
防犯プロジェクト	73
担当教員:中島 剛・細谷 邦夫	
花岡ゼミプロジェクト 秋葉道木の駅プロジェクトへの企画・調査協力と 地域通貨アキハ券のPRと流通促進策の調査	77
担当教員:花岡 幹明	
東三河を知らせ隊	80
担当教員:細谷 邦夫	
We ♥ Rose プロジェクト ～バラ生産農家と提携した青いバラの制作と販売～	84
担当教員:村松 史子	

プロジェクト成果報告書(教員)

チーム名(ゼミ名)		こどもクッキングプロジェクト(朝倉ゼミ)
テーマ		大学生コックさんのこどもクッキング教室
組織	連携先	豊橋市こども未来館 ココニコ 加藤 雄規 0532-21-5525
	指導教員	朝倉由美子
	メンバー	藤村美里・宇野聡美・齋藤裕美・篠田亜紀 杉村真奈美・田中彩菜・広浜彩江・村田ゆみこ 山本みどり(調理師ユニット)
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		<p>女性の労働環境や食環境の変化で加工品や中食、外食が増えて家庭で食事を作る機会も減り、家庭での料理の伝承(食育)も薄れていると思われる。そこで、子どもの頃から食事を自分で作る楽しさや必要性を学び、技術を身に付けて家庭で調理した食事を家族と共に楽しんで欲しい。</p> <p>調理師コースの学生は調理の楽しさを知っている。そしてそこには段取りと周囲との関係が必要であることも重ねる調理実習の中で体得している。しかし、そのことを発信する力は弱い。そこで、学んだ調理理論や技術と料理を作る際の段取りを外部に発信することを通して、料理の楽しさを伝えるとともに、学生のコミュニケーション力、技術指導力、全体に気を配る心を育成するために、小学生対象のクッキング教室を実施する。</p>
プロジェクトの活動内容		<p>(1)年間実施回数4回とし、実施時期に合わせた献立を考えた。 レシピ(試作用と当日の持ち帰りレシピ)、材料発注表、タイムテーブル作成(当日進行役兼務)の担当に分かれて進めた。</p> <p>(2)ココニコ事前挨拶と会場下見(5月上旬) キッチンの配置や設置されている調理器具や食器等の確認を行った。(iPadで撮影記録)</p> <p>(3)事前に試作を重ね、手順や問題点を検討した。 タイムテーブルの配列を話し合い、進行担当者の話し方や時間配分などの確認を行った。</p> <p>(4)前日:仕込み、材料の計量、下処理等</p> <p>(5)当日:会場到着後、施設責任者に挨拶をして支度に入った。 各台での手順の確認を行い、参加者を迎えた。</p> <p>進行役はタイムテーブルに沿って、子どもたちの進み具合を見ながら手順の指導を行った。メンバーを2人ずつ各調理台に配置し、子どもたちと触れ合いながら、けがの無いように気を配りながら、料理の楽しさを感じてもらえるように努めた。</p> <p>(6)参加者には試食後にアンケートに記入してもらい、当日の評価をしてもらった。</p> <p>(7)参加者を送り出し、会場の清掃と確認を行い、責任者に挨拶をして終了した。</p>

	<p>(8)また学生の感想や反省点をまとめた。アンケートは担当者が持ち帰り集計した。</p> <p>(9)創造祭ではパネルを各1枚担当し、活動報告、アンケート結果、取り上げたメニューに関する項目などについて分かれて作成して展示した。</p> <p>(10)12月18日にプロジェクト発表を行い、一連のプロジェクト活動を終えた。</p>
<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<p>(1)参加者の評価: 子どもクッキング自体は参加者にはほとんどが「楽しかった」「おいしかった」と評価されて、学生を頑張ったと思う。</p> <p>(2)実施回数: 去年は3回であったが、子どもたちが実施を楽しみにしてくれていることがわかり、早めに施設の日程とすり合わせて予約を取ることができ、回数を増やすことができた。</p> <p>(3)担当を変えていったこと: やりたいことではなく、毎回担当しなかったパートに当たるようにした。このことで毎回違うことを体験し、前任者の様子や反省を交えて考えて担当することができた。</p> <p>(4)試作後の意見交換: 量や味付け、盛り付けや試作中に変更意見も出され、より良いものができた。</p>
<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<p>(1)ゼミ長の人選: あえてリーダーシップのある学生を選出する策を取らず、ゼミ生からの提案でくじ引きで決めた。リーダーシップの無い学生になった場合には自覚の目覚めを期待したからだ。しかし、その期待は裏目に出てしまった感がある。緊張する場面での度胸がつけられずに最終回を迎えた。ゼミ長が1年間のお礼と来年度も後輩をお願いしたいという2項目を述べるようにしたが、頭が真っ白になったということだが、一言も発することが出来ず沈黙が流れ、任務を果たせずに終わった。</p> <p>(2)ゼミ担の指導力不足: 学生間で決める時、発言の多い学生はクラス内での影響力もあり、なかなか決まらないことが待てず、提案をどんどん出してくる。それによって方針が決定されていく中で、それに同調するのもしないのか表情に出ない学生が数名いた。聞くと「それでいい」というが、自分の意見を持っていても出せない。(出そうとも思っていないようだが。)そういう学生は与えられたことの単独行動はできるが周囲との意見交換や連携をしながら進めるができない。気になりつつ、その彼女たちを能動的な方向へ指導することができなかった。</p> <p>(3)メンバーの見せかけの結束力: 全体としては大きな問題は起きずに進んだため、対外的には無難に収まったが、個々の学生に目を向けると意見交換の際でも全く発言をせず意思表示をしなかった学生が数名いた。元気の良い学生の意見に同調するのみで自発的・能動的な行動力の育成が実行できなかった。</p>
<p>学生の自己評価アンケート 結果を見ての感想・意見</p>	<p>「こどもクッキング」と「お茶」の2つのプロジェクトを行った総合評価であり、本プロジェクトの評価としてではないが、概ね評価は高い方であった。ほとんどが高い評価の中で「主体性」に「一応やるべきことはやった」と答えた一名、「メンタルコントロール力」に「いやなこと、仕方なくやった」と答えた一名、それぞれ別の学生である。今後は物静かな学生に目を向けて、少しでも自己表現ができるように気を配る必要がある。</p>

プロジェクト活動の総括	<p>教育力における学生の育成においては、反省でも述べたように自己主張が苦手な学生が少しでも伸びる仕掛けを講じる必要がある。</p> <p>地域との連携における対外的な活動として子どもたちに料理の楽しさを伝えるという目的における総合評価では結果を残せたが、活動を通して学生の成長を見ると、開放的な学生の伸びは良かったが、そうでない学生の伸び率は低かった。就職活動結果にもその差が現れている。</p> <p>CKP を行う上での目的は対外的な活動には責任が伴うことを学ぶことと、個々の学生の弱点を克服することの2つがあると考えているが、本年度は後者に対する仕掛けをじっくり考えて行くことが必要であったと痛感し反省する。</p>
プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法 学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか	<p>料理を学ぶ学生が「料理」をツールとして活動することは入りやすいことであり、どの学生も試作においては積極的に参加できていた。</p> <p>一方、意見交換や持ち帰りレシピやタイムテーブル、発注表などの文書作成には今ひとつ対外的なものであるという意識が低く、「より良くする」というこだわりを持って進められることに欠けた部分が散見された。</p> <p>本人以外の目からの意見を求めるために素案時点の資料に疑問点を指摘させた。教員の求めるところまで意見が出ない場合は気になる箇所を挙げて改善案を出させた。その指摘箇所は書き直させ再提出とした。</p>
学生の資質の向上度合いについての感想 次の4つの観点から (1) 主体性 (2) 計画力 (3) 傾聴力 (4) メンタルコントロール力	<p>前述の自己評価アンケートでは学生自身は全体的に良い評価であったが、教員から見た向上度合いの視点では元々持った資質のままで、特に向上が目立った学生はいなかったと感じている。ただ、学外での活動、もしくは仲間以外の人の目がある所で活動することは緊張感があり、社会経験としては効果があったと評価する。</p> <p>(1) 主体性: 好きな料理が主たるツールであったため、献立を決める際にも早く決まった。そういう点では楽しく進んで参加したことは主体性の視点では評価できた。ただし文書作成には期日は概ねクリアできたが、仕上がりにこだわりが感じにくく、文章力やデザイン力に得手不得手が現れた。</p> <p>(2) 計画力: 大まかな流れは分かっているが、細部への配慮まで気配りできた者は少なかった。「よりよいもの」への執着力が弱い。自己評価では平均 3.5 で高かったが、教員が出した計画に沿って出来たということであり、それ以外に関して気を配り自発的に行動できたかという点では満足ではない。</p> <p>(3) 傾聴力: 学生の評価は 3.8 で殆どが高い評価であった。「アイデアを出し合いより良い活動になるようにした」が 6 名、「普段あまり話をしない人とも話をすることができた」が 2 名ということである。意見交換の際の場面を想像しての評価であろうが、言いたいことが言える仲間での意見が盛んに出たことが傾聴力と言えるならば一部の学生にはその力はあった。しかし、CKP によって伸びたかどうかの評価は弱い。ほとんど話をしなかった(性格的にできなかった)学生もいたのでこの評価には疑問が残る。</p> <p>(4) メンタルコントロール力: 嫌なことや面倒なことが何かは個人差があり、子どもが苦手とする学生も実際には子どもを楽しくリードしていたが、これが面倒なことだったのか、それとも文書作成が嫌なこと、面倒なことだったのか等、対外的な面か学内でのことかという細部に関しては補足説明がないので不明である。しかし、子どもに料理指導をすることに関して初めはぎこちなかったが次第にリズムが出てきたことは、慣れることでメンタルコントロール力がアップしたとも言えるであろう。</p>

プロジェクト成果報告書(教員)

チーム名(ゼミ名)		女子力を活かした路面電車の企画提案(伊藤プロジェクト)
テーマ		公共交通機関にもっとも興味が薄い世代と呼ばれるのが大学生です。その世代である女子学生がどんな提案をして公共交通＝路面電車に貢献できるかがテーマです。
組織	連携先	豊橋鉄道株式会社 鉄道事業営業部 課長 長田明人 豊橋市役所 都市交通課 主査 山口 雅巳
	指導教員	伊藤 圭一
	メンバー	渡会 美幸(21236120) 新垣 明美(21236201) 池谷 美代子(21236202) 伊藤 右京(21236203) 小笠原 佳織(21236204) 菊田 紋菜(21236205) 黒柳 光加(21236206) 佐野 琴美(21236207) 原田 夏実(21236209) 彦坂 美香(21236210)
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		路面電車の企画には若者(自分たち女子学生)の参加できる企画がないのはなぜか?という疑問から始まった企画です。彼女たちの意見を企業の方に聞いていただくことで「なぜ、できないのか?」が分かり、社会における企業の営業、もっと大きな視点での経営について触れることができると意図して彼女たちについて紹介をしたところ、豊橋鉄道様の協力を得ることができました。路面電車の企画に参加して、企業の視点、お客様の視点の両方を感じることができました。その体験したことを座談会形式で企業の方に聞いていただき、企画の仕方、提案の仕方、企業の在り方を学ぶことができました。
プロジェクトの活動内容		4月 女子力を地元を活かす場面を考える 5月 メンバーからの提案をされた場面をまとめる 6月 まとめた案を学校に提出し活動を開始する 7月 豊橋鉄道の担当者、豊橋市役所と担当者と打ち合わせをする 8月 豊橋鉄道の担当者から提案いただいた通常運行の電車に対する意見をまとめる作業に取り掛かる。 路面電車イベントに参加する(8月8日と10日) 9月 プロジェクト内で報告会をする 10月 LRT サミットに向けての準備に参加する 11月 豊橋鉄道様と座談会を実施 12月 成果報告を行う 1月 最終報告を行う

<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<p>イベントに参加し座談会で意見交換をして以下のことを学生が気づいたようです。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 企業は、目標を設定し、途中にある問題を解決することを行っている、つまり、どんなに楽しい企画でも「目標」と関係ないことは採用されない。 ② 「目標」と関係あることに対して努力をすることが「評価」につながるという点も同時に理解できた。(つまり、何でも頑張ればいいのではなく、評価される頑張りが企業の中では限定されていることを理解した) ③ 座談会で「うちの会社に入りませんか？」と企業の方から言われて学生がおり、学生たちお互いが、企業の方の視線、採用したい人物について意識することができた。 ④ 駅前電停に対する提案をしたところ実際に「おでんしゃ・ビール電車のりば」の看板がかかり学生たちの提案が通じることになった。 <p>企業の方とのやり取りは厳しく感じるものもありましたが、以上の4つのことを学生は学んだようです。</p>
<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<p>・貸切電車の運行スケジュールが空いておらず、プロジェクトの終了前に運行は不可能とわかった。ただ、代替案として通常運行内での企画を提案してほしいと依頼をされました(運転手イケメンコンテストなど自由な発想でしてほしいとの要望が出ました)。</p> <p>・学生たちが自由にテーマを決めるところからスタートすると</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 積極的な学生と消極的な学生にわかれてしまう ② 計画通りに行かないことが多く、それを「無計画」と学生が感じてしまう ③ 教員がアドバイスをしすぎると学生自身が主体性がないと感じてしまう点が問題点と感じました。 <p>① ②③を通じて学生が知らずに学んだ点もあるのですが、その内容を教員がまとめきれていない面がありました。</p> <p>教員が仕切るところ、学生が主体性をもってする場面の両立に心掛けたいです。</p>
<p>学生の自己評価アンケート 結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<p>主体性・計画性・傾聴力・メンタルコントロール力ともに3を下回った。計画性以外は2.9、計画性は2.4であった。企業の方に合わせながら先方の提案を受け入れながら進めることが「無計画」な感じを与えたのだと思います。計画の変更は相手がある以上当然という振る舞いを教員がするだけでも学生に「無計画」という印象を与える機会が減ったのではないかと反省をしています。</p> <p>活動内容を自分たちで考えたこと、夏休みにも活動をしたこと、座談会で企業の方から厳しい言葉をいただいたこと、それでも自分たちの提案を活かしてくれていることを学生たちなりに理解し満足しているようでした。</p> <p>プロジェクト活動の中で2つのグループに分かれており、対立まではいかないものの、中を取り持つ友人がなく教員が橋渡しをせざるを得なかったのが残念です。社会に出ると、職場内のグループの対立や、グループでない人物と仕事をするとは避けられません。避けられないからこそ、いま、経験しておくことが大事であると明確に伝えられなかったことを反省しています。</p>

<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<p>企画内容を学生が決まるまで待つ、そして提案をしてきたら評価するなど学生が主体的に活動していると感じられるように工夫をした。企業の方を、お招きし座談会を学生たち自身で運営するなど、学生が主体となって活動できる場面を設定しました。</p> <p>教員が主軸にならず、座談会など企業の方が仕切るような場面を多く作り、同じ仕切りによるマンネリ感の内容に工夫をしました。</p>
<p>学生の資質の向上度合いについての感想</p> <p>次の4つの観点から</p> <p>(1) 主体性</p> <p>(2) 計画力</p> <p>(3) メンタルコントロール力</p> <p>(4) 傾聴力</p>	<p>学生の謙虚さからか平均して自己評価は 2.9(計画性は 2.4)です。担当教員から見ますと3もしくは4くらいあると思います。教員から見ると向上していても学生から見ると向上が感じられない理由についてまとめます。</p> <p>主体性を発揮したテーマ選びは、4月の段階なので学生たちの記憶から薄れてしまっています。その点が自己評価には表れていないのが残念です。加えてこの時期に「協力的でない」学生に悩んだり、毎年テーマの決まっているゼミの活動をうらやましく思ったりもしていました。つまり、4月初めの段階の苦労を通じて「主体性」「メンタルコントロール」「傾聴性」などが、その前の段階よりも身につけていると思われます。「計画性」については自分たちで計画を立てたという満足感よりも「計画」自体をどんどん変更せざるを得なかった点が自己評価の低さにつながっているが、「臨機応変さ」について身につけることができたと自信を持ってほしいです。</p> <p>臨機応変に対応できるのは「計画性」があることによってであることを気が付かせればよかったなと反省しています。</p>

プロジェクト成果報告書(教員)

チーム名(ゼミ名)		うずラッキー・プロジェクト(今泉ゼミ)
テーマ		豊橋の特産品「うずら」をキーワードにしてプロジェクト活動を展開する
組織	連携先	豊橋市 産業部 農業支援課 (豊橋市役所 西館3階) 白井正利さん、大谷真知子さん 0532-51-2472
	指導教員	今泉 仁志
	メンバー	沢崎 愛恵 鳥津 実佳 永島 佑美 平山 安衣子 藤原 由佳 前田 華那 村松 瞳 安井 友香 山内 愛 中島 理恵子 合計 10名
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		「ゆるキャラ」ブームの中、豊橋市の「ゆるキャラ」を見つけ出す学生がいた。 なかでも「うずラッキー」は、目新しく、皆にあまり知られてないので、これを採り上げようという話になり、どんな活動ができるのか議論を進めていった。 具体的活動は、「うずら」について学習し、創造祭で模擬店を開き、「うずラッキー」を大学構内に登場させることにした。
プロジェクトの活動内容		4月10日(水曜日) ・昨年度のプロジェクトを紹介するパンフレットを見せながら、このゼミでプロジェクトを運営するということを説明した。 4月16日(火曜日) ・プロジェクトのキックオフ講演会に参加した。「豊橋について知る」というテーマ 4月17日(水曜日) ・プロジェクト管理アプリと Handbook を iPad にインストールさせ、説明した。 4月24日(水曜日) ・プロジェクト管理システムを説明し、タスクの考え方を教えた。 ・プロジェクトで何をやるのか、皆でアイデアを練り始めた。 豊橋市「プラット」のカタログを読んだ。「プラット」との関わりで何ができるのか。 具体的に何をするのか、見えてこない。 5月01日(水曜日) ・プロジェクト活動で、どういふことを学ぶのか、その意義を教えた。 5月08日(水曜日) ・プロジェクト活動のテーマを練る。 5月15日(水曜日) ・「ゆるキャラ」というテーマで、いろいろなアイデアを出し合う。 5月29日(水曜日) ・プロジェクトテーマを、「うずら」にして、具体的内容を詰めていった。 6月05日(水曜日) ・プロジェクト実行計画書の原案を皆で検討した。 6月12日(水曜日) ・プロジェクト実行計画書を完成させた。計画書を提出した。 ・「ゆるキャラ」についての素朴な疑問について考えてみた。

	<p>6月19日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・豊橋と周辺の「ゆるキャラ」について調査。・「うずらの卵」のアピールポイントは何か、意見を出し合った。 <p>6月26日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・「うずら」を使ったレシピを考えさせたり、調べさせたりした。 <p>7月03日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・今後やらなければならないことを、各自で思いつく限り書き出させた。次週、まとめることにした。 <p>7月10日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・先週のアイデアをもとに、今後の活動リストをつくった。模擬店で何を売ったらよいのか、考え始めた。 <p>7月17日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・春学期のプロジェクト活動と学生生活を振り返らせた。 <p>7月24日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・プロジェクト中間報告書を完成させ、提出した。・模擬店を出すための書類を仕上げ、提出した。 <p>8月 夏期休暇中の活動は無し。</p> <p>9月18日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・短大最後の秋学期への抱負を書かせた。 <p>9月25日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・模擬店参加書類を作成した。 <p>10月02日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・「うずら卵フライ」を家庭で試作した友達の報告を皆で聞いた。創造祭までにやらなければならないことを詳細に検討した。 <p>10月09日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・模擬店のポスターやチラシを作り始めた。 <p>10月16日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・暴風警報発令で休講となった。 <p>※今回の活動では、台風の影響が大きかった。</p> <p>10月23日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・模擬店の看板やチラシを完成させた。・教員が試作した「うずら卵フライ」を皆で試食した。・創造祭前の最終確認をした。 <p>10月25日(金曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・台風接近のため、調理室での前日準備を中止した。 <p>10月26日(土曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・創造祭実施が決まり、対応した。 <p>午前中に「うずら卵フライ」を調理室で調理し、出来次第、模擬店で販売した。</p> <ul style="list-style-type: none">・午後に晴れ間が広がってきたので、「うずラッキー」を大学構内に登場させた。 <p>10月30日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・今回のプロジェクト活動を総括した。・各自で活動を振り返らせ、感想を書かせた。 <p>11月06日(水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none">・プロジェクト活動報告書の下書きを、皆で手直した。
--	--

	<p>11 月 13 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト活動報告書 (学生) を仕上げた。 ・発表用スライドのあらすじを皆で考えた。 <p>11 月 20 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表用スライドの編集を始めた。 <p>11 月 27 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表用スライドを仕上げた。 <p>12 月 04 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スライドの発表練習をした。 <p>12 月 11 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト活動の学生座談会への対応 <p>12 月 18 日 (水曜日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト成果発表会へ参加した。
<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトテーマを、教員が用意することなく、学生が発案してくれたこと。 ・学生が、豊橋の特産品「うずら」に興味を持ったこと。 ・学生に模擬店を出した経験がなく、新鮮な印象を持って活動できたこと。 ・看板・チラシ作りなど、協働作業が連帯感を強めたこと。 ・終了時に、もっと違う動き方ができたのではないかと反省してくれたこと。 ・調理の木下先生や朝倉先生と連携できたこと。
<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・どうしても、いくつかのグループに固まりがちである。 ・活動時間の確保は、毎年の課題である。全員が空いている時間は、本来のゼミの時間 (水曜日 1 限) だけなので、一部のメンバーで進める場面も出てくる。 ・活動のレベルが低い、なかなか活性化できない。 ・言ったことをやらせることはできるが、言われないことを自ら考えて行動するところへ持って行くのは大変である。
<p>学生の自己評価アンケート 結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・概して、高い評価をしている。 ・教員が期待している活動レベルより低い、学生達には、達成感があったようだ。 ・成果発表会の後でアンケートを実施しているので、発表会そのものの意義を理解してくれている学生がいる。他のプロジェクト発表からも学んでいる。 ・自分がそれほど活躍していなかったことを、素直に反省している学生もいた。 ・やれなかったことを、楽観的に反省している。こうすればよかったと意見を言うことは容易だが、では本当に実現可能なことなのか、どうしてできなかったのか、という深い反省はできていない。

<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトテーマでアイデアを出す段階では、ブレインストーミングや KJ 法などの手法を学生に紹介した。 ・ディスカッション なかなか活発な意見交換にはならない。特定の学生が主に話しがちである。相手に反論したり、相手を論理的に説得するレベルにはいかない。 ・グループワーク 看板・チラシ作りなどの作業は、協調性を育成するのには役立つようだ。話し合いだと親しい学生同士がかたまるが、作業となると普段と違うメンバーが協力し合う場面が見られた。学生も、親しくない学生と仲良く話ができたと感想を言っていた。 ・プレゼンテーション スライドの構成を考えるプロセスを皆で共有することで、やったことをどうやってストーリーに組み立てていくのか学習させた。 ・振り返り ことあるごとに振り返りの機会を設けた。
<p>学生の資質の向上度合いについての感想</p> <p>次の4つの観点から</p> <p>(1) 主体性 (2) 計画力 (3) メンタルコントロール力 (4) 傾聴力</p>	<p>(1) 主体性 自由討論で、プロジェクトテーマを自分たちで決めさせた。</p> <p>(2) 計画力 創造祭で模擬店を出すという具体的目標を与え、全体を計画させた。</p> <p>(3) メンタルコントロール力 模擬店で、調理するという作業を協力してやらせた。</p> <p>(4) 傾聴力 模擬店の看板・チラシ作りでは、ワイワイガヤガヤあれこれ相談しながら作業を進めていた。</p>

プロジェクト成果報告書(教員)

チーム名(ゼミ名)		お茶入門・プロジェクト (木下ゼミ)
テーマ		お茶について、多方面に学習すること。
組織	連携先	<p>ごとう製茶 代表者 後藤 元則 氏 〒441-3122 豊橋市小島町字西縄口 220 TEL) 0532 41 0805</p> <p>泉園茶舗 代表者 小林 勤 氏 〒440-0076 豊橋市大橋通 1 丁目 46 TEL) 0532 52 6051</p>
	指導教員	木下 賀律子
	メンバー	藤村 美里 宇野 聡美 齋藤 裕美 篠田 亜紀 杉村 真奈美 田中 彩菜 広浜 彩江 村田 ゆみこ 山本 みどり
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		<p>調理師・フードコーディネーターの資格を目指す学生にとって茶の知識を身につけることは、食を取り巻くいろいろな場面において活用できると考えたためである。以下に具体的な方法を記す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本の茶の歴史を学ぶ。 ・ 茶の種類や作り方について学ぶ。 ・ それぞれのお茶(紅茶・煎茶・抹茶)について、適した淹れ方・点て方を学ぶ。 ・ 茶をコミュニケーションのツールとして、利用の仕方を学ぶ。 ・ 茶に合うお菓子を考える。 ・ 茶を食材として考え、茶葉を使ったお菓子の製作をする。
プロジェクトの活動内容		<ul style="list-style-type: none"> ・ 自ら茶の葉を摘み、簡易的な製法ではあるが茶葉を加工して煎茶や紅茶にする体験を味わう。 ・ (ペットボトルが当たり前になりつつある今)、おいしいお茶の淹れ方について学ぶ。 ・ お茶についてのルーツや健康効果を iPad 等を使って調べ、お茶がもたらす癒しの効果について研究する。 ・ 茶葉(紅茶・煎茶・抹茶)を使ったお菓子・お茶に合うお菓子について研究・製作し、創造祭でそれらのお菓子の作品展示やカフェ「ポティロン」を開催する。

	<p>4 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 今年度の CKP 活動の内容を話し合う。 ◇ 7 月に実施の紅茶セミナーに使うコンフィチュールの試作。 <p>5 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 広報部からの依頼で、高校の先生方を対象にしたお茶の接待を手伝う。(その際使用のクッキーを、前もって焼成。) <p>6 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 具体的な活動について内容を話し合い、夏休み中の活動計画を立てる。 ◇ (6 月 15 日のオープンキャンパスにて) [SOZO カフェ]開催に伴い全員で協力し、お菓子の製作&パッキングを実施。(220 人分) また緑茶を使ったクッキーのデモンストレーションを実施し、緑茶&ホワイトチョコのクッキーをデモ見学者にプレゼント。(40 人分) (CKP 活動実行計画書 作成) <p>7 月・8 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 7 月の毎月曜日は授業後、創造祭に出品する作品について茶を使ったお菓子の試作を開始。 7/1・7/8・7/15・7/22 の授業後、活動。 7/29・8/5 については午前 10 時から午後 2 時まで、カフェに出すお茶とお菓子の種類を検討し、試作。 ◇ 7 月 15 日の紅茶セミナー(調理実習Ⅳ)で、紅茶についての知識を深める。 ◇ 7 月 28 日豊橋公園内の三の丸会館にて、抹茶に関する空間の研究と茶を楽しむ。 ◇ 7 月 30 日に、紅茶・煎茶の手作り体験(全員参加)。 (ごとう製茶にて、終日) (CKP 活動中間報告書 作成) <p>9 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 毎週木曜日を準備日として積極的に活動する。(創造祭まで) ◇ 泉園茶舗にて、抹茶についてお話を伺う。 ◇ お茶に関する健康効果について調べる。(iPad 利用) ◇ カフェ設営の準備。(会場・それぞれの役割分担を決める。) ◇ 展示作品完成。 <p>10 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 会場設営・展示作品の入念な、リハーサルを実施。 ◇ カフェで提供するお菓子作りを実施。 ◇ 展示作品・会場内の飾りつけ等を計画に従い、チームワークよく行う。 ◇ 創造祭にて、お茶をテーマとした展示作品&カフェ「ポティロン」を開催。 <p>11 月</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 活動記録をまとめる。
--	--

	<p>12 月 ☆ CKP 活動の発表に向けてパワーポイントの準備、 報告書作成（学生）</p> <p>1 月 (CKP 活動最終報告書作成 教員)。</p>
<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 茶摘みから、お茶の発酵・手揉み・乾燥・袋詰めまでの一連の操作を茶農家の方から体験させていただけたことは、良い社会体験になったと思う。その後の授業で紅茶や煎茶の話になると、いまだにその時の話題が出てくる。 • 学園祭で展示した作品をなるべく多くのお客様に見ていただくための催しとしてカフェを開催した。自分たちでしっかり立案し、企画運営することができた。 また学園祭当日に台風上陸が危ぶまれた為、準備の段階で作品展示を延期するのか、カフェをどうするのか等の話し合いの場で、普段は、無口な学生も意見を出すなど皆熱心に対策を考えることができた。 それまで取り組んできたプロジェクトに対する熱意が感じられた。 • 学園祭前日に調理師クラスの卒業生が4人、後輩の応援に駆けつけてくれた。卒業生から、社会で働く厳しさや、社会に出たら仕事中心で自分の時間が持てなくなるので、学生時代の今の時間を大切にしようが良いなどのアドバイスを聞くことができた。 その他、学園祭当日も卒業生や多くの来場者で賑やかな展示会場&カフェとなり、学生たちは忙しい思いをしながらも達成感を味わうことができた。 • 本プロジェクトを実施することで、授業以外で実習する機会も増え(特にお菓子について)知識を得たり技術を高めることができた。また、作品展示等を通して料理の見せ方、活かし方についても考える場を持つことができた。
<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 7月に実施した紅茶セミナーの進め方で、紅茶の知識・淹れ方・ティーフーズの実習等内容を多くしすぎた感がある。ほとんどの学生たちは、紅茶に対してビギナーなので、もう少し丁寧に紅茶と向き合えるような時間配分について留意したい。 • グループを抹茶・煎茶・紅茶に分けて進めたため、全体がそれぞれのお茶について深く関わりを持てた訳ではない。時間や予算に制約があるためグループ分けをしたが、良かったかどうか検討する必要があると思う。 • 展示作品を作るにあたり、慎重さに欠けるため同じ失敗を何度も繰り返す学生がいた。調理師として今後仕事についてからも 注意力不足から来るミスは許されるものではないので、しっかり考えて実習するよう指導していきたい。

<p>学生の自己評価アンケート結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<p>(自己評価アンケート結果より)</p> <ul style="list-style-type: none"> 今回のアンケート結果が、朝倉・木下プロジェクトの自己評価となっているため、本プロジェクト単独の評価を把握しかねるところもあるが、概ね高い評価であった。 意見として ①皆で楽しく活動できたと思う。②知らなかった知識が増えた。③クラスの中がより深まったので、良い経験になりました。④普段することがない経験ができた。等があった。 <p>(総括)</p> <ul style="list-style-type: none"> 真面目で大人しめの学生たちに対して、いかにして積極性をもたせるかに腐心したこの1年であった。 <p>中間報告書にも書き記したが、本プロジェクトは一部を除き、ほとんどが授業以外の時間帯で活動を実施している。にもかかわらず、学生たちの出席状況はすこぶる良い。この点は、評価したい。学園祭関連のプロジェクトもそれなりにこなしていた。12月のプロジェクトのまとめも、しっかりパワーポイントを作成し入念な練習の上、のびのびと発表できた。しかし、従来のヴィヴィッドな学生たちとは違う雰囲気を感じてしまうのは考えすぎであろうか。プロジェクト活動は、学生の成長のためであると同時に教員も指導のあり方等成長させてもらえるものと捉え、今後も真摯に取り組んでいきたい。</p>
<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<ul style="list-style-type: none"> 普段の実習授業での成果を活かす場面として、またそのためにグループ討論や自ら実践・体験するなどのアクティブラーニングの手法も取り入れた以下①～③の活動を実施した。 ①5月に実施した外部の方々に、学生達がお菓子を焼きお茶の接待をする。 ②6月のオープンキャンパスで、カフェ開催(ドリンク・焼き菓子準備)やクッキー作りのデモンストレーションを実施。 ③学園祭で、作品展示やカフェを開催し「おもてなしの気持ち」を持って、多くの来場者に接することができた。
<p>学生の資質の向上度合いについての感想</p> <p>次の4つの観点から</p> <p>(1)主体性</p> <p>(2)計画力</p> <p>(3)メンタルコントロール力</p> <p>(4)傾聴力</p>	<p>(1)主体性</p> <p>どのお茶を選択するかグループ分けを始めとし、自己の作品選びやカフェでの役割分担など自分の意思を反映させながら活動に取り組むことができた。</p> <p>(2)計画力</p> <p>学生の報告書「お茶入門・プロジェクト」の中に「調理師クラスという責任を持ち行動することができた」と記してある。行動の前にしっかりとした計画は、必須アイテムである。特に大きなイベントの前には、計画に重きを置き行動していた。</p> <p>(3)メンタルコントロール力</p> <p>学生たちはいろいろな場面で外部の方々と接することがあったが、ソフトな態度で対応することができた。学園祭の時は、自分たちの決めたことを何があってもやり抜こうとするメンタルコントロール力や主体性を見ることができた。</p> <p>(4)傾聴力、</p> <p>お茶についての講義や学外研修では傾聴力を持ち、学習することができた。また、イベントの遂行にあたっては意見を出し合い、皆のやる気を損ねることなくうまく進めることができた。今年のチームは(1)～(4)の中で最も得意とする分野ではないかと思う。今後、この能力をコミュニケーション作りに活かしてもらいたいと願っている。</p>

プロジェクト成果報告書(教員)

チーム名(ゼミ名)		防犯プロジェクト(細谷ゼミ、中島ゼミ)
テーマ		働く意欲の向上を目指す取り組み
組織	連携先	豊橋警察署生活安全課生活安全課 斎藤晃一 巡査部長 0532-54-0110
	指導教員	細谷邦夫 中島剛
	メンバー	安藤知佳泉(21136601) 荒島ほのか(21236101) 伊藤美和(21236102) 岩佐彩加(21236103) 岡田麻希(21236104) 金子絵美(21236105) 久保田早稀(21236106) 柴山玲菜(21236107) 清水志帆(21236108) 下澤成美(21236109) 杉浦恵美(21236110) 高柳遥(21236111) 田中友梨(21236112) 富安紘子(21236113) 中野悠希(21236114) 野口恵里(21236115) 宮下彩乃(21236116) 村田友美(21236117) 本山ちえみ(21236118) 山本莉加(21236119)
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		学生たちが、人のために働いた経験が少なく、働く意欲が希薄なことから、自ら働く意欲の向上を図る必要があると考えた。そうした中で、地域の安全・安心に学生としてどのように貢献できるのか考え、防犯ボランティアチームの活動を通して、人のために働く意識と意欲の向上を目指す活動に取り組むこととした。
プロジェクトの活動内容		4月10日(水曜日) ・ゼミにてCTS(防犯ボランティア Clean Team SOZO)の活動説明をして、この活動に参加することを決め、具体的な活動を計画した。 4月25日(木曜日)第1回地域巡回:学生7名、教員1名参加 ・地域を巡回して、清掃活動とあいさつ運動をしながら、防犯活動を行った。 5月14日(火曜日)第2回地域巡回活動:学生5名、教員1名参加 5月15日(水曜日)第1回講演会:学生10名、教員1名参加 ・豊橋警察署の斎藤さんから、「豊橋市の防犯」と題した講演会を実施し、豊橋市の犯罪の状況や防犯に対する心構えを教えていただいた。 5月23日(木曜日)第3回地域巡回活動:学生5名、斎藤さん、教員1名参加 5月30日(木曜日)痴漢防止キャンペーン:学生9名、教員1名参加 ・豊橋駅ペDESTリアンデッキにて、豊橋警察署生活安全課員、豊橋市役所安全生活課員、豊橋鉄道職員と「痴漢防止キャンペーン」に参加した。 6月27日(木曜日)第4回地域巡回:学生10名、教員1名参加 7月3日(水曜日)第2回講演会:学生20名、教員2名参加 ・豊橋警察署の斎藤さんから、豊橋市の防犯活動についてのお話を聞いた。 ・豊橋警察署斎藤晃一巡査部長による、「豊橋市の防犯」と題した第2回目の講演会を実施した。 7月13日(土曜日)農業祭防犯キャンペーン:学生6名、教員1名参加 ・のんほいパークで行われた市民農業祭りにおける豊橋警察署ブースで、犯罪防止キャンペーンに参加した。 7月17日(水曜日)松葉町環境浄化活動:学生17名、教員2名参加

	<ul style="list-style-type: none"> ・松葉町の環境浄化のため、落書き消しやシールはがしを行った。 7月19日(金曜日)第6回女性安全フォーラム:学生1名、教員1名参加 <ul style="list-style-type: none"> ・愛知県警察本部主催の「第6回女性安全フォーラム」に参加し、県内の防犯活動や他の大学の学生の防犯活動を聞いた。 7月25日(木曜日)第5回地域巡回:学生14名、教員1名 8月3日(土曜日)少年立ち直り支援活動:学生3名、教員1名参加 <ul style="list-style-type: none"> ・「愛知コノハファームプロジェクト」の一環として、「KONOHA FARM FUNATO」の開園および少年に手を差し伸べる立ち直り支援活動に参加し、料理教室の手伝いをして、少年たちとの交流を図った。 10月2日(水曜日)第6回地域巡回:学生7名、教員2名参加 10月30日(火曜日)第7回地域巡回:学生5名、教員1名参加 11月13日(水曜日)構内巡回:学生16名、教員2名参加 <ul style="list-style-type: none"> ・構内巡回として、自転車置き場ではみ出している自転車の数や、施錠の状況を調べた。 11月25日(月曜日)東三河警察ボランティアサミット2013:学生5名、教員1名参加 <ul style="list-style-type: none"> ・東三河で少年補導に携わっている人たちの会に参加し、講演と各地域の活動報告を聞いた。その後の懇談会では、参加者の人たちから各地区の状況や活動内容を聞くことができた。 12月2日(月曜日)年末特別警戒(月曜日):学生13名、教員1名参加 <ul style="list-style-type: none"> ・豊橋駅前ペDESTリアンデッキで、年末特別警戒発足式に参加し、その後駅前防犯キャンペーンを行った。 12月4日(水曜日)第3回講演会・護身術:学生17名、教員2名参加 <ul style="list-style-type: none"> ・豊橋警察署生活安全課係長安藤倫光さんから、防犯活動についてお話を聞いた後、護身術の講習を受けた。 1月15日(水曜日)豊橋警察署長表彰:学生1名参加 <ul style="list-style-type: none"> ・豊橋警察署長より、CTSの日ごろの活動に対し表彰状をいただいた。
<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<p>(1) 地域の巡回は月に一度を目標に計画し、ほぼ予定通りに実施できた。</p> <p>(2) 5月30日の「痴漢防止キャンペーン」では、初めてであったがメンバーが積極的にキャンペーンを行い、その後の活動に対しても前向きな姿勢が見られた。</p> <p>(3) 豊橋警察署の方からお話をいただき、防犯に対する意識の向上が見られた。</p>
<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<p>(1) CTSの活動やキャンペーン活動を計画するときに、アルバイトなど学生のスケジュールが合わないため、参加者が少なくなった行事があった。</p> <p>(3) 学生の主体的な活動を目指していたが、豊橋警察署や豊橋市社会福祉協議会などとの連絡は主に教員がしていたため、地域巡回などを除き、学生の主体性の向上を図ることができなかった。</p>
<p>学生の自己評価アンケート 結果を見ての感想・意見 プロジェクト活動の総括</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの活動に対する学生の感想(抜粋) (1) 地域巡回 <ul style="list-style-type: none"> ・地域の人からあいさつを返してもらってとてもうれしかった。もっと自分から挨拶をしていこうと思いました。 ・暑かったり寒かったり大変でしたが、子どもたちとあいさつを交わしたときの笑顔は忘れません。 ・人が少なく、地域がこういう状況だと空き巣など犯罪が起きるといふ豊橋警察署の方の話が頭に浮かびました。

(2) 講演会

- ・身近な犯罪の様子を知り、自分も気をつけなくてはいけないと改めて思いました。
- ・様々なボランティア団体の活動内容を聞いて、他の多くの人たちが日々努力していることが分かりました。

(3) キャンペーン活動

- ・初めて街で通行人に、キャンペーンしました。配り方やあいさつなどしっかりできなければと思いました。
- ・すごく恥ずかしくて、声をかけるのにも勇気がいりましたが、笑顔で受け取ってもらえた時はすごく嬉しかったです。
- ・シールを張るのは簡単で楽しいかもしれませんが、はがすのは大変でした。町が常にきれいならこんなことはなくなるのかなと思いました。

(4) 少年立ち直り支援

- ・料理を手伝いました。はじめはなかなか自分から行動できませんでしたが、少しずつ自分のできることから手伝えるようになりました。子どもたちとも話ができるようになりました。

(5) 自転車防犯診断・痴漢防止講演・訓練

- ・無施錠の自転車が思ったより多かった。二重ロックがほとんどなかった。もっと防犯意識を高めることが必要だと感じた。
- ・痴漢防止講演・訓練で、女性に対する最近の犯罪傾向について勉強をし、避難方法のシュミレーションなどをして、今までの自分の考え方が甘かったなと思いました。

(6) まとめの感想

- ・ボランティア活動を通して、無償の働きだけ、人のために働いて、役に立つことは大切だと思いました。多くの方とコミュニケーションがとれたし、自分たちの町の安全性や現状が分かりました。他人事だと思って見て見ぬふりをするのではなく、自分から働くことが大切なことだと思いました。卒業してもこのことを忘れず、ボランティア活動の良さを伝えられるようにしたいです。

・ 感想・意見

防犯プロジェクトは、防犯に限定されたプロジェクトであるが、個人差はあるものの機会を与えれば、学生たちは、自ら考え行動できることが分かった。

また、はじめは不安げに活動に参加していた学生が、後半では自信を持って行動できるようになったことは、一つの成果と思われる。

今年度は、地域巡回の日程及びコースについては学生が計画した。CTS のキャプテンが中心となり、計画し、欠席した学生には別の日を設定するなど学生同士で調整していた。一方で、警察署や社会福祉協議会との連携の面では、年度の計画はあったが、学生のアルバイトの予定などで、スケジュールの調整ができずいくつかの活動に参加できなかったり、参加者が少なくなったことがあった。

活動全体を通じて学生の行動を見ていると、個人差はあるものの、学生は機会が与えられれば、それぞれで考え自分のできることから行動できるようになることが分かった。

学生の自主性を高めるために、地域巡回以外でも、計画段階での学生の参加や、関係機関との連絡調整をできるようにするとともに、学生が活動できる場の提供を進めていきたい。

<p>プロジェクト活動で使ったアクティブ・ラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加するためにどんな工夫をしたか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 企画・立案・行動と学生が主体的に取り組むべきものであるが、関係機関との連携では、教員が調整する必要があった。 ・ フィールドワーク 事前の調整は難しかった、それぞれの活動では、積極的に参加しようとする姿が見られた。 ・ ディスカッション 参加し、行動することが防犯活動であることから、活動の細かい部分では、連携を図るためコミュニケーションをとっていたが、行動計画そのものに対して互いに意見を交換する場面は少なかった。 ・ グループワーク CTS 全体で行動する機会は少なかったが、参加したイベントでは自分のことから互いに協力して活動していた。 ・ プレゼンテーション 準備の時間の関係もあったが、自分が活動したことは発表できるが、その活動の意味づけや内面を振り下げた質問には答えられない。 ・ 学生たちは、活動の内容や意味が分かれば積極的に参加するが、活動内容が見えない場合は消極的であった。このため、できるだけ前年度の様子を説明したり、豊橋警察署の方からの説明を密にして、学生たちの不安や疑問に答えるようにして、参加を促した。
<p>学生の資質の向上度合についての意見</p> <p>次の 3 つの観点から</p> <p>(1) 主体性</p> <p>(2) 計画力</p> <p>(3) 傾聴力</p> <p>(4) メンタルコントロール力</p>	<p>(1) 主体性 学生に個人差はあるが、計画段階では受け身であっても、活動場面では主体的、積極的に参加しようとする場面が見られた。</p> <p>(2) 計画力 本プロジェクトでは、行事の計画段階では教員が調整しているため、地域巡回を除き学生の計画力の向上を図る場面は少なかった。</p> <p>(3) 傾聴力 駅前キャンペーンや少年立ち直り支援などでは、面識のない人たちと対応することが多く、傾聴力を養うことができたと思われる。また、講演会では身近な犯罪など興味関心のあることが多かったため質問等をしながら講演会に前向きに取り組んでいた。</p> <p>(4) メンタルコントロール力 CTS の活動は、ボランティア活動であり、自分のできる範囲で活動するのが基本なため、強いストレスを感じることは少なかったと思われる。対外的な場面で、自分の立ち位置を考えて行動する緊張感があったと思われるが、特にメンタルコントロール力を高めるものではなかったと思われる。</p>

プロジェクト成果報告書(教員)

チーム名(ゼミ名)		花岡ゼミプロジェクト(花岡)
テーマ		秋葉道木の駅プロジェクトへの企画・調査協力と地域通貨アキハ券のPRと流通促進策の調査
組織	連携先	特定非営利活動法人 穂の国森林探偵事務所 理事長 高橋 啓 〒441-1387 愛知県新城市北畑 18-1 Tel 0536-29-9597 Fax 0536-29-9505 E-mail honomoritan@gmail.com
	指導教員	花岡 幹明
	メンバー	近藤真由(21236306)、鈴木萌(21236307)、松原安香音(21236310)、 縣奈美(21236401)、飯田望(21236402)、浦野 彩(21236403) 大岩明日香(21236404)、大貫みのり(21236405)、小田梨賀(21236406)
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		東三河地域における社会起業家の活動との接点を持つことで、学生が地域や社会に貢献することを体験的に考え、理解し、自らの成長にむけた経験学習サイクルの展開を期待し、プロジェクトを実施した。 本プロジェクトでは、新城市大野地区周辺で行われている『秋葉道・木の駅プロジェクト』の活動に協力し、地域社会への貢献を果たすと共に、商店街でのアンケートやインタビュー調査、消費実験などに参加し、市場調査(マーケティング)に関する知識の実践的学習を目的とする。 (木の駅プロジェクトとは、様々な地域で展開されている森林整備と地域経済の活性化を目的とした事業(社会実験)である。)
プロジェクトの活動内容		主な活動内容は、①秋葉道・木の駅プロジェクトに関する取材と新企画の提案、②地域通貨アキハ券の利用実験、③プロジェクト情報誌「木の駅ニュース」における記事(「大野のお店ご紹介」)作成のための商店街調査であった。 ① 秋葉道・木の駅プロジェクトに関する取材と新企画の提案 木の駅プロジェクトの事業展開に向けての学生らしいアイデアが欲しいという依頼を受け、その現状や概要などを調べ、企画・プレゼンを実施した。学生は 2 チームに分かれ、木の駅プロジェクトの概要や他の地域での取り組みなどを調べ、各自でテーマ(方向性)を決め簡単な企画書を作成した。7 月、実行委員会の高橋氏に提案企画のプレゼンを行った。その中で、地域の子供たちを対象とした森林・木材に関する啓発や教育イベントが、11 月 17 日(日)に地元小学生の体験教育事業『大野の山で森のおこづかい稼ぎ』として実施された。 ② 地域通貨アキハ券の利用実験 8 月に、地域通貨アキハ券の利用実験に参加した。これは間伐材の出材で得られた対価や木の駅プロジェクトの活動に参加した報酬として得られるチケットで、新城市の大野商店街や湯谷温泉の一部店舗(31 店)でのみ使用することができるものである。このアキハ券がいかに使われるかを知るため、また使用上の問題点等を探るために、実際に大野商店街で店巡りや買い物実験を行った。 ③ 木の駅ニュース(発行紙)の取材と記事作成 木の駅プロジェクトが活動期間内に発行している「木の駅ニュース」という情報紙の中の『大野のお店ご紹介』記事の作成を担当させていただいた。これはアキハ券加

	<p>盟店をより利用し安くするために、各加盟店のご主人を紹介したり、創業・開業の経緯、アキハ券で買えるオススメ商品など紹介するコーナー記事である。今回は 2 チームに分かれて、4 店舗の取材を行った。各チームでは、取材者、撮影、音声・記録という役割分担を行い、インタビュー取材を実施し、取材後、記録内容や音声データから、記事原稿を作成した。</p>
<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<p>○外部者との接点を持つ(外部者の役割) 当初は、プロジェクトテーマに疑問を持つ様子が伺えたが、今回の協力者である高橋氏を大学にお呼びし、活動意義や彼らの活動に対する想いをお話いただき、また協力を求められたことにより、活動に対する姿勢や様子は変わってきたと感じられた。他者の想いに共感することや頼られるということは、自己の動機づけに影響を大きく与えるものだった。</p>
<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<p>○インタビュー取材と記事の作成 商店街でのインタビュー調査は、事前に各チームで過去の記事内容の確認や質問内容の検討など、時間をかけて準備してきたが、実際には、うまく回答が引き出せないことや想定外の回答に戸惑い、確認作業まで行き届かないことがあった。聞き取り調査は専門的に学んでいても、難しい面がある。決して十分と言える準備では無かったが、簡単なシミュレーションや質問票、想定問答など、ある程度準備していても、現場での臨機応変な対応が求められるとういうことである。この点について、もう少し簡単な練習等で経験を積ませておくべきだった。</p>

<p>学生の自己評価アンケート結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<p>最初は自信もなく、参加意識が乏しかったが、成果が出たことや外部者からの期待や協力はある程度有効にモチベーションにつながっていたように思う。また、成果についての反省も十分行われていることがわかり、学生の主体的活動の側面もうかがえる。</p> <p>今回のプロジェクト活動では、学生全員が高い参加意識で臨んだ訳ではないため、いかに動機づけを行えるかが重要なポイントであった。外部者との接点を持つことは、やはり、参加学生の意識を変える効果があった。人の想いに触れ、また頼られることは、自らの活動に意義を見出すことであり、課題設定や反省につながったと思われる。ただし、反省を次に繋げるプロセスまでは、活動期間や依頼された作業期間との兼ね合いで、進めることができなかった。この点は、外部者との連携における問題点でもあり、反省するところである。</p>
<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・外部協力者による講義(概要説明、ディスカッション、協力依頼) ・グループワークによる課題作成 <ul style="list-style-type: none"> ・外部協力者の講義において、彼らの動機(なぜそのような活動をするのか)や想いなどを語ってもらうこと。学生とディスカッションしてもらうこと。 ・学生の成果に対して、まずは良い点を褒め、課題・問題を考えさせる。
<p>学生の資質の向上度合いについての感想</p> <p>次の4つの観点から</p> <p>(1)主体性 (2)計画力 (3)メンタルコントロール力 (4)傾聴力</p>	<p>(1)主体性 学生の反省にもあるように、自らの成果に対して反省点や改善点をあげるなど、主体的な経験学習の片鱗をみることができた。学生の主体的な学習行動に向けて、教員が一方向的に意識づけることは困難である。今回のプロジェクトでは、最初の段階で、学生の目的意識が低かったため、具体的な事象と外部者の存在が学生の課題設定に大きな影響を持っていた。</p> <p>(2)計画力 インタビュー取材の準備においては、役割分担や作業内容の確認など、自ら行っていた。結果としては、準備が不十分であったと各自が認識し、反省していたようであるが、経験値が低い状況では、当然であり、計画力も高まっていると感じられる。</p> <p>(3)メンタルコントロール力 メンタル(辛抱強さ)については、グループワークが多少は効いていたように思われる。個人差を埋めるには程遠いが、意欲の低いメンバーは他のメンバーにつられて努力する面も見せていた。</p> <p>(4)傾聴力 外部協力者の講義などでは、相手の話を聞こうとする力は非常に高かった。また、当然ではあるが、インタビュー取材の際も、相手を理解しようとする姿勢で行われていた。取材後の作業は、まさにその確認作業であり、傾聴力は高まりつつある。ただし、プロジェクト以外の面で、それが行われているかは不明である。</p>

プロジェクト成果報告書(教員)

チーム名(ゼミ名)		細谷ゼミ
テーマ		東三河を知らせ隊
組織	連携先	愛知県豊橋警察署生活安全課 生活安全係 齋藤晃一 氏
	指導教員	細谷 邦夫
	メンバー	安藤知佳泉 (21136601) 荒島ほのか (21236101) 伊藤美和 (21236102) 岩佐彩加 (21236103) 岡田麻希 (21236104) 金子絵美 (21236105) 久保田早稀 (21236106) 柴山玲菜 (21236107) 清水志帆 (21236108) 下澤成美 (21236109)
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		中島ゼミと合同で地域の安全・安心をめざし、地域の清掃活動やあいさつ運動をしながら地域を巡回し、豊橋警察署と連携して、防犯活動に参加する。 またそのような活動を対外的にアピールするためにホームページを活用して、ゴミゼロ運動発祥の地でもある東三河を全国に発信することについて、細谷ゼミ独自で活動をする。
プロジェクトの活動内容		中島ゼミと合同で地域巡回活動やボランティア活動のほか、防犯活動の一環として豊橋駅前でのキャンペーン活動、学内駐輪場の施錠状況を確認するとともに、不審者等に襲われたときのための護身術も学んだ。 その様子などをホームページにまとめて公開し、防犯意識の啓蒙を進めた。 5月30日(木)痴漢防止キャンペーン 学生9名参加 豊橋駅ペDESTリアンデッキで、豊橋市役所や豊橋鉄道の職員の人たちと痴漢防止キャンペーンを行った。 6月27日(木)・第4回地域巡回 学生10名参加 7月3日(水)・第2回講演会 細谷・中島ゼミ20名 豊橋警察署生活安全課生活安全係齋藤晃一さんから、豊橋市の犯罪状況についてお話を聞き、防犯の心構えなどを教えていただいた。

	<p>7月13日(土) 農業祭防犯キャンペーン 学生6名参加 のんほいパークで行われた農業祭の豊橋警察署ブースで、犯罪防止キャンペーンに参加した。</p> <p>7月25日(木)・第5回地域巡回 学生14名参加</p> <p>8月3日(土)・少年立ち直り支援活動(KONOHA FARM FUNATO) 学生3名参加 少年立ち直り支援活動に参加し、料理教室の手伝いをして、少年たちと交流を図った。</p> <p>10月2日(水)・第6回地域巡回 学生7名参加</p> <p>10月30日(火)・第7回地域巡回 学生5名参加</p> <p>11月13日(水)自転車点検学生16名参加 構内巡回として、各自転車置き場ではみ出している自転車の数や、ツーロック車の台数、施錠状況などを調べた。</p> <p>11月25日(月)・東三河少年警察ボランティアサミット2013 学生5名参加 少年補導に携わっている人たちの会に参加し、講演を聞き、各地域での活動報告を聞いた。その後の、懇親会では、各地区で活動している人たちのお話を聞いた。</p> <p>12月2日(月)・年末特別警戒学生13名参加 豊橋駅前ペDESTリアンデッキで、年末特別警戒キャンペーンを行った後、年末特別警戒発足式に参加した。</p> <p>12月4日(水)・講演・護身術学生17名参加 豊橋警察署生活安全課係長の安藤倫光さんから、防犯活動についてお話を聞いた後、護身術の講習を受けた。</p>
--	---

<p>うまくいったこと (成功事例)</p>	<p>当初ボランティア活動に非協力的・非積極的だった学生も、最後の頃には興味を持って行う事ができるようになり、ゴミや落書きが多い実態やそれを支える人たちの苦労を実感したことは学生のプラスになったと思われる。</p> <p>ホームページ作成の場面においては、パソコンが苦手な学生があまり関与しないかもしれないと危惧したが、情報処理演習を履修している学生とペアを組ませたところ、履修者のアドバイスを貰いながら、拙いながらもパソコンを操作してくれたことにより、苦手意識が若干薄らいだことと、学生同士の交流が広がった事は副次的ながらよかったと思われる。</p> <p>結果としてコミュニケーション能力の若干の向上と問題意識を持つきっかけになったと思われる。</p>
<p>計画通り進まなかったこと 明らかになった問題点 (失敗事例)</p>	<p>学生主導を尊重した結果、当初の計画が大風呂敷過ぎたため、プロジェクト内容を縮小せざるを得ないことになってしまった。</p> <p>学生の自主性を意識したとは言え、教員の適当な干渉が必要であることを実感した。</p> <p>対外的活動が多いため、活動に参加させる意識付がなかなかうまくいかなかった。</p>
<p>学生の自己評価アンケート 結果を見ての感想・意見</p> <p>プロジェクト活動の総括</p>	<p>教科書的な記載といえばそれまでだが、ボランティア活動に否定的であった学生も、実際に活動してみることによって何かを見つけることができたようだ。</p> <p>パソコンが苦手な学生も、実際に自分でホームページ作成をしたことによって自信が付いたり、デザイン上の工夫にも目が行くようになったりした。</p> <p>総体的にはうまくいったと思うが、対外活動での出席率向上などは課題として残った。</p> <p>ホームページ作成については、小職も遊びで作成したことはあっても専門的な目線で見ることができず、スキルという面での指導が出来なかった。</p> <p>出来上がったホームページは、素人ながらによく作ったと思える物であるが、作成する以上はコンテンツのほかに見せるための工夫というところも教えるべきと思うので、次年度のプロジェクト活動の選定に役立てたい。</p>

<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<p>ホームページ作成にあたっては、三河エリアのイベントを調べたり、警察官の講演のあとには犯罪などの実態を各自で調べてレポートを書かせたりすることによって、自学自習を心がけた。</p> <p>ゴミ拾い活動では事前の講習会の内容をもとに、犯罪に繋がる可能性を調べさせ、その実態調査という位置づけにした。</p> <p>ホームページ作成ではパソコンを使う事が前提であったため、パソコンが苦手な学生と得意な学生を組ませて作成を行った。</p> <p>あまり交流の無い学生の組み合わせとなりモチベーションが下がるかと思ったが、結果的に交流が広がった。</p>
<p>学生の資質の向上度合いについての感想</p> <p>次の4つの観点から</p> <p>(1) 主体性</p> <p>(2) 計画力</p> <p>(3) メンタルコントロール力</p> <p>(4) 傾聴力</p>	<p>(1) 主体性</p> <p>CTS 活動についてはどうしてみ受け身的な活動にならざるを得ないが、指示された事についてはしっかりと遂行できた。</p> <p>ホームページ作成の場面では、2名～3名1組で個別にページを作成させたが、情報処理の授業を履修している学生が中心となって作成が進んだ。</p> <p>(2) 計画力</p> <p>CTS 活動の日程や活動内容は、他団体の予定に合わせる部分が多く、そういった意味では計画自体を作ったとは言えない。</p> <p>ホームページ作成においても、計画的にと言うよりもその場のひらめきで作成していたことは否めない。</p> <p>(3) メンタルコントロール力</p> <p>ボランティア活動に積極的でない学生は欠席したいという思いもありながら協力はしてくれたと思われる。またそのような学生も最終的には良い経験が出来たという感想が出てきたので、先入観を持たず実行してみる、という意識付にはなったのではないか。</p> <p>(4) 傾聴力</p> <p>斎藤巡査の講義などはしっかり聞いており、またお話の内容から防犯等に問題意識が芽生えたと思われる。</p> <p>護身術体験では話はしっかり聞いて居るものの、実技が伴う状況となり一度賑やかになるとなかなか話を聞かない状態になってしまうため、メリハリの効いた力を付けさせる必要を感じた。</p>

プロジェクト成果報告書(教員)

チーム名(ゼミ名)		村松ゼミ
テーマ		We ♥ Roseプロジェクト ～バラ生産農家と提携した青いバラの制作と販売～
組織	連携先	「Watanabe Rose Nursery」渡辺農園 代表 渡辺 真臣 0531-37-0117
	指導教員	村松 史子
	メンバー	平岡 玲奈 (21236211)、平久江彩香 (21236512)、福政 香織 (21236213) 真野 莉沙 (21236214)、美野田綾子 (21236215)、伊藤 志帆 (21236301) 大場 弘菜 (21236302)、尾崎 朝水 (21236303)、川崎菜穂子 (21236305)
プロジェクトの企画意図 プロジェクト概要		東三河の代表的な産業でもある花農家（薔薇園）と連携をして地域の産業の実態を知り、地域のためにどのような貢献が出来るかを考える。考えた結果を発表し、行動に移すことを学ぶ。 薔薇は多くの人々が愛し、興味を持つものであることから、学生個々の得意とする分野を自覚し、販売の工夫・利益を得る事の大変さを体感し考え、就職に生かす。 その実施内容として ①新鮮な薔薇の販売ルートを学び地産地消のシステムを考えさせる。 ②バラの研究を学園祭に発表し、販売をする。 ③学生の自主性を育てる。
プロジェクトの活動内容		4月24日(水) 1限 ①Watanabe Rose Nursery 渡辺農園との提携の確認 ②アイディアの集約、取り組み内容の精査、計画 ③ 年間スケジュールの計画、確認 5月22日(水) 1限 ① 渡辺氏、来校し農園の状況説明と学生との顔合わせ ②年間の予定を渡辺氏とともに確認
		 

5月29日(水) 1限

①プロジェクト推進のためのアイディアの提出

- ・渡辺農園見学・・・8月と決定
- ・昨年のブログに替えて、LINE を活用し情報を共有する。

②地元の特産物を使った店でランチの会をする。日程は農園見学の日とした。

6月5日(水) 1限

①創造祭における模擬店名を決定。

「ボスと10人の仲間のお店」薔薇の販売を決定。

8月2日(金) 農園見学

① 渡辺農園訪問（ゼミ生8名+教員）欠席1名

- ・薔薇の種類と育てる苦労、温度の調整の工夫、良質の薔薇にするために多くの努力が窺われた。

現地でなければ得られない貴重な知識となった。



一本を育てる。
他は折り曲げる

- ・農作物「おくら」を溢れるほどお土産に頂いた。
- ・地元の特産物を使った店で「ランチの会を計画」していたが見送ることとなった。

10月2日(水) 1限

①学園祭に向けて、日程計画を立てる。

10月9日・16日(水) 1限

①学園祭に於けるシフトを決め、準備に取り組む。





頑張りました！！



ポスター掲示して
アピール

10月23日(水) 1限

- ①ラッピング用品の調達。
 - ・ガーデン・ガーデンの坂井さんにバラのラッピング指導をして頂く。

10月26日(土)・27日(日)「創造祭」

- ①学園祭バラの販売と調査した結果の掲示を行った。



- ・学園祭当日は、BOSSと共に「青いバラ」も販売する予定であった。
- ・10月15日の台風26号によりBOSSのハウスが強風にあおられ、つぶれてしまった。
- ・バラの調達も危ぶまれたが、なんとか100本を用意し、販売することとなった。
- ・学園祭には、手製のチャリティBOXを設置し、皆様のご理解を頂いて義援金とすることができた。

ご協力に心より感謝申し上げます。

うまくいったこと
(成功事例)

- ①学生への連絡方法として“LINE”を利用したことである。
グループに渡辺氏も参加し、常時学生たちの動きも把握してもらうことができた。

計画通り進まなかったこと
明らかになった問題点
(失敗事例)

- ①学生が希望しないゼミであったためかスタート当初は、バラのプロジェクトに興味を示さなかった。学生が感想・意見でも述べているが、意識を向かわせることに苦慮した。前半のゼミは教員主導となっていたが後半は、学生主体で動くことができた。

学生の自己評価アンケート結果を見ての感想・意見

プロジェクト活動の総括

・学園祭で物を売る大変さを学びました。どれだけの人が来てどんな人が買うのか全く予想もできませんでした。B O S S が台風で大きな被害を受け、来れなくなったこともあり、売れ残るなんてことは絶対にしたくないと思いました。これらのことを通じてゼミのみんなと前よりも話せるようになりました。

また、関係者のことにも気が回るようになりました。

初めての学園祭を体験し、1年生の時にも参加すれば良かったと思いました。

・バラ農園に見学の時に「このバラを私らで売っていいの？」と思いました。まったく売る実感が湧きませんでした。

見学の時に説明があったブルーローズは自分の目で見たいと思いました。学園祭のときには買おうと思っていましたが、B O S S の農園を襲った台風のため売ることができなくなり、とても残念なことになりました。ハウスがぐちゃぐちゃでそのことにびっくりしました。学園祭に初めて参加してみて結構お客がいてびっくりしました。

そして、自分が売る側になって思ったことは、やはりしっかりと声を出さないとお客さんは、商品を見てくれないし興味も持ってくれないことを実感しました。

・土曜日だけの参加でしたが、たくさんお客さまが来てくれたのがとても嬉しく思いました。初めはあまりお客が来ないので呼びかけをすることが大切と考えました。また、バラは買っていく人が少なかったので、持って帰るのが大変なのかなと思ったりもしました。

・創造祭に参加するのは「めんどくさい」「はずかしい」と思っていました。でも8月にバラ園を見学に行くとB O S S の苦労や育てることの大変さを聞き、本物のバラを見て「めんどくさい」「はずかしい」という思うことが恥ずかしく思い、だんだんとその気持ちが薄れてきました。実際に自分でやってみて商売や流通について知ることができ勉強ができました。そして、今まで話したことのない人たちとも話げできたので良かったと思っています。

・春にバラを売ることになった時は、あまり興味はなかったのですが、バラ園に行っているいろいろな色や種類があることを知り興味がわきました。創造祭の時にはしっかりと仕事ができたとします。常に大きな声で笑顔を意識して接客をしました。何よりもお客さまがみなさん優しく楽しい模擬店ができました。

・準備では、ガーデン・ガーデンさんに行き、バラの包装の袋、リボンを買いました。従業員の方が忙しい中でラッピングを丁寧に教えて下さいました。また水を入れるキャップは無料で頂きました。学園祭では陰でたくさんの方に支えられているのだと実感しました。

また、キャップを100個洗うのはとても大変な作業でした。本番では多くの方たちにバラを買っていただき嬉しい思いをしました。学園祭では、台風で被災してしまったB O S S のために売ろうという意思がすごくあったので、村松ゼミのみんなは頑張ったと思います。そして、自分たちで作ったチャリティBOXを置いたところたくさんの方から募金をして頂き感謝の気持ちでいっぱいです。

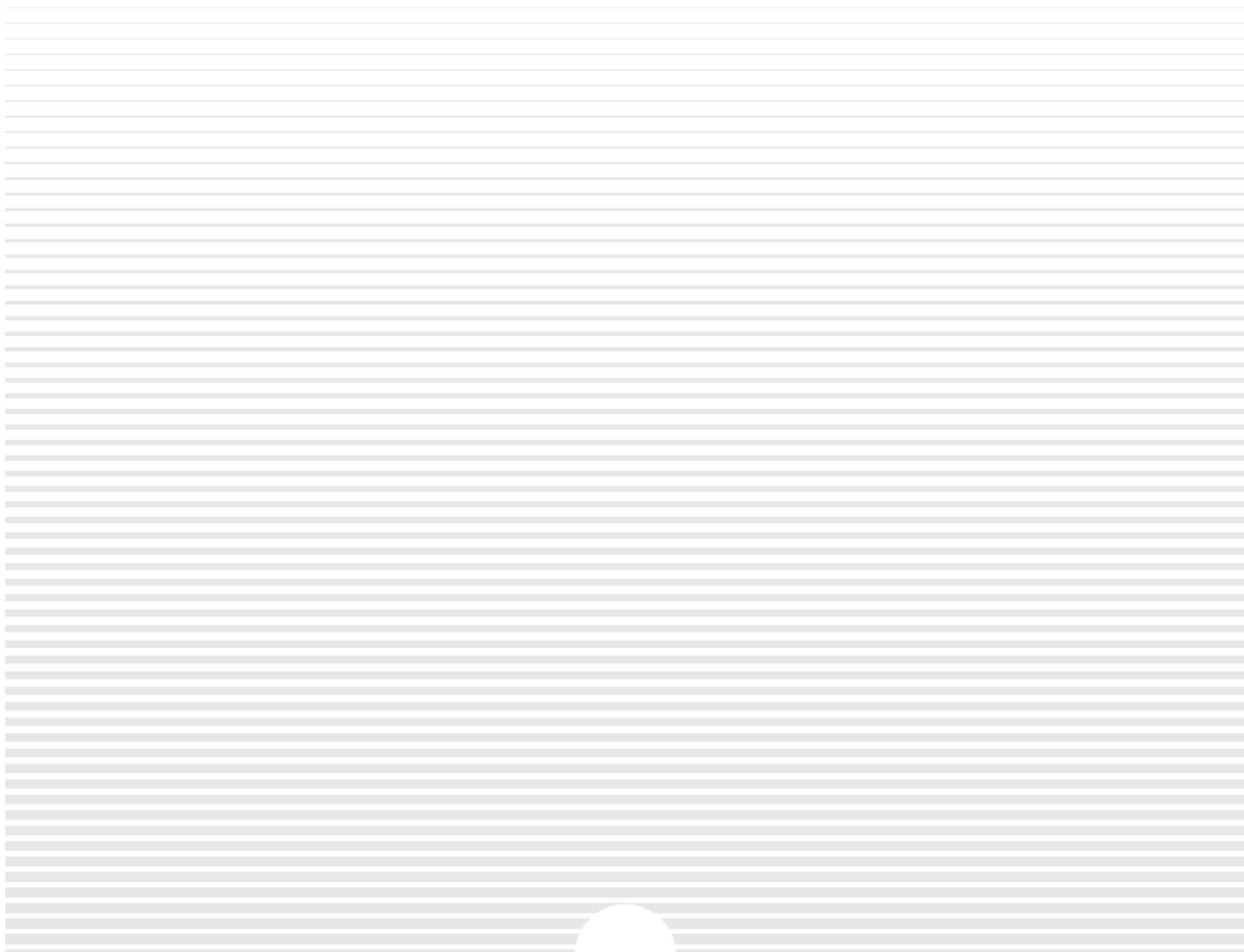
ゼミのみんなとも更に距離が縮まったと思うので卒業までみんなで頑張っていきたいと思いました。

・想定外の出来事がいろいろありましたが、無事に終えることができ良かったと思っ

	<p>ています。これはみんなの協力があつたからだと思います。特にBOSSにはとても感謝しています。台風のため一時はバラの販売をどうするのかで悩みましたが、100本のバラを用意して下さると知った時、私たちのプロジェクトは、人々に支えられているのだとつくづく感じました。</p> <p>当日、バラは売れる気配が全く無く困ってしまいました。いろいろと宣伝方法を工夫するなどの努力を重ねた結果、見事！完売することができた時はとても嬉しく思いました。</p> <p>ゼミの皆さんが、私を支え率先して協力してことが一番うれしく思いました。人は協力をし合うことで力を発揮することができるかと実感したプロジェクトでした。</p>
<p>プロジェクト活動で使ったアクティブラーニングの手法</p> <p>学生を積極的に参加させるためにどんな工夫をしたか</p>	<p>① 学生の特性を把握し、引き出すことに心がけた。例えば</p> <p>学生Aは、自分の考えを持って一人でも動ける。</p> <p>学生Bは、周りに惑わされない考え方ができる。</p> <p>学生Cは、ゼミ長としての自覚が出てきた。</p> <p>学生Dは、一般的な考え方ができ、発言も出来る。</p> <p>学生Eは、ものを言わず冷静に判断する。責任感がある。</p> <p>学生F、学生G、学生H、たちは、発言をしないが決まったことは協力する。</p> <p>学生Iは、自分の使命は全うする。</p> <p>秋学期になると動きが出てきたこともあり、教員は声掛けのみとしゼミ生同士の話し合いの機会を多く持たせた。</p>
<p>学生の資質の向上度合いについての感想</p> <p>次の4つの観点から</p> <p>(1)主体性</p> <p>(2)計画力</p> <p>(3)メンタルコントロール力</p> <p>(4)傾聴力</p>	<p>(1)主体性</p> <p>①渡辺農園の台風被害を知り、自分たちでチャリティBOXを作成し、一般の方たちにも協力をお願いし募金としたその行動は教員も感激した。</p> <p>②プロジェクト発表用のパワーポイント作成は、教員は助言のみ行いゼミ生全員で作成した。</p> <p>③LINE運営を学生が行った。</p> <p>(2)計画力</p> <p>①当初は、教員主導であったが、学園祭に向けた日程、当日の割り振りなどは、褒めたいと思っている。</p> <p>②プロジェクト発表計画も学生全員で考え取り組んでいた。</p> <p>(3)メンタルコントロール力</p> <p>①学生間の問題も無く、出席も良く落ち着いてプロジェクトに関われた。</p> <p>②渡辺農園の台風被害を知り、状況を案じる気持ちとチャリティに結び付けることができたことはメンタルコントロール力がついたと考えている。</p> <p>(4)傾聴力</p> <p>①学生同士で意見の交換ができ、納得した上での行動が行われた</p>



2013年度中部圏大学 人材育成チャレンジ報告



2013年度 中部圏大学人材育成チャレンジ報告

1. 大学名 豊橋創造大学短期大学部

2. 事業を遂行する上で現在達成しようとしている目標
産業界ニーズを反映した教育改革力の育成・強化

3. 分類（該当する項目すべてに☑）

- | | | |
|--|--|------------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> アクティブラーニング | <input type="checkbox"/> インターンシップ | <input type="checkbox"/> 産業界ニーズの把握 |
| <input checked="" type="checkbox"/> 地域・産業界との連携 | <input type="checkbox"/> 学内コンセンサス | <input type="checkbox"/> 教育組織・体制整備 |
| <input type="checkbox"/> FD・SD・教職員研修 | <input checked="" type="checkbox"/> 評価 | <input type="checkbox"/> 基礎学力 |
| <input type="checkbox"/> 学生の質の変化 | <input type="checkbox"/> 初年次教育・研修 | <input type="checkbox"/> リーダーシップ |

4. 目標を達成するための課題

地域組織・企業へのヒアリングを通して再確認した産業界ニーズを科内で共有し、その産業界ニーズを反映した「社会人基礎力」育成のために、プロジェクト活動を中心としたアクティブラーニングを実施する。

5. 課題の分析（障害となる要因）

①板挟みになる短大 一限られた期間で資格と社会人基礎力育成に取り組む必要がある

- ・学生や保護者からは資格取得支援を求められる。
- ・実社会からは、コミュニケーション能力などの社会人基礎力を求められる。
- ・学生は、社会人基礎力の必要性を実感していない。
- ・実社会は、学生の人物重視で、学業成績をそれほど評価しない。

②教員の意識改革

- ・なぜうまくいっている現状を変えなければならないのか。教員も学生も満足している。
- ・専門知識を効率よく身につけさせるため 15 回の授業を設計してきた。
- ・「学生の授業評価アンケート」にも応え、学生の満足度をあげてきた。
- ・教員は専門知識を求められ、教育力を問われることがなかった。
- ・教育内容は更新・改善されてきたが、教育方法は変化してこなかった。

③アクティブラーニングをどうやって授業に取り入れるのか

- ・教員は、わかりやすい授業にする努力を続けてきた。学生に「考える力」はつかなかった。
- ・どうやったら「社会人基礎力」を育成できるのか、コンセンサスがない。
- ・アクティブラーニングを進めていくための具体的スキルが身につけていない。

④エビデンス、評価、改善をどうするのか

- ・学生だけでなく、教員も「ポートフォリオ」という形で実績を積み上げる必要が出てきた。
- ・「社会人基礎力」が育成できているのか、第三者に対して説得力ある方法で説明できない。
- ・キャリア教育・アクティブラーニングと「社会人基礎力」育成との相関がうまくとれない。
- ・評価の結果、学生の足りない資質がわかっても、それを伸ばす仕組みがわからない。

6. 課題を克服するチャレンジ事項

①資格取得と社会人基礎力育成のどちらにも取り組む（課題①への対応）

- ・正課の開講科目でも、授業時間内で資格取得支援を行う。
- ・グループワークを導入しやすいプロジェクト活動で社会人基礎力を育成する。
- ・一般授業科目でも、アクティブラーニングの導入を始める。
- ・授業科目と育成できる資質の対応関係を示す「カリキュラムマップ」を作成する。
- ・カリキュラムマップに基づいて、各開講科目のシラバスを改訂する。
- ・アクティブラーニングに対応できるように、各科目の準備学習を強化する。

②教員の意識改革を進めるために、連携FDを活用する（課題②への対応）

- ・他大学の先駆的取組を教員に紹介する。
- ・大学のユニバーサル化に対応できている大学とそうでない大学の差が出始めた。
- ・大学のブランド力よりも教育力が注目されるようになってきた。
- ・他大学の、教員の意識改革への取組を紹介する。

③アクティブラーニングの導入を始める（課題③への対応）

- ・他大学の事例を教員に紹介する。
- ・連携FDで学んだ、ちょっとしたコツ、スキルを教員で共有する。
- ・学内で、外部講師を招いて勉強会を開催する。

④社会人基礎力育成の評価方法を検討する（課題④への対応）

- ・豊橋創造大学とともに、PROGの活用方法を検討する。
- ・連携している名古屋商科大学をはじめ、既にPROGを活用している大学の事例を研究する。
- ・ルーブリックによる評価の検討を始める。

7. 現時点でのチャレンジ実績

短大独自の事業について

- ・平成26年度から、正課の授業科目で資格取得支援をする。
- ・プロジェクト活動を実践しており、8月に中間報告書を提出している。
- ・社会人基礎力への対応を盛り込んだキャリアマップを作成中である。
- ・秋学期から、一般授業科目でアクティブラーニング導入を始める。

連携事業について

- ・6月7日に、学内で「教育改革フォーラム」を開催した。
名古屋商科大学・亀倉正彦教授のPROGを用いた教育効果測定についての講演
短大部から、「アクティブラーニング」に取り組む際のチャレンジについて発表
- ・8月21日に、産業界ニーズGP短大連携会議を開催した。
各短大の取組内容の理解、現場の情報共有
- ・8月25日/26日に、東海Aチームで合宿研修を実施した。
各大学の取組内容の理解、現場の情報共有
帝京大学・土持法一教授のアクティブラーニングについての講演

8. 中部圏産学連携会議等を通して、地域・産業界とともに検討したい課題

※報告書に基づいた類型ごとに分科会をつくり議論するということであれば、「アクティブラーニング」とか「評価」について考え抜くグループに参加したい。

※「高次のアクティブラーニング」とか「インターンシップの高度化」を標榜する大学・短大が多いが、最初からやる気のある学生に絞り成果をあげるというのではなく、科に所属するすべての学生を対象にして底上げをはかることにチャレンジしたい。孤立している学生を見放さない大学・短大と議論したい。

●アクティブラーニングの照準はどこに合わせたらいいのか。

教育の質保証のためには、中・上位を対象にし、下位層の学生に過度にこだわらないことだという。大学のユニバーサル化の時代、小規模校ではレベル別クラス編成もできず、上位半分を伸ばすことを心がければよいのか。

PBL も、やる気があり、伸びしろのある学生だけを対象にすれば、成果はあがって当然なのだが。

●PBL の代表的な活動である「プロジェクト」運営について、直面する課題を議論したい。

プロジェクト担当教員として個別のプロジェクト運営についての議論でもよいし、活動全体を俯瞰する形で、プロジェクト活動というプログラムをどう活性化するかという議論でもよい。

●全員を対象とした場合、「アクティブ」を仕掛ける前に、どうやって個々の学生の「モチベーション」・やる気を引き出したらいいのか。

●「社会人基礎力」の優先度については、当面の即戦力を求める人事担当者とは、大局的な見方ができる経営者とは、異なるのではないか。

●正課外の活動は、やりたい教員や、やれる教員が関わる物好きなボランティア活動か。

●評価可能な達成目標とは何か。

目標設定に学生をどう関わらせるのか。教員の側で、授業科目の目標設定さえ、しっかりできていれば学生は目標を気にしないで、半期後に身についた力を自己評価できるものなのか。

●アクティブラーニングで、学生のどういう資質を引き出そう・伸ばそうとしているのか。

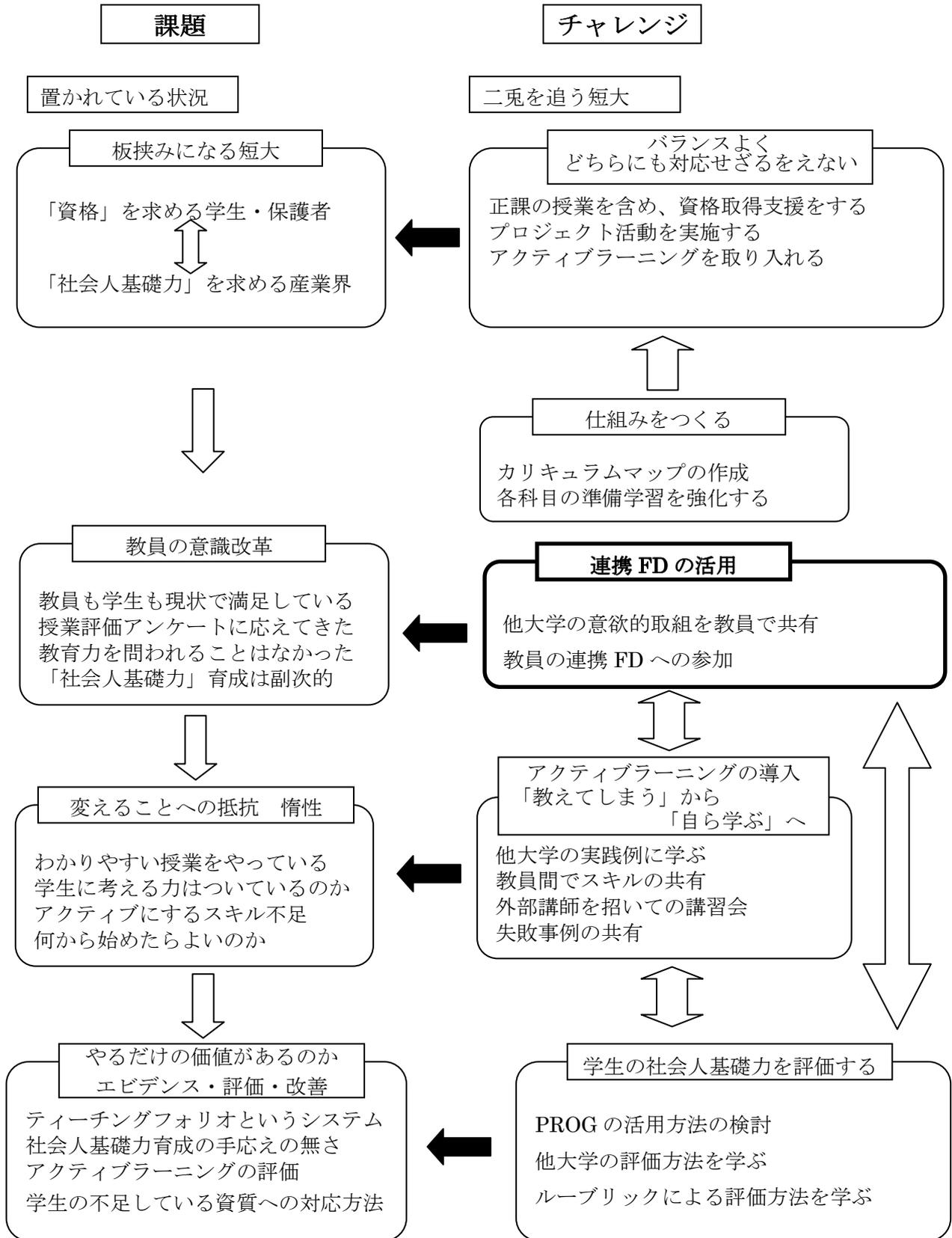
アクティブラーニングを取り入れている授業では、どう成績評価するのか。

アクティブラーニングの成果を評価できる定期試験はどうつくるのか。

●アクティブラーニングの出来・不出来は、教員の資質に依存する面が多いような気がする。

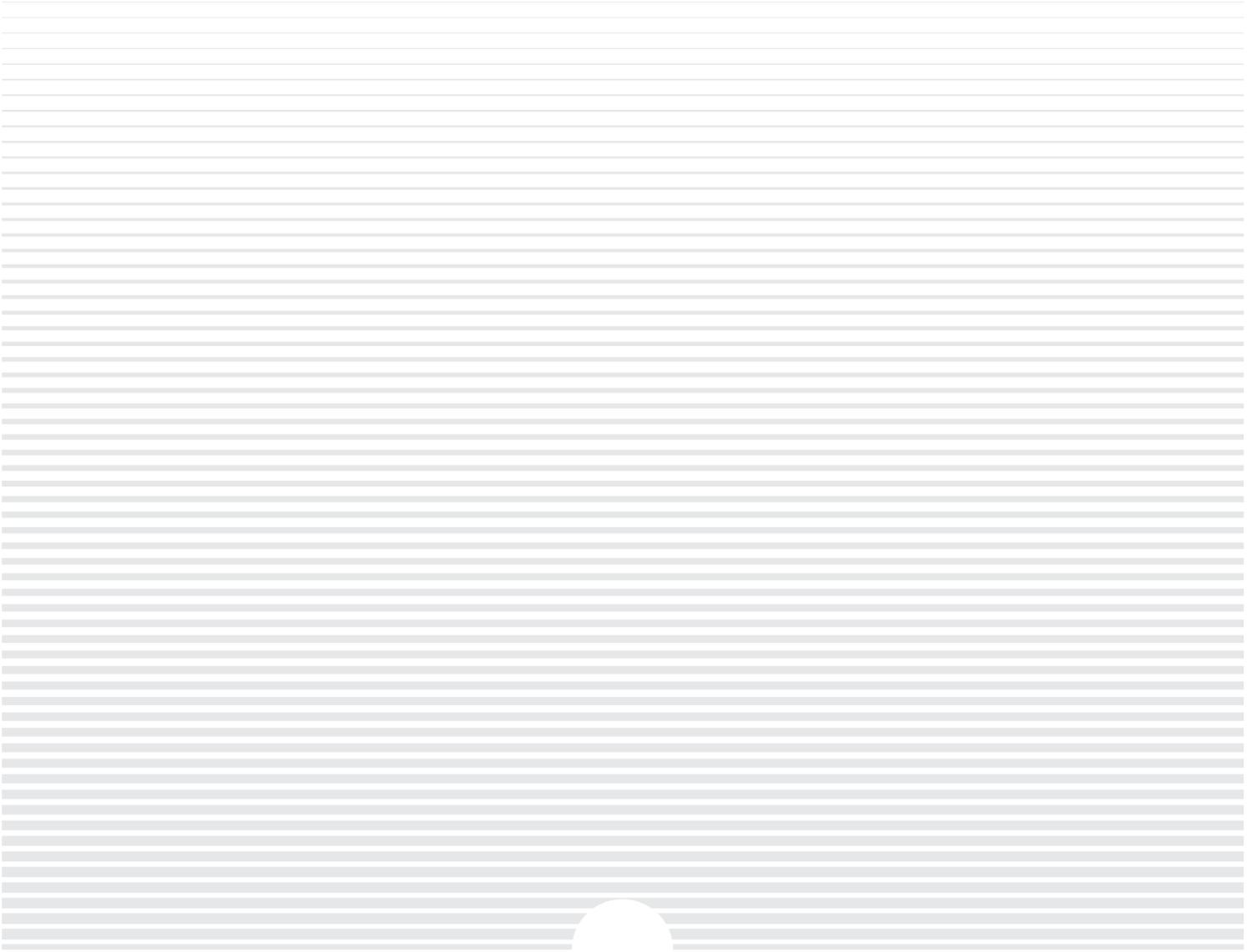
よい事例を提示し、水平展開できるものなのか。

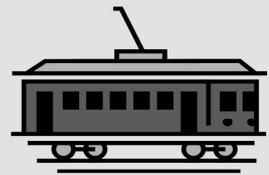
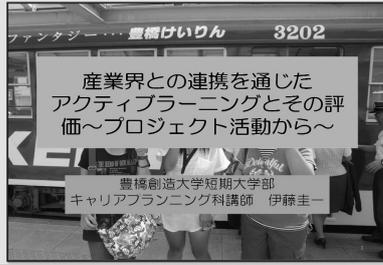
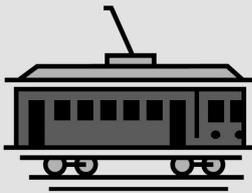
目標：産業界ニーズを反映した教育改革力の育成・強化



3

大学教育改革フォーラム in東海2014 出展資料





女子力を活かした路面電車への企画提案

このタイトルに行きつくまでに1か月以上かかりました。
 教員からは、意見の交換が良くできたと思っていたのですが……

おでんやビールでない企画の路面電車はないのかな・・・という疑問から始まりました。

リーダーがこの発言を拾い、テーマに取り上げて、とても良い視点だなと思ったのですが……

豊橋鉄道様と打ち合わせをしてイベントに参加することになりました。

学生たちが素人であることから体験をさせていただいたのです。
 実は企業活動と言うものをわかってもらうための配慮でした。



夏の運転体験会に参加



お手伝いと言うよりはお客様扱いをしていただきました。

LRTサミットクイズ企画



街にクイズの問題を探しに出かけました
 電車に乗る・見やすい・ポイント全てをわまりたくなるという課題に取り組みました。

最後に座談会を行いました

活動を企業の方と振り返りました




学生側からの提案としては

乗り場、集合場所をわかりやすくしたほうがよい
 企画は少人数の方がよい
 路面電車沿線外の人も親しんでほしい
 参加する子どもに対する接し方の工夫が必要
 など提案をしました。

企業がなぜイベントをするのか？

路面電車に乗車していただく目標

↑
 ↑子どものころから親しんでもらう(それが運転会!!)
 ↑

公共交通機関なしでも生活できる現状
 企業とは「頑張ればよい」わけではなく評価のためには「方向性が人事」と理解できたかな??

座談会の結果、看板ができました




プロジェクトに対する評価は？

学生側	教員側
無計画な印象が残った	意見の交換もよくできてテーマも自ら決めてよかった

企業と教員での評価の違い

企業	教員側
採用したい学生をひとり指名	採用したい学生は選別も多くプロジェクトの中心人物ではない

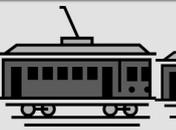
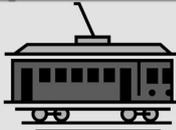
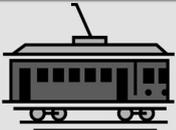
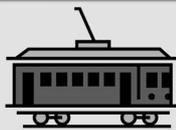
企業と教員 バランスのとれた評価を目指して

企業の評価

教員の評価
 動機づけをしっかりとる

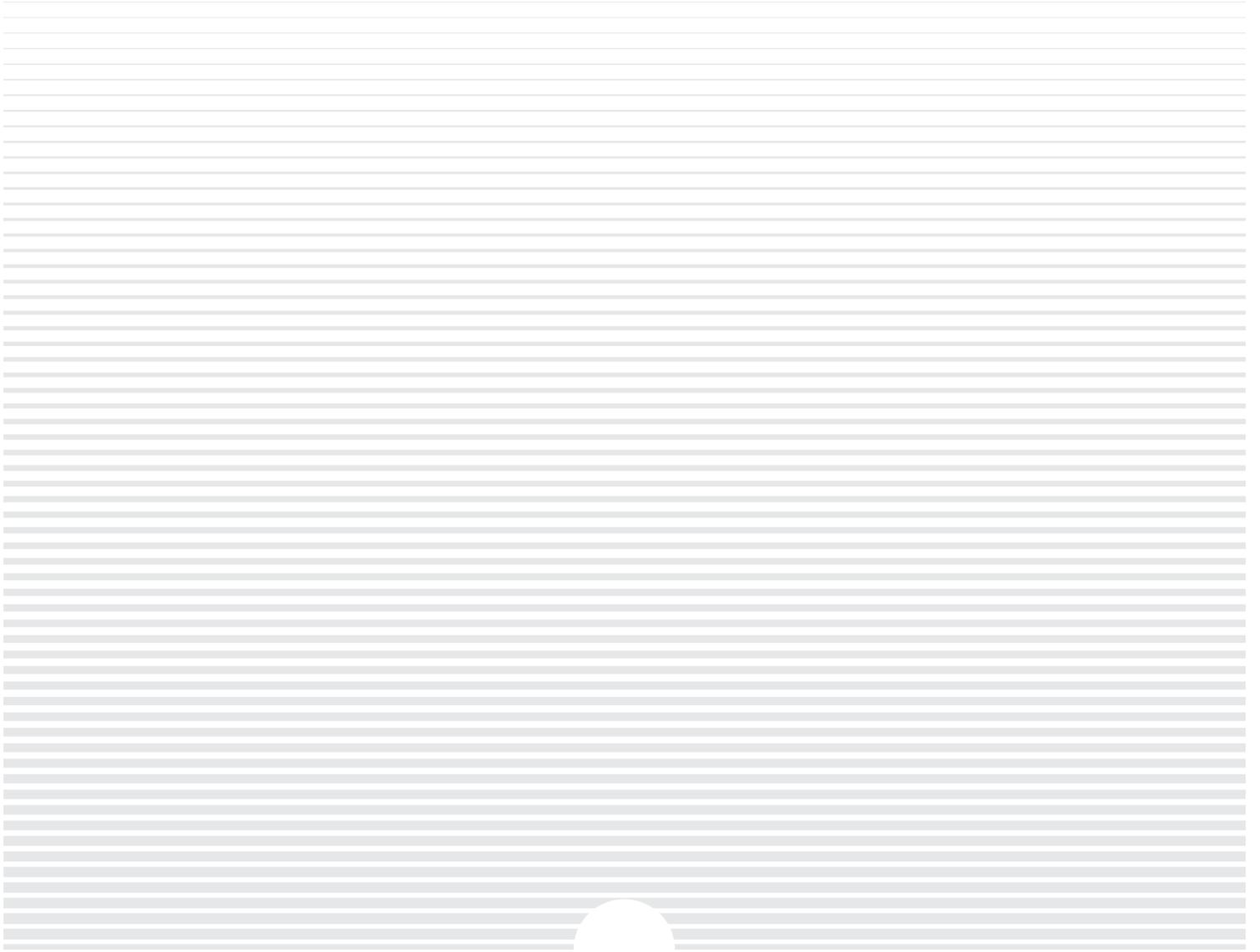


強い動機づけ
 活動から社会人基礎力が身に付くという学生への動機づけが必要。教員がその目標に向かって指導していくことで初めて企業の方と評価が一致する。



4

プロジェクト活動 協力企業・団体一覧



愛知県豊橋警察署

泉園茶舗

ごとう製茶

こども未来館ここにこ

豊橋市産業部農業支援課

豊橋市都市計画部都市計画課

豊橋鉄道(株)

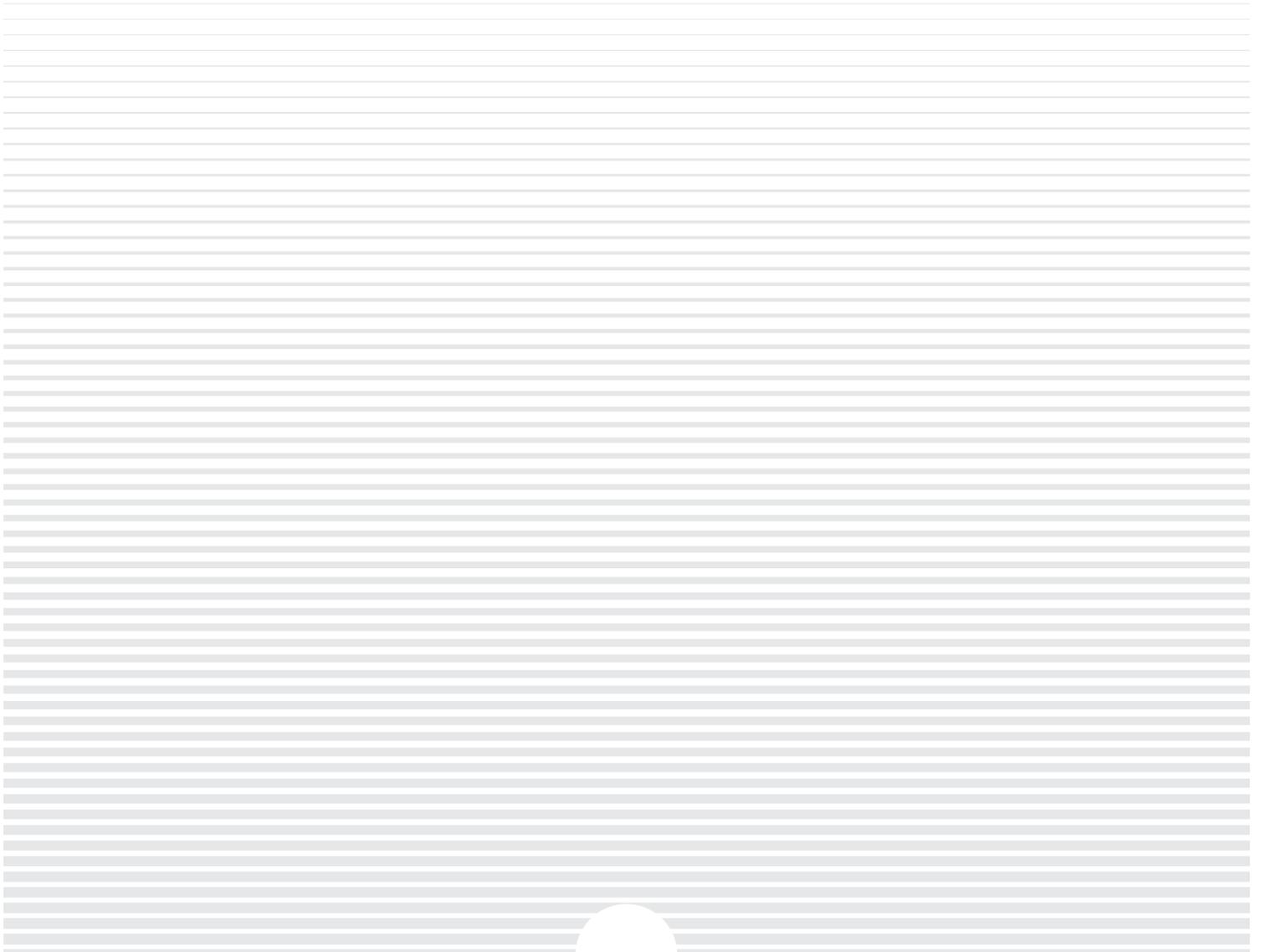
特定非営利法人 穂の国森林探偵事務所

ワタナベローズナーセリー

(敬称略順不同)

5

各種発行パンフレット



プロジェクト活動報告

豊橋市「下田川」流域の環境保全活動

地域産業界連携 教育力改革プロジェクト

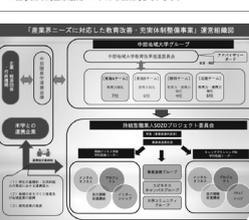
事業推進責任者 佐藤勝尚

今回のプロジェクト活動報告書では、本事業のうち平成25年度に下記③にある「地域企業・組織と連携したプロジェクト」にて実施した学部・短大それぞれがプロジェクト活動の内容について報告する。最後に、この事業にご理解・ご協力いただいた地元団体企業各位をはじめ、関係各位に御礼を申し上げます。

豊橋創造大学・豊橋創造大学短期大学部

地域産業界連携教育力改革プロジェクト

- ①メンタルケア講座の正規科目化への取り組み
- ②自己理解促進のための採用面接の疑似体験（バーチャル人事体験）
- ③地域企業・組織と連携したプロジェクト体験
- ④学生・連携大学、地元企業を含めた3者間の協働によるインターンシップ実修（学部）とアクティブラーニングの手法を使った教育実践の共有（短大）



- ①メンタルケア講座の正規科目化への取り組み
メンタルケア講座は、ストレス耐性やメンタルケアの不足に対応するため、セルフケア・ピアサポート・目標設定・自律達成などの理論的学習と実践的演習を組み合わせて学生の経験値を高める教育プログラムであり、2年生3月および3年生7月の3回の講義である。講座を受講した学生の多くは、講座の内容を理解し、就職活動での自己分析の大切さやメンタルケアへの意識付けも出来たと考えている。
- ②自己理解促進のための採用面接の疑似体験（バーチャル人事体験）
自己理解促進のための採用面接の疑似体験は、面接官のふるまい・誘導・誘惑を経験することの出来る模擬面接をオンライン上で実施して体験させ、企業側のニーズを理解させ、自らの職業観を形成させる。学生は、他学生の良い点や改善点を自分の立場に照らし合わせて学んでいく。PROGを導入し、自らが持つ現時点でのスキルを理解させるとともに、受講前後の学生の成長度を把握できるようにした。
- ③地域企業・組織と連携したプロジェクト体験
補助事業全体では社会人基礎力養成を目的として、学生が企業と連

- 携プロジェクトする教育プログラムを展開している。地域企業連携プロジェクトでは、学生が企業をはじめとする外部組織とプロジェクトチームを組んで、独自性と有期性のあるプロジェクトに取り組んでいる。H25年度は、豊橋創造大学経営学部でプロジェクト、短期大学部でプロジェクトを実施し、12月に協力企業参加のもと成果報告会をおこなった。
- ④学生・連携大学、地元企業を含めた3者間の協働によるインターンシップ実修（学部）とアクティブラーニングの手法を使った教育実践の共有（短大）
情報システム学部では、本年度は3年生7名が、ワーラーループなど5社事業所のインターンシップに参加した。10月の報告会では、参加学生が実習内容や実習を通して学んだ内容について報告した。報告会終了後は協力企業担当者との座談会を実施し、インターンシップの活性化に向けて意見交換を行った。また短大ではプロジェクト活動でのアクティブラーニングに加え、一般授業科目でもアクティブラーニングの手法を取り入れる活動を行った。アウトプット重視という点で、学生に文章を書かせたり、ディスカッションをさせたり、発表をさせるといった学生の発言を促している。

プロジェクト活動報告 ～プロジェクト活動を通じた社会人基礎力の育成～

経営学部経営学科長 三好哲也

社会人基礎力は、「職場や地域社会で多様な人と仕事をし、必要な基礎的な力」として求められる能力要素である。主体性、課題発見力、発信力、傾聴力などの能力要素を「前向きな姿勢」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力要素としてとらえられている（下表参照）。これらの能力要素は、社会での活動を通じて醸成されるものであるが、産業界のニーズとして大学や短期大学の卒業時に基礎的な能力を持つ人材が望まれる。

地域企業連携プロジェクトでは、企業をはじめとする外部組織と学生がプロジェクトチームを組んで、独自性と有期性のあるプロジェクトに取り組んでいる。企画・進捗管理・報告といった4段階のプロセスを踏まえた実践を通して、社会人として必要とされる主体性、計画力、状況把握力、発信力の諸能力を養成する。参加する学生は、プロジェクトメンバーとして企業から仕事の水準での助言や指示を受けて役割を担い、それに基づいて自主的に行動できる力の育成を目的に教育を展開し、H25年度は大学および短期大学部でそれぞれ8つのプロジェクトを実施。地元団体企業各位をはじめ関係各位にお礼申し上げます。今後も、ご協力をお願い申し上げます。

図表 3つの能力・12の能力要素

3つの能力	12の能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し果敢と行動する力
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかに準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

出典：経済産業省「社会人基礎力」

SOZO 豊橋創造大学

●情報ビジネス学部 キャリアデザイン学科 ●経営学部 経営学科 ●短期大学部 キャリアプランニング科
〒440-8511 豊橋市豊橋町中川町10-1 地域産業界連携教育力改革プロジェクトセンター (外部部キャリアセンター内)
TEL 050-2017-2104 (直線) FAX 050-2017-2112 (直通) インターネット [URL] http://www.sozo.ac.jp/ [E-mail] gpa@ml.sozo.ac.jp

プロジェクト活動

豊橋創造大学短期大学部 キャリアプランニング科

食の伝達「大学生コックさんのクッキング教室（こどもクッキング）」プロジェクト活動報告

担当教員 朝倉 由美子 協力 豊橋市こども未来課 コッコ



近年の食環境の変化で加工品や中食、外食が増え家庭で食事を作れる機会も減り、家庭での料理の伝承（食育）も薄れていると思われる。そこで、子どもの頃から食事を自分で作る楽しさや必要性を学び、技術を身に付けて家庭で調理した食事を家族と共に楽しみたい。そこで、調理師コースの本プロジェクトの学生は学んだ調理理論や技術と料理を作る際の段取りを外部に発信することを通じて、料理の楽しさを伝えるとともに、コミュニケーション、技術指導力、全体に気を配る心を育成するために、小学生対象のクッキング教室を実施している。本年度は14回実施することができ、毎回担当する部門を変えて常に緊張感の中で主体性を持って実行する力を育成することができた。今後も継続して行う予定である。

女子力を活かした路面電車の企画提案

担当教員 伊藤 圭一 協力 豊橋鉄道株式会社 豊橋市役所都市交通課



路面電車の企画には女子学生の参加できる企画がないのにはなぜかという疑問から始まった企画です。貴重なことに豊橋鉄道の協力を受けることができました。彼女たちの意見を企業の企画に聞いていただくことで、企業の営業、経営について触れることができました。路面電車の企画に参加して、企業の視点、お客様の視点の両方を感じる機会を得ました。その体験したことを産談会形式で企業の方に聞いていただき、企画の仕方、提案の仕方、企画の仕方などを学ぶことができました。

産談会で「うちの会社に入りませんか？」と企業の方から言われて学生がおり、学生たちも企業の方の目を惹くことができました。また、駅前電車の案内に対する提案をしたところ、実際に「おでんちゃん」の乗車口の看板付き、提案が通り形に形になり学生も達成感を得ることができました。

豊橋の特産品「うすら」をキーワードとしてプロジェクト活動を展開する

担当教員 今泉 仁志 協力 豊橋市農産部農産課 豊橋市観光課



プロジェクト活動のテーマ選定は、毎年恒例の作業である。iPadで、あれこれ検索する内、現在の「ゆるキャラ」ブーム中、豊橋市のゆるキャラを見つけた学生がいた。なかでも「うすらちゃん」は、自前く、誰にも知られていない、これを取り上げようという話になり、「うすら」を中心に、どんな活動ができるのか議論を進めていった。具体的な活動は、「ゆるキャラ」や「うすら」について学習し、動画で「うすら」の魅力を伝える動画を制作し、「うすらちゃん」を大学構内に設置することとした。学内での水戸展開として、調理師コースの学生に「うすら」を使ったレシピを考えてもらった。「ココロ」で開催している「大学生コックさんのこどもクッキング教室」で「うすら」を使った料理を振舞った。

お茶入門プロジェクト

担当教員 木下 賀津子 協力 かつや製茶所 茶葉課



調理師フードコーディネーターの資格取得を目指す学生として「茶の知識」を身につけることは、今後社会人になってからも、役立つと考えることでこのテーマを選択した。活動内容は「豊橋市内の茶農家が開催する「お茶作り体験」に参加して、茶摘みから製造までの工程を体験する。②おいしいお茶の淹れ方を学ぶ。③日本茶の専門店に足を運ぶ。煎茶・抹茶等についてレクチャーする。④学園で、茶葉を使った作品展示及びカフェを開催する。」などである。学生達は、茶の歴史や健康効果も学ぶと共に煎茶・抹茶・紅茶の3グループに分かれて、それぞれの茶葉についての研修やお茶を使ったお菓子作りにも取り組むことができた。今回は、本プロジェクトで得た知識をコミュニケーションツールとして役立てながら、豊かな人間関係を築いていくつもりである。

防犯プロジェクト

担当教員 中島 剛・細谷 邦夫 協力 豊橋警察署生活安全課



働く意欲と意欲の向上を目指して、「人と人のつながり、絆を大切に」、社会に貢献する学生生活を送るために、自分たちが何ができるか。を考え、先輩たちが発足したボランティアチームCTS (Clean Team SOZO)の活動を継承した。

活動は、月に一度の地域巡回と豊橋警察署と連携した駅前のキャンペーン活動が主であったが、学内の自転車点検や、少年立ち寄り支援行事などにも参加した。地域巡回やキャンペーン活動は、最初戸惑っていたが、大きな声を出してやる姿が見られた。活動の中で、行事に参加したボランティア団体の方との交流も積極的に行われた。また、CTS防犯活動に対し、豊橋警察署から感謝状をいただき、学生たちも自分たちの活動に自信を持つことができた。(中島 剛)

細谷ゼミでは、CTSでの活動を広報する目的でCTSホームページを作成しました。当初は東三河でのイベントを盛り込むつもりでしたが、まずは自分たちの活動を知ってもらうことから始めることにしました。授業で習ったことを思い出しながら作成しましたが、いざ作ると意外と難しく、ブラウザで出た上り方を確認してみるとイメージと違ったりして悪戦苦闘の末出来上がりになりました。プロが作る物には程よい出来だりましたが、私たちの活動を知って貰うきっかけになると嬉しく思います。(細谷邦夫)

秋葉道・木の駅プロジェクトへの企画・調査協力

担当教員 花岡 朝明 協力 特定非営利活動法人 穂の国森林療育事務所



本プロジェクトは新城市野地区で行われている秋葉道・木の駅プロジェクトの企画調査協力をテーマに1年間活動してきました。この木の駅プロジェクトとは、日本国内の様々な地域で展開されており、広域にわたる森林整備やこれら地域資源を活用した地元経済の活性化を目的とした事業(社会実験)です。今回、花岡ゼミプロジェクトでは、①新事業等の企画提案。②地域連携(アキハ道)の利用実験への参加。③プロジェクト発信(木の駅ニュース)の記事作成とそのための商店街調査と1つ3つの活動を行いました。新企画については、学生提案のアイデアが採用され11月に地元小学生を対象とした森林教育の体験事業としてスタートしました。また、地域資源の利用実験や「お店紹介」記事の取材で地元商店街の方々とも交流をさせていただきました。

We ♥ Rose プロジェクト ～バラ生産農家と提携した青いバラの制作と販売～

担当教員 村松 史子 協力 Watanabe Rose Nursery 花屋事務所



地域産業界連携教育力改革プロジェクトの取り組みは、田原市の花農家と連携して実施しました。花農家の方との顔合わせを行い、常に情報交換できる体制を学生が考えました。花農家の見学を実施してからメンバーの取り組み方に変化が現れました。学園祭における「バラ」の販売に向け、自ら行動する取組が開始されました。しかし、学園祭目前に花農家から台風被害に会い、毎年作成される「青いバラ」の制作が出来ませんでした。一時は、販売できると楽しみにしていたが、花農家のご尽力で美しい「つゆ」仕入れができました。利益が得られるように販売価格を設定し、販売利益と学園祭で集められた方からの義捐金を加え、連携先の「ら農家」にプロジェクトを締めくくりました。

【短大】平成25年度 地域産業界連携教育力改革プロジェクト 行事実績一覧

通年	①「メンタルタフネス育成講座」の実施	②「自己理解促進講座」の実施	③「プロジェクト活動」の実施	④アクティブラーニング共有 (毎月定例の科金を利用)	⑤連携事業推進	⑥エビキタスキャンパス	⑦大学コミュニティ
4月	・ベネッセ講座の成果測定・評価 (～6月)	27(土) PROGRESS結果報告会 ・スチューデントプロジェクトシステム開発支援 (4月～8月)	16(火) キックオフ講演会 ・プロジェクトの企画開始 ・プロジェクトの活動開始 (準備が整い次第・ゼミごと)	15(水) アクティブラーニング勉強会(1) 21(火) AI研究会重振打ち合せ 17(月) 教育効果測定・指導方法WG 19(水) アクティブラーニング勉強会(2)	26(金) 第1回 東海A(教育力)チーム会議 参加 18(土) ワークショップ「教育改革の壁を破るチャレンジ」(主催:中部地域大学教育改革推進委員会) 第2回 東海A(教育力)チーム会議 参加 20(木) 教育力改革フォーラム(第1回)教育力向上研修会)実施	・学内IT環境の維持・管理・監視 (状況に応じて改善活動) ・ポータルサイトの運営・改善 ・Sozo Platz追加開発と運用 ・HandbookおよびSozo Platzの活用推進策の検討 ・プロジェクト管理システム開発支援 17(水) プロジェクト管理アプリ導入支援 ・プロジェクト管理システムの情報更新 ・各種システムのユーザーアカウント作成 ・スチューデントプロジェクトシステム開発支援 (4月～8月)	前年度卒業生就業状況調査の集計・分析 (～5月)
5月	・セルフモチベーション講座の企画 (～6月)					・携帯情報端末の配布準備	
6月			21(金) プロジェクト実行計画書提出			12(水) 携帯情報端末の配布と 13(木) 利用説明会	・卒業生就職企業訪問(求人開拓等) (～3月)
7月	31(水) セルフモチベーション講座			11(月) 教育効果測定・指導方法WG 8(月) 教育効果測定・指導方法WG 第3回ミニディニング 17(水) アクティブラーニング勉強会(3)			
8月	・セルフモチベーション講座の成果測定・評価		9(金) 中間報告書提出		21(水) 短期大学連携 第1回会議 参加 26, 27(月・火) 東海A(教育力)チーム連携FD合宿研修 参加 3, 4, 5(火～木) 平成25年度教育改革ICT開院大会(主催:公益社団法人私立大学情報教育協会) 参加 10(火) 東海A(教育力)チーム連携FD「社会のニーズに対応した教育改革に向けた」参加 2(水) 「産業界ニーズ事業特別ゼミナール」(主催:中部大学) 参加 24(木) 第3回 東海A(教育力)チーム会議 参加		
9月	・メンタルタフネス講座の反省・改善点の検討 (～10月)			9(月) 第2回教育力向上研修会 実施計画 11(金) 第2回教育力向上研修会 15(火) 第2回教育力向上研修会 打合せ 28(月) 第2回教育力向上研修会 実施		11(水) 教員向けスチューデントプロジェクトプログラム 利用説明会	
10月							26(土) 卒業生就業状況調査 27(日) ” 28(月) 学内企業説明会 (OBによる説明の実施)
11月		・自己理解促進講座の具体的検討開始		27(水) 教育効果測定・指導方法WG 第4回ミニディニング	14(木) 平成25年度 第1回中部産学連携会議 (主催:中部地域大学教育改革推進委員会) 28(木) 産学協同就業力育成シンポジウム2013 (主催:Future skills protest研究会) 参加	19日(火) プロジェクト管理アプリ ver.2.3 公開(iOS 7 対応)	
12月			11(水) 成果報告書(学生)提出 16(月) 発表用パワーポイント資料提出 18(水) 成果発表会 18(水) 学生アンケートの実施 18(水) 学生座談会の実施	18(水) アクティブラーニング勉強会(4)		携帯情報端末の物品確認 (対象:1年生)	5(木) 短大OG交流会の実施
1月		・自己評価シートの改訂	24(金) プロジェクト最終報告書 (教員)の提出 24(金) 広報用原稿の提出		31(金) シンポジウム「産業界ニーズに対応した初年度教育のチャレンジ」(主催:東海A(教育力)チーム) 参加 31(金) 平成25年度達成目標に係る評価報告書提出 (主催:東海B(教育力)チーム) 参加	携帯情報端末の回収 (対象:2年生)	
2月	・次年度メンタルタフネス講座の計画 (～2月)	3, 4日 自己理解促進講座 11(月～2月に実施)	プロジェクト反省会 (科金にて実施)		6(木) プロジェクト活動報告会 第4回 東海A(教育力)チーム会議 参加 18(火) シンポジウム「PBLで育む教・職・学 一同志」(主催:東海B(教育力)チーム) 参加 7(金) 本年度報告書提出 8(土) 大学教育改革フォーラムin東海2014(主催:大学教育改革フォーラムin東海2014実行委員会、名古屋大学高等教育研究センター) 参加		卒業生就業状況年次調査の実施 (～2月) 8(土) 学内企業説明会 (OBによる説明の実施)
3月		・自己評価シートの集計・反省					卒業生就業状況追跡調査 (～4月)

平成 24 年度採択「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」
『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』成果報告書 平成 25 年度版

平成 26 年 3 月 26 日 発行

編集発行 豊橋創造大学短期大学部
地域産業界連携教育力改革プロジェクト委員会
(渉外部キャリアセンター内)

〒440-8511 愛知県豊橋市牛川町松下 20-1

TEL 050-2017-2104

FAX 050-2017-2112

<http://www.sozo.ac.jp/>

